

2013年度博士学位申請論文

革命的サンディカリスト大杉栄
—「生の創造」に基づいた革命展望—

総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻

金 炳 辰
(キム・ビョン・ジン)

2013年度博士学位申請論文

革命的サンディカリスト大杉栄
—「生の創造」に基づいた革命展望—

総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻

金 炳 辰
(キム・ビョン・ジン)

【凡例】

- ・ 本文は原則として新字新仮名を用いるが、引用文は原書の表記にしたがい異体字・旧字体や英文を用いる場合がある。
- ・ 日本語文献の場合、書籍名と新聞・雑誌名には『』を用い、雑誌記事名には「」を用いる。
- ・ 外国文献は原題どおりに表記する。
- ・ 本文中の引用箇所は「」、もしくは字下げで示し、筆者による強調の場合は< >と《 》で示す。
- ・ 引用文における下線及び省略（中略）は、脚注でのことを含めてすべて筆者による。
- ・ 特記のない限り、大杉栄の文章の引用は、現代思潮社『大杉栄全集』（一九六三～一九六八）による。引用の原文を確かめる必要がある場合、その初出から引用する。
- ・ 年号はすべて西暦を用いる。

【目 次】

革命的サンディカリスト大杉栄 —「生の創造」に基づいた革命展望—

序論 —————[1]

I. 研究目的

1. アナーキズム思想の特徴と日本における受容
2. 研究動機及び問題意識

II. 研究方法と構成

(注 釈)

【序論、参考文献】

第一章 日本における進化論受容の一脈

： 幸徳秋水と進化論的社会主義 —————[18]

1. はじめに
2. 思想の基礎としての「進化論」
3. 競争：社会発展の原動力
4. 協同：もう一つの社会発展の原動力

5. 進化論と社会主義との折衷

6. 社会進化としての「革命」

7. おわりに

(注 釈)

【第一章、参考文献】

第二章 「生の拡充」 として読み解く労働運動

： 大杉栄の進化論的解釈 —————[52]

1. はじめに

2. 学問への探求心と革命への渴望

3. 進化の新たな出発点としての「革命」

4. 大杉栄とベルクソン、創造的進化の一動力である「本能」

5. 生命主義と労働運動、そして「生の拡充」

6. おわりに

(注 釈)

【第二章、参考文献】

第三章 大杉栄の「政治的な理想」論

： 戦略としての「自己獲得運動」の意味 —————[81]

1. はじめに

2. 自治の連合制：機能的な民主主義

3. 「新労働運動」の勃興と「科学的社会主義」への批判

4. 自己獲得運動：知覚と実践の統一

5. 労働組合による革命

6. おわりに

(注 釈)

【第三章、参考文献】

第四章 大杉栄の「革命的サンジカリズム」

： 労働組合運動にもとづく実践的な革命観—————[111]

1. はじめに

2. 日本の労働組合運動の成長と大杉栄の「実践方法」

3. 急進的な社会変革への「協同」闘争とその「亀裂」

4. 「サンジカリズム」の貫徹とその脱却から見るアナ・ボル論争

5. 労働運動の「本義」と「理想」の対立がもたらした「決裂」

6. おわりに

(注 釈)

【第四章、参考文献】

結論 —————[153]

I. 本論文のまとめ

II. 今後の課題

【補 論】—————[163]

朝鮮の社会主義者における大杉栄

： 1920年代初期の朝鮮社会主義の知的受容

【初出一覧】

【参考文献】

序 論

I. 研究目的

本論文は、大杉栄（1885～1923）を革命的サンジカリストとして考察を試みるものである。大杉栄は、周知のように日本近代における無政府主義者の代表格とされてきた。そのレッテルの影で、彼が何を主張し、活動してきたのか、その思想の内実自体はこれまで明らかにされてこなかったといって過言ではない。それゆえ、大杉の思想、その核心をなす革命戦略、そして、その革新的な理念である「生の創造」を中心に、それが同時代の思想状況において占める意味を明らかにすることを目的にする。

1. アナーキズム思想の特徴と日本における受容

まず、はじめに「アナーキズム」という言葉の定義を確認しておこう。アナーキー（Anarchy）は古代ギリシャ語がその起源で辞書的な意味では「支配する者のない・指導原理を持たない」という意味の他、「無秩序」「無法状態」「無政府状態」という意味で用いられる。これは始原・根源・統治や支配を表す”archos”に”not”か”without”を意味する接頭語の”an”を付けて用いた言葉である¹。この言葉の語源は近現代におけるアナーキズムの特徴を暗示しているとも言えよう。それは権威に抵抗し、権威から由来する如何なる規律や抑圧に対

して闘う自律的な個人たちの間における同意に基づく思想である。そのために、様々な部類のアナーキストが存在するが、ほとんどのアナーキストの共通点は社会における権威と制度上におけるすべての規制を憎むことである²。

この用語は18世紀のカント（Immanuel Kant, 1724～1804）ように「アナーキー」を「暴力がない法と支配」と言って肯定的に捉える場合もあるが³、19世紀以降は政治や経済分野における「混乱」と「無秩序」を「アナーキー」という否定的な用語として用いるのが一般的になった。とりわけ、フランス革命の際、「アナーキスト」という用語は主に政敵を誹謗するために用いられた。

「犯罪が放任され、財産は侵害され、個人の安全は蹂躪される状態を『アナーキー』あるいは『アナーキスト』と規定」⁴した。このような用語に新たな使い方を加えたのがピエール・ジョゼフ・プルードン（Pierre Joseph Proudhon, 1809～1865）であった。彼は「アナーキー」を「支配者・統治者の不在」あるいは「自由」という意味で解釈し、かつ、それを「秩序」であると主張した。そして、ミハイル・バクーニン（Mikhail Alexandrovich Bakunin, 1814～1876）もプルードンに従って自らを「アナーキスト」と自称した。このように「アナーキー」、「アナーキスト」という用語が正反対に用いられるようになった主な原因は「支配」を「秩序」の必要前提として認めるか、それとも「支配のない」状態を「秩序」と見なすかという見解の違いに他ならなかった。

アナーキズムの意味が運動としてその姿を現したのは中世末期からである。教会の絶対権威に対抗して、平等を強調した原始キリスト教に戻ろうとした異端運動がその始まりであった。フランス革命の時期にはアナーキストの活動や著作があふれ出た。アナーキズムという言葉の流行——今日的な意味ではないにせよ——が見られたのである。

近代的な意味におけるアナーキズムの理念を初めて明確に表した人物は ウィリアム・ゴドウィン（William Godwin, 1756～1836）であった。ゴドウィン

は政府権力の正当性を裏付けようとする如何なる政治理論も拒み、法の廃止までも主張した⁵。彼は政府とそれを支える各種制度について批判し、個人の自由と人間の尊厳を強調し、さらに啓蒙によって理想的な社会が実現できると唱えた⁶。

ゴドウィンとともにアナーキズムの面目を如実に見せたのはマックス・シュティルナー（Max Stirner, 1806～1856）であった。彼は博愛のみならず国家・社会・人間性、そして神のような抽象的なすべてを幻影として退け、徹底的な個人主義を主張し、アナーキズムに新たな地平を開いたと言われる⁷。

「アナーキー」という用語が政治的な意味で本格的に用いられたのは、1849年に始めてアナーキストと自称したプルードンによる⁸。プルードンはアナーキーを近代社会の政治的な理想と唱えた。「人間が平等の中から正義を求めるように、社会はアナーキーの中で秩序を求める。アナーキー、つまり主人や主権者の不在、我々が日々に接近していく統治形態がまさしくこれである」⁹。

プルードンは労働者たちが暴力革命によってではなく、経済的行為による社会の変革が実現可能だとする「相互扶助主義」を主張した。プルードンがいうアナーキストの社会組織は幾つかの小単位が中央権力のない同盟を形成することであった¹⁰。このようにアナーキズムという用語が1880年代から今日のような意味を以て定着され、多様な議論が飛び交うようになった。

アナーキズムの歴史は、総じていえば、「個人の自由」のために、自由を抑圧するすべての強権との闘いであった。その闘争の対象は時代によって宗教、絶対的な王権はもちろん、フランス革命以後には人民主権と言われた少数の代表者たちによる議会政治に対しても対抗し、ロシア革命以降の甚だしく中央集権化した国家権力にも抵抗した。

アナーキズムにおいて、政治的権利や総体性を表す生物学的・社会的単位は個人である。根本的にアナーキズムは自己中心主義から出発した思想である

¹¹。一般的にアナーキズムは個人と社会を見る観点によって個人主義（individualism）、相互主義（mutualism）、集産主義（collectivism）、アナルコ・コミュニズム（anarcho-communism）、そしてアナルコ・サンジカリズム（anarcho-syndicalism）と細分できる¹²。

一般的にアナーキズムとは、政治的・社会的・経済的な支配体制のない社会の創造を志向する政治思想で、「個人の自由」と「社会の平等」を最大化しようとするシステムとも言える¹³。そしてアナーキズム思想のもつ様々な傾向は大体において以下のように整理することが出来る。

まず、反抗感情のアナーキズムである。アナーキストは自らを反抗者と自称する。マックス・シュティルナーは「アナーキストは一切の神聖なものに束縛されず、無数の偶像破壊を行う」と宣言した。このような「知性の放浪者」あるいは「反抗者」は「多くの人々に慰安を与える対象を神聖不可侵の真理とみる代わりに、むしろ伝統思想の枠を超えて敬虔を放り投げて自由奔放な批判に耽溺する」¹⁴とされる。プルドンも同じく徹底的な反抗感情の持ち主であった。彼は「公職に就いた者ども」、哲学者、僧侶、行政官、学術院会員、ジャーナリスト、国会議員など、すべてを無視した。彼らにとって「民衆とはいっても征服され、沈黙させ、鎖に張り付け、犀や象のように巧みに捕えて、飢えを利用して手なづけ、植民地にするか戦争手段として血肉を絞り出す対象にしか思わなかった」¹⁵といい、人間の反抗感情こそ「人間が持つ潜在的で原始的な本能の表出」¹⁶であると唱えた。つまり、アナーキズムは学習されるものではなく、自ら感得するものであると言えよう。

次は統治機構に対する不安感である。人間の歴史が始まって以来、人々を捉えている偏見の内、統治機構に関する偏見が最も深刻であると見なすのがアナーキスト共通の見解である。プルドンは特に「我々の精神のこのような幻想、つまり博物館や図書館に置くべきこの幻想の除去が自由な理性を持つ者の

最初の意味」だと述べ、統治機構に対して厳しく批判した。統治機構の弊害に対抗し、徹底的な個人主義を構えたマックス・シュティルナーは「統治機構と私、両者は互いに敵である」「すべての統治機構はそれが一人の専制であれ、一集団による専制であれ、変わらず専制的である。すべての統治機構は必然的に今日の我々の呼び名で言えば、専制主義的である」として統治機構に対する敵対感を露わにした。

三番目は代議制民主主義に対する敵対心であり、直接民主主義に対する熱望であった。アナーキストは権威主義的な社会主義者よりも冷酷に代議制民主主義の欺瞞に対する批判を行った。ブルードンによれば「民主主義は立憲専制政治以外の何物でもない」あるいは「人民が主権者であると宣言するのは我々の家父長たちの術策である。実のところ、人民は主権者という称号を持つだけで少しも威厳がない王であり、王の真似ごっこしているだけである。人民は君臨するが統治できない。彼の主権は普通選挙の定期的実施によって委任され、3、4年毎の権利の譲渡が繰り返される。統治者は玉座から追放されるが、その大権はそのまま保存される。教育もまともに受けていない民衆の手中にある投票用紙は土地所有、商業、産業などの各界の有力者たちの同盟に利用される欺瞞手段に過ぎない」¹⁷と主張した。このようにアナーキストは投票行為で代表される代議制民主主義による「民衆の解放」を欺瞞的なものと見なして原則的に信用してこなかった。代議制民主主義とは今日の民主主義における唯一で効果的な制度ではあるが、その短所が浮き彫りになってもいる。多国籍企業や巨大政党のように資本と権力を用いて世論を操作し歪曲する勢力は、投票を通して正当に選出されたとは言え、市民たちの権益を真っ向から無視する可能性もある。あるいは、民主主義の手続きさえとれば、多数者による個人や少数者に対する犠牲の強要を認めていいわけではない。

アナーキズムの四つ目の特徴は権威主義的な社会主義に対する批判であ

る。アナーキストたちはマルクス主義に対して権威主義的な社会主義という批判を行う点で一致する傾向を示している。確かにアナーキズムもやはり社会主義ではあるが、個人に対する圧力と外部の意志を強いる強権的な社会主義には反対であった。シュティルナーもやはり共産主義——マルクス主義の以前のユートピア共産主義ではあるが——では労働者は結局、他の支配勢力によって従属されるだろうと予想した。共産主義下における労働は社会的に強いられた労役にすぎないと考えたからである。プルードンも同様に「個人は専ら集団に従属されるという原理から始まる」「政府中心的・独裁的・権威主義的・教祖主義的共産主義体制」に強い不安感を抱いていた。

このようにアナーキズムの根幹は結局、人間に対する無支配、支配に対する否定を意味するもので統治権力や支配権力がない状態を意味する。

日本をはじめとする東アジアにおいてアナーキズムは、19世紀に社会主義の一思潮として紹介された。東アジアに輸入され、展開したアナーキズムは西欧と同じく一切の強権や権力の集中を否定する思想であったが、個人の自由よりは社会問題の解決に多くの関心を傾ける違いを見せた。日本の幸徳秋水、中国の李石曾や師復、朝鮮の申采浩、柳子明などの代表的なアナーキストには皆クロポトキンのコミュンを中心におく社会主義的アナーキズムの影響が強かった。クロポトキンの倫理を強調する思想体系は東アジアの伝統的な倫理政治観と多少とも類似性を感じさせただけでなく、帝国主義や軍国主義に対抗する主張が当時の状況で受け入れやすかったと思われる。なお、反帝国主義や反軍国主義という共通な流れとともに、各国の事情にあわせてそれぞれの展開を見せる。日本で反資本的な性格を強めて社会主義社会の建設を目指す運動が展開したとするなら、中国では清朝に対抗する「排皇革命」から辛亥革命後の政治革命や文化革命の性格を、そして朝鮮では日本の植民地支配に対する民族独立運動という性格を強く持つようになった。

日本におけるアナーキズムの輸入はアナーキズムそれ自体というより、社会主義の一つの思潮として、あるいは社会主義、共産主義、アナーキズムなどが混在した形で受容された。とりわけ西欧に対する関心や知識人たちの影響によって多様な西欧社会主義系列の思想とともに日本へ紹介された。

近代日本の思想で社会主義は、かなり大きな比重をもっていた。19世紀後半から社会主義の思想が世界各地に広まってゆくが、日本は、それが論壇でメジャーの位置を占めた国の一つとなった¹⁸。自ら社会主義者であった幸徳秋水（1871～1911）と石川三四郎（1876～1956）は、「日本社会主義史」（1907）で日清戦争終結とともに、社会主義運動の舞台が開かれたと論じた¹⁹。

近代化にもかかわらず、あるいは近代化ゆえに、地主・小作関係を基軸に深く根をおろした貧困は、苛酷な労働を初めとするさまざまな悲惨を生み出した。その克服を課題とする意識は西欧産の思想の輸入を促した。急速な産業化と幾度かの戦争に対する非戦論の成長とともに、西欧社会主義の広がりや労働問題についての認識の向上は社会主義政党や組織の形成が望まれる下地になった²⁰。労働者と資本家の対立が表面化し、労働者たちは生存のための闘争を始める²¹。しかし、実際には当時における日本の労働者数は社会の中心的存在になれるほどではなかった。従って東アジアの社会主義は資本家と労働者の対立構図の中から芽生えたというより、西学といった新しい思潮の受容過程で醸成されたものとも言えよう²²。アナーキズムも他の社会主義と同様に外部から移植し、かつ日本社会内部における問題をその外部の思想に照らす方法を取った。しかし、このことは以後の社会主義の成長に一定の障害にもなったと思える。

日本に「シャカイトウ」を名のる組織が出現したのは、1880年代であった。1882年の東洋社会党と車会党がそれであった。長崎県の島原で結成された前者は樽井藤吉(1850～1922)らの発起にかかり、「平等を主義」として「天物

共有」を掲げて、農民への土地の平等な分配を唱えた。

日本における労働運動は高野房太郎（1868～1904）や片山潜（1859～1933）などを中心に立ち上がった。彼らはアメリカ労働総同盟（American Federation of Labor、略称AFL）をモデルにして、労働者たちに自覚を促すことを始めた。高野房太郎は若くして渡米し、労働運動の経験を持つ人で、片山潜も渡米して労働しながら学生生活を送った人で、帰国後はキリスト教徒として社会事業に携わっていた。一方、自由民権運動左派の系統を引く幸徳秋水やキリスト教に立つ安部磯雄（1865～1949）や木下尚江（1869～1937）らによって、弱肉強食的社会に代わる原理として、たぶんに志士仁人意識をベースにした理想的未来社会像であった²³。1898年、片山潜や安部磯雄、幸徳秋水などによって組織された社会主義研究会は1900年1月に社会主義協会へと発展した。幸徳秋水と片山潜は地主制の廃止と土地の共有、労働者の革命などを主張して漸次に社会革命思想へと進んだ²⁴。しかし、先に述べたように社会主義と労働運動が階級間の軋轢という社会構造的な問題に基づいていたわけではなかった。

1901年5月20日に結成された社会民主党は日本初の社会主義政党という意義は持つものの、結成一日に政府によって解体された。社会民主党は「社会主義と民主主義の実現」を目標にし、自由民権運動の唱えた普通選挙権を引きついて要求し、それを通して社会問題の解決を図った。しかし、軍費廃止と人民直接投票、貴族廃止などの主張が問題になり、政府の解散命令を食らった。

日本で社会主義と区別されるアナーキズムという用語が初めて現れたのは1902年、当時の東京帝国大学に在学中の煙山専太郎（1877～1954）の『近世無政府主義』（1902）であった。『近世無政府主義』はツァーリ政権下のロシアのナロードニキと虚無党員たちの革命活動を集中的に紹介して、前篇にはロシアの虚無主義の源流と歴史、虚無党の機構と運動を扱った。後編では西欧のアナーキズムとインターナショナルを紹介した。この本で煙山専太郎はアナーキ

ズムを「無政府主義」と翻訳し、東アジアにおけるアナキズムという用語が暴力と破壊、無秩序と反対のための反対勢力といった否定的な印象を持つのに一役買った²⁵。なお、無政府主義という言葉自体が政府のアナキズム弾圧に主な口実を提供したことも否めない。1906年には久津見蕨村が、孔子・釈迦から無所有的アナキズムを発見し、西欧アナキズム、とりわけプルードンやシュティルナー、そしてクロポトキンやマルクスの思想を紹介するため『無政府主義』（1906）を刊行した。

1903年に結成された平民社は、日本の社会主義を語る時に看過できない団体である。日露戦争を目前に非戦論を旗印に、その時期の社会主義運動における最も注目に値する活動を行った。幸徳秋水は平民社の週刊『平民新聞』を通して非戦と反軍国主義を唱えた。

平民社の活動は、幾つかの点で評価できよう。まず、既成の帝国主義的な社会を否定し、はじめて社会主義的な社会像の骨幹を提示したことである。その指導者的な理論家の位置にあった幸徳秋水は1902年の著作『廿世紀ノ怪物 帝国主義』で、帝国主義と社会主義を比較しながら、「帝国主義はいわゆる愛国心を経となし、いわゆる軍国主義（ミリタリズム）を緯となして、もって織り成せるの政策にあらずや」²⁶と論じている。二つ目は、平民社は日本の歴史上初めて本格的な非戦論を展開したことである。週刊『平民新聞』を舞台にした非戦論は、内村鑑三（1861～1930）や安倍磯雄のキリスト教の人道主義の絶対平和主義から、幸徳秋水の社会主義的反戦論まで様々な立場の非戦論が掲載された。とりわけ幸徳秋水は「社会党の戦争観」（1904年8月21日）という記事で、「戦争の目的は、植民地及び新市場の拡充に在」り、その福利を受けるのは資本家や政治家などの少数階級に過ぎないと述べるなど、戦争の原因を帝国主義そのものから見出す議論を展開した。三つ目は、アナキズムの母胎になったことである。いわゆる日本の三大アナキストとして数えられる幸徳秋

水・大杉栄・石川三四郎は皆、平民社出身であった。

上述したように日本のアナーキズムは無政府主義という名で紹介され、反国家的なイメージのせいで政府からの強力な牽制を蒙った。なお、自由民権運動の勃興期のなかで数多く翻訳・翻案されたロシア虚無党や皇帝暗殺の物語は、アナーキズムを当時の日本の若者たちにロシアの虚無主義やテロリズムと同様な思想的範疇として認識された。日本のアナーキズムはその始まりから、実践的な運動ではなく書籍の中の存在であり、その性格も明確に規定されずにいた。現実と離されて輸入されたアナーキズムという限界はその後の日本アナーキズムの進路にも否定的な影響を与えた。

日本政府は1883年以来、教科書を対象とする思想検閲制度を施行した。教科書の思想検閲は皇国臣民を創り出すことを目的に図られた義務教育制度の一過程であった。教科書は天皇制に害する内容を検閲したが、民主主義と社会主義も当然に検閲の対象であった。これと関連して日本における社会主義の輸入は明治政府が近代化を推進する中で、社会主義に対する予防策として政府の承認の下で警戒対象として紹介された。社会主義の思想を最初に紹介したのは知識官僚の西周であった。西周（1829～1897）は『社会党論ノ説』（1879）において社会主義を紹介した。『社会党論ノ説』では通有党（コミュニスト）、経済学派（エコノミスト）、公共党（ソシャリスト）、鳥有党（ニヒルリスト）の思想は一層大改革、つまり転覆を目指して人間本来の人倫を廃するものであると書いた²⁷。そしてこのようなグループによる儒学的倫理の破壊を予防するために社会主義の流布を否定した。

アナーキズムが社会主義の思潮として日本に紹介されはじめたのは、他の社会主義の多様な思潮と同様に、19世紀後半の1880年代以降だった。しかし、当代の日本人にはアナーキズムに対する認識や理解はほとんどなかったし、アナーキズムと社会主義に対してもはっきりと区別がついていなかった。それ

故、初期日本のアナーキストらは、まず社会主義に接した後にアナーキストへと分化した。社会運動からアナーキズム運動が組織的に分化した時期を基準にすれば、日本と中国におけるアナーキズムの受容時期を20世紀初めの頃に考えて良い。韓国はそれより遅れた1919年の3・1運動以後と考えられる。

東アジアのアナーキズム運動史において本格的に社会主義から分離したアナーキズムが登場したのは、1906年に幸徳秋水がアメリカでアナルコ・サンジカリズムの影響を受けて日本に戻り、自らの立場を公開したときである。こうして、1906年前後に、日本の第一世代のアナーキスト指導者達が集団として活動を展開し、社会的政治的運動として広がり、多数のアナーキストたちが輩出してゆく。

2. 研究動機及び問題意識

これまで大杉栄に関する研究は良し悪しはともかく、いささか陣営論理に嵌めこまれてきた感がある。例えば、竹山護夫『大正期の政治思想と大杉栄』（名著刊行会、2006）や三谷太郎『大正デモクラシー論 吉野作造の時代』（東京大学出版会、1995）などで、大杉栄を「反政治」を唱えた人物として描きだすことが行われてきた。これは、論者自身が「政治」を議会や行政府の権力をめぐる闘争に限定づけたうえで、大杉栄の論理はその枠組みには嵌らない異質なものとしているに過ぎない。しかし、今日では権力現象は、もはや国家権力にだけ留めて考えることはしない。権力の網状目は社会の全構造の中に張り巡らされていることがよく知られるようになってすでに久しい。大杉が唱えるサンジカリズムはその権力の発生機関として最も有力な産業現場における「権力闘争」をその基底に据えていた。この点において彼の視座は一定の「政治的」な立場を取っていた。ここでいう「政治的」とは、彼が資本家権力に挑

戦したことはむろんだが、それだけでなく、彼が抱いた闘争の本質的な部分が権力闘争であったという点である。彼がとっていた闘争は議会を中心とする、いわゆる「政治の場」ではなく、「労働者の作業場」という新しい空間で展開された。議会や行政を中心とする権力よりもっと重要な権力に着目する思想に対して、「反政治」というレッテルを貼って批判に代えるのはいささか問題があると思われる。大杉が「自己獲得運動」や「人格運動」と呼んだこの方法を制度的な面で積極的に解釈するなら「産業自治論」や「労働者自主管理」といった形が想定されるはずである。

また、大杉栄は現行の議会制民主主義における「代議制」に問題点を見出して、被選挙権者と選挙権者との間隔がより密着できる「代議制」を提案した。彼は現在までも続いている、地域に基づく包括的な代議制における効用に疑いを持ち、当代の制限選挙のみならず、普通選挙が実施されて構成する議会ですえ、はたして民主的で国民の意志を代弁できる機構たり得るか、と議会制に対する不信感を表明した。その代案として特定な目的と関連して自分たちの見解を代表できる代表を選出する、代表と選挙者が密着した機能的な参加民主主義を志向したと見られる。

このような様々な模索の中で、大杉栄は新たな社会組織の根幹を生産機構に関わる労働組合に求めた。労働組合は労働者たちが自らの能力を伸長させる場として期待された。また労働組合を生産における有機的な単位、未来産業組織の核心として見込んだ。労働組合を闘争機構のみならず、新しい体制内で機能できる新制度としての意味を持たせていた。

大杉栄はこのように経済的領域である労働組合を重視したが、彼は経済決定論的な立場ではなかった。むしろ、既存の「科学的社会主義」にも、その決定論的な側面に対して反発を抱いていた。社会主義への移行は外部に存在する自然法の作動に任せた歴史の単純な結果としては期待しなかった。彼にとって

社会主義への移行は、実行の中で労働者が社会の全構造を理解し、諸種の社会的傾向と内的な憧憬を合致させる意志的な運動によるものでなければならなかった。そのために、サンジカリズム運動は新時代の建設とともに「自己獲得運動」の意味を持たせていた。

つまり、大杉栄の思想を分類すれば、広くはアナキズムに属し、確かにアナルコ・サンジカリズムに属するが、その細部においては大杉栄の言説はアナキズム一般に還元できないものも有している。「個」「個人」「生」「本能」「自由」などの大杉栄が駆使するキーワードが歴史全般における一般的な意味ではなく、彼が活動した時代における特殊な位相を持つために他ならない。例えば、シュティルナーがいう「個」がヘーゲル哲学体系に対する対抗概念であったとすれば、大杉栄が唱える「個」は自然科学における全体の構造の基本単位という意味を濃厚に含んでいる。そのため、大杉栄が活動した大正年間における同時代的な概念構造を参考にしつつ分析を行うことが必要になる。

Ⅱ。研究方法と構成

以上の問題意識により、本論文は、各章に次のようなテーマを立てて考察を展開したい。主な先行研究はそのテーマに従って各章ごとに提示する。

まず、第一章では、大杉栄がその影響の下から出発した幸徳秋水の社会思想について、しばしば社会進化論の傾向が指摘されてきており、これを進化論の観点から検討する。そして、それと幸徳秋水による社会主義受容との関係を探り、その特徴と同時代性を考察する。これによって、大杉栄が大正期に展開する革命的サンジカリズム、その彼独自の側面を探るための一端諸がひらけると考えられる。

具体的には、幸徳が一見、社会主義と衝突するようにも思える、進化論の

「競争」をどのように扱っていたのか、また、反対に社会主義の特長ともいえる「合同」や「協同」をいかに進化論の中で説こうとしたかを探り、各々に根拠を与えた論理を考察する。それによって、儒教からの影響と説明されてきた倫理性についても新たな視点が提示できると思う。その上で、幸徳秋水がいう「科学的社会主義」の意味を考察し、アナキズムへの移行との関係を探ることにする。

第二章は、大杉栄の進化論に基づいた社会主義解釈に注目し、その特徴を究明する。社会主義理論を進化論および自然科学にアナロジーする方程式を探って、連続的な漸進主義としての「無政府主義」から、「生」や「本能」の拡充を唱える大杉栄独自の「革命的サンジカリズム」に展開して行く経緯を明白にする。

それには、大杉栄の思想的な歩みにおいて進化論的な観点が及ぶ磁場を探ることが必要であり、当代の日本や欧米に波及していた社会主義思想と大杉栄との関係を明らかにしたい。また、大杉栄が進化の新たな出発点として位置付けている「革命」に関する意味を、ベルグソンの創造的進化論との影響関係の中から導き出すことにする。そうすることによって、大杉栄が、一見観念論的な要素のように思われる「生」や「本能」に着目する経緯を考察し、それらが労働運動論として、いかに展開していくのかを浮き彫りにする。

第三章では、第二章で論じた大杉栄の革命観を踏まえて、大杉栄が抱いた社会主義社会への展望を、その「政治的な理想」論と当代における社会主義理論の動向とを比較しながら、彼の革命ビジョンを探る。

具体的には、大杉栄が考えた政治的な理想を「自治の連合制度」に着眼することにより探ってみたい。科学的社会主義に対して批判的な観点を取る大杉栄の論理的な整合性や、労働者の意志を本源とした社会主義社会の成就を唱える彼の姿勢について検討する。そのような一連の作業によって、大杉栄が求め

た革命に関するビジョンを可視化することができると考えられる。このような検討を通して、日本における初期社会主義運動の軌跡を、無政府主義やマルクス主義といった予め定められた枠の中から救いだし、良き社会を造ろうとした試みとして、より豊かに理解しうる手がかりを提供したい。

第四章では、第一次世界大戦後の日本の労働運動高揚期に、革命的サンジカリズムが実際に労働運動を結合して行く様相を、大杉栄の实践活动から探ってみる。これによって、大杉栄が堅持していた思想的な特徴を再照明することになるだろう。

具体的には、大杉栄を中心にしたグループの労働運動における影響力はいかなるものであったのか、同時代の証言をもとに具体化する。また、山川均と大杉栄とのロシア革命に対する見解の違いを検討し、このような認識の違いが後の「労働組合全国総連合」の決裂に、どのように働いたかを明らかにしたい。

以上、四章に分けて、問題の所在を明確にし、それぞれに対する筆者の答えを以て、大杉栄が求めた革命展望の核心的な理念を導き出し、この過程を通して最終的には革命的サンジカリストとしての大杉栄の思想と活動の特徴を提示したい。

(注 釈)

-
- ¹ 森川莫人・高橋幸彦訳『アナキズム読本』アナキズム編纂委員会、2006、11頁。
- ² 장 프레포지에, 이소희 외 옮김, 『아나키즘의 歴史』 이룸, 2003, p. 90.
- ³ 田中ひある「反グローバル化運動におけるアナーキズム」『現代思想』VOL32-6、青土社、二〇〇四、三九頁。
- ⁴ 同上、40頁。
- ⁵ 김은석 「Godwin아나키즘의 철학적 기초」『歴史학보』143집, 歴史학회, 1994, p.253.
- ⁶ 同上、p.270.
- ⁷ 김은석『個人主義적 아나키즘』우물이 있는 집, 2004. p.159.
- ⁸ 장 프레포지에, 같은 책, p.88.
- ⁹ プルードノン著、長谷川進・江口幹訳『所有とは何か』31書房、1971、402～403頁。
- ¹⁰ 클린 위드『아나키즘, 대안의 상상력』김정아 역, 돌베개, 2004. p.7.
- ¹¹ 장 프레포지에, 같은 책, p.52.
- ¹² 박홍규『아나키즘이야기』이학사, 2004, pp.100～101.
- ¹³ 森川莫人・高橋幸彦訳『アナキズム読本』アナキズム編纂委員会、2006、14頁。
- ¹⁴ 다니엘 게랑『현대 아나키즘』하기락 역, 신명, 1993. p.53.
- ¹⁵ 다이넬 게랑, 같은 책, p.54.
- ¹⁶ 방영준『저항과 희망 아나키즘』이학사, 2006. p.62.
- ¹⁷ 다이넬 게랑, 같은 책, p.61.
- ¹⁸ 鹿野政直『近代日本思想案内』岩波文庫、1999、230頁。
- ¹⁹ 同上、232～233頁。
- ²⁰ 구승희 외『한국아나키즘100년』이학사, 2004. p.71.
- ²¹ 조세현『동아시아 아나키즘, 그 반역의 역사』책세상, 2001. p.23.
- ²² 조세현 같은 책, p.21.
- ²³ 鹿野政直、前掲書、232～233頁。
- ²⁴ 구승희, 같은 책, p.90.
- ²⁵ 조세현 같은 책, p.25.

²⁶ 幸徳秋水、伊藤整 編 「二十世紀の怪物 帝国主義」 『日本の名著—幸徳秋水』中央公論社、1979、87頁。

²⁷ 松本清張『象徴の設計』文芸春秋、1976、68頁

【序論、参考文献】

鹿野政直『近代日本思想案内』岩波文庫、1999。

田中ひある「反グローバル化運動におけるアナキズム」『現代思想』VOL32-6、青土社、2004。

松本清張『象徴の設計』文芸春秋、1976

森川莫人・高橋幸彦訳『アナキズム読本』アナキズム編纂委員会、2006。

ブルードン著、長谷川進・江口幹訳『所有とは何か』三一書房、1971。

구승희 외 『한국아나키즘100년』 이학사, 2004.

김은석 「Godwin아나키즘의 철학적 기초」 『歴史학보』 143집, 1994.

_____ 『個人主義적 아나키즘』 우물이 있는 집, 2004.

박홍규 『아나키즘이야기』 이학사, 2004.

방영준 『저항과 희망 아나키즘』 이학사, 2006.

조세현 『동아시아 아나키즘, 그 반역의 역사』 책세상, 2001.

다니엘 게랑 『현대 아나키즘』 하기락 역, 신명, 1993.

장 프레포지에, 이소희 외 옮김, 『아나키즘의 歷史』 이룸, 2003.

클린 위드 『아나키즘, 대안의 상상력』 김정아 역, 돌베개, 2004.

第一章 日本における進化論受容の一脈

― 幸徳秋水と進化論的社会主義 ―

1. はじめに

大杉栄は、同年代の若手の社会主義者の間で、幸徳から最も多大な影響を受けたと言われるが、いったい、それはどのようなものだったか。それをさぐるため、本章では、まず幸徳秋水が唱えた社会主義の内容を、進化論の観点から検討してゆきたい。なぜなら、幸徳秋水の理論については、堺利彦（1871～1933）から「社会進化論」にとどまり、マルクス主義に徹底したものではなかったという評価を受け、それが定式化されてきたからである¹。もし、そうであるなら、それがどのような内容であったのかを探るには、進化論受容の観点が有効であろう。そして、それと幸徳の社会主義受容との関係を探り、その特徴と同時代性を考察する。これによって、大杉栄が大正期に展開する革命的サンジカリズム、その彼独自の側面を探るための一端諸がひらけるのではないかと予想してのことである。

明治期の日本の初期社会主義はマルクス主義をはじめ、英米の様々な社会改良主義、アナキズムや国家社会主義などの多様な方向性をもつ思想を受容することによって始まったため、いわば思想の星雲のような状態にあった。当時の社会主義に関する評価もまた、その傾向を持ち、そののちにも、日本における民主主義の原点として取上げたり、平和主義の象徴として評価したりす

る、多様な分析スキームが試みられてきた。

その中でも明治社会主義の評価の主流を占めるのは、大正期のマルクス主義の前史としての評価である。だが、マルクス主義の原典は『共産党宣言』(*Manifest der Kommunistischen Partei*, 1848)、フリードリッヒ・エンゲルス (Friedrich Engels, 1820~1895) による『空想から科学への社会主義の発展』(*Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft*, 1880、以下『空想から科学へ』) など数種しか紹介されず、主な理論的学習も英米の解説書に頼って行われるなど、欠点の多い前史と扱われてきた感がある。「地上の福音として説教されるばかりで、社会主義革命を行うための具体的な方針の検討、戦略の樹立は考慮されなかった」し、「革命議論も現実ばなれした抽象論が多く、大衆運動による実践でその理論の当否が検証されるところも欠けていた」²というのがその主な評価である。しかも、政治運動を排撃して

ゼネラルストライキ

総同盟罷工を戦略とする直接行動論などのアナーキズムの香りが濃厚になる明治後期からの社会主義運動については、その性急さを惜しんでいる。

マルクス主義をその評価基準にして、戦略・戦術の日本的な適用が正しかったか、間違ったかを問題にする論議は十分に行われてきた感がある。もし、明治の社会主義者たちの目的が日本にマルクス主義を確立する意図をもってたと解釈するならば、なるほど、この評価は確かな意味を持つであろう。だが、彼らがそのような意図を持っていなかったとしたら、とても生産的な論議だったとは思えない。

むしろ、マルクス主義に徹底していないという批判の的になった部分を取り上げ、いかにしてそれが成り立つようになったかを検討することが、当時の社会的・知的文脈を再考する機会を得ることになるのではないだろうか。それゆえ、幸徳秋水をはじめ、明治の社会主義者たちが陥った欠陥の主な原因と指

摘されてきた社会進化論について検討したい。

堺利彦は「『共産党宣言』と『資本論』との名は、幾度も平民新聞で紹介されたが、実をいえば、誰もまだ本当に読んではいなかった」³と回想している。それゆえ、幸徳の思想は「唯物史観が社会進化論によって歪曲され」⁴、マルクス主義の歴史的意義を十分に感得することができず、やがて直接行動論など無政府主義に運動の突破口を求めたとか、「マルクスとエンゲルスは主として彼らのもつ象徴的な価値」⁵でしかなく、英米の解説書を主な参考資料として社会主義を理解したため、幸徳秋水は階級闘争の発展と革命との関係を正しく理解することができず、その理論は唯物史観というよりは「経済進化論」であったという評価がなされてきた。確かに、マルクス主義に照らし合わせるとそのように考えられるが、幸徳秋水は、いかにしてそのような論理を形成したかを、彼の言説から再構築する必要があると思う。

このような問題意識を以って、本章では、幸徳が一見、社会主義とは相容れないように思える、進化論の「競争」をどのように扱っていたのか、また、反対に社会主義の特長ともいえる「合同」や「協同」をいかに進化論の中で説こうとしたかを探り、各々に根拠を与えた論理を考察する。その過程で、儒教から影響として説明されてきた倫理性との関係に新たな視点が提示できると思う。そして、幸徳秋水がいう「科学的社会主義」の意味を考察し、それがなぜ、アナキズムに移行したのかを探ることにする。

2. 思想の基礎としての「進化論」

日清戦争の後の日本は、紡績を中心に産業の著しい進展を遂げた。だが、明治以来の社会システムがうまく対応できない社会問題も新たに浮上した。と

りわけ貧困問題がそれであるが、これは日本における社会主義の本格的な展開を促す下地になった。

この時期、日本においていち早く社会主義を紹介したのは、村井知至（1861～1944）や安部磯雄など、アメリカの福音運動の影響を強く受けついでキリスト教社会主義者たちであった。彼らは社会問題を経済問題として取り扱う見解をのべたが、その社会主義は人間の内面、倫理の問題としてみる性格のものであった。キリスト教が精神の救済を果たすが如く、社会主義は現世の貧困問題や富の不公平といった物質的な社会問題を解決し、調和された世界へと導く手段であると考えてるのである。彼らにとって社会主義は、不完全な社会組織や制度を建てなおすもっとも有効な解決手段ではあったが、それ自体の原動力というものは想定しなかった⁶。

しかし、一方では、キリスト教という経路を通らずに社会主義に接近する幸徳秋水や堺利彦などのグループが形成された。特に幸徳秋水はその中心人物であった。土佐の没落した商家の出身で、十分な教育を受けることができなかった幸徳秋水は、世に対する不満をもって東京に出た。その後、民権運動左派の流れを汲む中江兆民の門下生として生活を送りながら、『自由新聞』を初めとして『中央新聞』『萬朝報』などの新聞記者の職業に就いた。当時の記者は、国家によって固められた社会的上昇の中枢コースから疎外された人々が、生計を立てながら上昇への志を深める職業であった⁷。

ところが、社会の不正を暴きだす新聞記者という職業柄から、幸徳は深まる社会問題に対する関心と改革への要求を強め、同じ関心を持つ人々に接近していく。片山潜と村井知至などの社会主義研究会に足を入れ、欧米における社会主義運動の概括的知識を手に入れる機会を得た。これをきっかけに、急速に社会主義に魅せられるようになった幸徳は、やがて、日本で最初の社会民主主

義政党である社会民主党の創設(1901)に一役を担った。しかし、社会民主党は結成届出の同日に結社禁止を命じられて、日の目を見ることができなかった。

前年に施行された治安警察法(1900)が組織的な労働組合活動を事実上不可能にしたのに対し、社会民主党の禁止は政治活動の制限を意味した。幸徳らは国民啓蒙という戦術に力を注ぐしかなかった。その主な媒体が『萬朝報』であった。しかし、日露戦争開戦の間に、『萬朝報』の編集方向が非戦論から開戦論に転換すると、それに反対して幸徳秋水・堺利彦・内村鑑三などは辞職を申し出た。これまで時事問題について社会主義者たちの見解を提示する重要な役割を演じてきた『萬朝報』を離れた彼らには、それに替わる媒体が必要になった。

辞職の一ヵ月後、幸徳と堺は数名の知人や社会主義の同調者の援助を得て、新たに社会主義者の機関誌、週刊『平民新聞』を創刊(1903年11月15日)した。その創刊号で幸徳と堺は、「自由、平等、博愛は、人生世に在る所以の三大要義也」⁸と宣言し、これらを成就するための原理として、「平民主義」「社会主義」「平和主義」を捧持することを誓った。自由民権運動の思想的系譜を受け継いだようにみえるが、その根拠を天賦人權論に求めたわけではない。たとえば、ある読者から「平民新聞の自由平等とはルーソー派の唱道した絶対に造物から賦與されたといふ意味」なのかという質問が寄せられた時、幸徳は「自由平等は人間先天の権利だと言ひませぬ、我等も進化説を信ずる者です、併し完全なる自由平等の域に進むのが人類社会の最高理想」⁹だと答えた。人類も動物より進化してきたのであるから、初めから自由・平等・博愛というものが与えられたわけではない。進化に伴い、漸次にその概念を発達させ、より高次の領域に向かわせていると考えたのだ。

第二の質問の自由平等は人間先天の権利だと言ひませぬ、我等も進化

説を信ずる者です。併し完全なる自由平等の域に進むのが人類社会の最高理想です。(記者)¹⁰

幸徳にとって進化論は「人間智能の及ぶ限りに於て、疑ふ可らざるの一大真理」¹¹であって、すべての学問の基礎土台たるものであった。自由民権運動の流れを汲む幸徳であったが、ルソー (Jean-Jacques Rousseau、1712～1778) 等の「天賦人權論」を思想的なよりどころとした先輩たちとは異なり、進化論が自分の思想の基礎であると語っていた。これは、明治初年代に人民の自由な権利の上に立つ国体を主張してきた加藤弘之 (1836～1916) が、『人権新説』(1882)を著して思想的転向を公にしてから20年ほど後の時点でのことである。

加藤弘之は、ダーウィン (Charles Robert Darwin、1809～1882) やヘッケル (Ernst Heinrich Philipp August Haeckel、1834～1919) の生物進化論やハーバート・スペンサー (Herbert Spencer、1820～1903) の社会進化論を借りて、「天賦人權論」を妄想だとして切り捨て、「生存競争」こそが人権を生み、社会を進歩発展させるもとであると主張した。これが大きな議論を引き起こし、スペンサーの社会進化論が知識人のあいだでもてはやされ、やや遅れて、1890年代前後からダーウィニズムが先を争うように学習されていた¹²。

3. 競争：社会発展の原動力

幸徳が自由民権運動左派から社会主義者へ転身した時に、世間では社会進歩の原動力が「競争」だというのは常識になっていた。それに対して社会主義は一般にどう見受けられていたのだろうか。

ある読者が「社会主義になれば、総ての競争が無くなると思ひます、従つて進歩発達が致しませぬかと懸念に堪えませぬ」¹³と憂いをよこした。社会主義に

対する巷での認識を伺わせる一例であるが、このような認識は日本の生物学者も進化論をもとに同様な見解を述べていた。

20号の「新刊紹介」欄には、丘浅次郎（1868～1944）著『進化論講話』（1904）の堺利彦による紹介が載せられている。堺は日本人の書いた進化論書としては読むに値するのは丘の本が初めてだとして賞賛はしたが、しかし、丘も社会主義に対しては「世の多くの競争論者と共に速断に陥つて居る」と批評していた¹⁴。丘は、社会主義が平等な社会を主張し、個人の間、あるいは集団の間の生存競争を否定して、社会進化のもっとも重要な動因である「生存競争」を除去してしまうと認識し、否定的な立場を示し、さらに、人間は常に競争する存在であるため、社会制度を改めたとしても、世は以前と同様に激しい競争や生活の苦しさから免れることはできないと説いている¹⁵。幸徳はこのような懸念に、何らかの対応を講じなくてはならなくなった。

幸徳が同じ12号に「人類と生存競争」という社説を載せたのは、このような見解に対して社会主義と生物進化論が矛盾するものではないと訴えるためであった。

吾人も亦生存競争が生物進化の一動機たるを認む、然れども一切の生物は漸く其進化を経るに従つて、生存競争の情状も亦自ら変移せざることを得ず。(略)如此にして生物の機関組織、複雑完全なるに従つて、競争の方法大に緩和され、自然に其劣敗者を減ずるの事實は、純乎たる生物学に在ても亦之を争ふ能はず、況んや人類社会組織の更に向上進歩せる者をや、彼の特り競争が進化の動機たることを知つて、而して競争其物にも亦進化あることを知らず、原始生物の劣敗者多きを見て、直ちに人類社会にも亦た多数の劣敗者無る可らずとするが如きは、進化の理法を罔するの甚しき者にして寧ろダーキニズムの賊と謂ふ可し¹⁶。

幸徳は「競争」という概念の再考を唱えている。下等生物から高等生物にい

たる一直線的な進化過程を想定する幸徳は、高等生物の領域に近づくと、「競争の方法」が緩和されて行くといった。さらに、生物進化の頂点に立つ人類においては競争の方法そのものも、動物のように「腕力」から漸次に「智謀」や「技術」の競争に様子を変じて「進化」してきたという。

そして、更なる社会の進歩発展のためには、今の「衣食の競争」を「名誉の競争」とし、さらに「名誉の競争」を「道德の競争」と高めなくてはならないと説き、それには社会主義社会が当然のように必要であると述べた。そのため、社会主義はダーウィニズムと衝突するどころか、むしろ適っているとのべた。だが、彼が自信をもってこのような見解を示したのはいかなる経緯からだろうか。

幸徳の見解を考えると、まず思いつくのは、人間の進化過程において、野蛮時代には頼りであった動物的な属性——身体組織、狡猾さ、残忍な破壊性——が文明社会においては欠陥になってきたと説く、トマス・ハクスリー (Thomas Henry Huxley, 1825~1895) の理論である。彼は「ダーウィンのブルドッグ」を自称し、ダーウィンの学説の普及につとめた人物で、明治期の日本の知識人にも広く知られていた¹⁷。ハクスリーは晩年の講演録である『進化と倫理』 (*Evolution and Ethics*, 1893) において、「半野蛮と闘争とに充ちた長い時期」の後、知性によって「比較的高いまたかなり安定した文明の時期」が訪れたが、それでも生存競争は引き続いて終わることが無かった、そこから逃れだすために人類は「正義という観念」を昇華してきたという¹⁸。そして進化過程と倫理の関連性について論を進めている。

だが、ハクスリーは、幸徳が唱えるように「腕力」→「知性」→「名誉」→「道德」における「競争」という過程を想定していたわけではない。彼は、宇宙進化の過程の中に道德的感情が、他の自然現象と同じく生まれたものだとす

る「進化の倫理」には反対であった。

社会人たる人間といへども、宇宙の過程に従はねばならぬことは言ふまでもない。他の動物におけると同じく、繁殖が不断に行はれ、生活の手段を得るために激しい競争が生じる。生存競争には、生存状況に順応するに適しないものを排除するといふ傾向がある。最強者、つまり、最も強く自己主張をするものは、ややもすれば弱者を蹂躪しようとするのである。しかし文明が未発達であればあるほど、宇宙の過程が社会進化に及ぼす影響はますます大である。社会の進歩は、宇宙の過程を一步毎に妨げ、これに代ふるに倫理的過程とも称せらるべきものをもつてする。その結果、存在の諸条件に快適のものではなくて、倫理的に最良のものが生きのこるのである¹⁹。

むしろ、人類社会の進歩は、「宇宙の過程を一步毎に妨げ、これに代ふるに倫理的な過程」をたどってきたし、将来には「存在の諸条件に最適のものではなくて、倫理的に最良のものが生き残る」²⁰と主張した。つまり、彼は「生存競争」を主とする宇宙進化とは対峙する、人間の努力による「倫理の進化」を考えていた。

幸徳が大枠においてはハクスリー流の「倫理の進化」の影響を受けていたとしても、「名誉の競争」「道德の競争」といった倫理性と「競争」をくつつけた概念は、ハクスリーのものとはいいがたい。また、幸徳の思想的土台として語られてきた儒学の道德的な規範からも、このような倫理性の進化という概念は出てこない。

それを検討するために、同様な見解が述べられている幸徳の代表作といわれる『社会主義神髓』（1903）を探ってみよう。『社会主義神髓』は刊行されるや、たちまち六版を重ねて読者を広めていた。日本の読書界だけでなく、中国語の翻訳版も何種類かが出され、中国の読者にも愛読されていた²¹。全七章と「社会主義と国家」「社会主義と直接立法」「社会主義と国体」「社会主義と商

業広告」「社会主義と婦人」という五篇の「付録」に編まれている。

幸徳は「自序」で、「近時社会主義に関する著訳の公刊する者、大抵非社会主義の手に成り往々独断に流れ正鵠を失す、其然らざるも或は僅に其一部を論じ、或は単に一方面を描くに過ぎ」ないため、読者に社会主義というものの「鳥瞰図」を與える目的でこの書を書く述べ、当代における多様な西欧の社会主義者の著書を参考文献としてあげている。

本書執筆の際、参照に資せしは、

MARX, K & ENGELS, F. Manifesto of the Communist Party.

MARX, K. Capital : A Critical Analysis of Capitalist Production.

ENGELSE, F. Socialism, Utopian and Scientific.

KIRKUP, T. An Inquiry into Socialism.

ELY, R. Socialism and Social Reform.

BLISS, W.A Handbook of Socialism.

MORRIS, W. & BAX, E. B.Socialism : its Growth and Outcome

BLISS, W.The Encyclopedia of Social Reforms.

等の数種也。初学少年の為に特に之を言ふ。

明治三十六年六月

著者²²

この著書で「名誉の競争」「道德の競争」が論じられているのは「第五章社会主義の効果」の部分である。幸徳は資本主義社会において行われる「競争」を、地主資本家による経済的機会が独占されているため、一般の人々は奴隷になることしか残された道がない、名ばかりの競争であるとみた。財産や地位、それに伴う教育と信用においての差異が存在する以上、人々は公正な競争ができない。この歪曲された「競争」から出る結果も運命や偶然の出来事であるため、むしろ自然の進化の意図に反するという。現の社会における競争形態を自然的なものとみなすハクスリーと異なり、むしろ非自然的なものであるという

見解を示した。そのため、真の競争の結果として残る最適者は最良の存在であるはずだと認識したことが窺える。そもそも進化論において最適者というのは倫理的な存在と同一者ではない。しかも、公平な機会が与えられたとって、倫理的に優れたものが残るとは限らないはずだ。だが、この点については、幸徳はあまり深く考えていない。

腕力の競争が智術の競争となれるを見よ、個人の競争が団体の競争となれるを見よ、武器の競争が外交の競争となれるを見よ、生存競争の性質方法が、常に社会の進化に伴ふて進化せるの迹を見る可らずや²³。

幸徳は、平等な出発点に人々を立たせる社会主義社会においては、現在の「卑陋の競争」「不公の競争」から「高尚の競争」「正義の競争」「智徳の競争」へと変わると期待をこめた。また、彼において社会主義者は、そのような「高尚なる智力上、道德上、精神上の競争をさせたいと望む者」²⁴でもあった。倫理的により優れた競争が、社会の発展をより永久に持続させる原動力であるし、このような競争は排除するどころか、助長させるべきであった。

『社会主義神髓』の参考文献の中に、このような見解が表れているのは、リチャード・イリー (Richard T. Ely, 1854~1943) の『社会主義と社会改良』 (*Socialism. An Examination of its nature, its strength and its weakness, with suggestions for social Reform*, 1894) である。当時、ウィスコンシン大学の政治経済学教授を務めていたイリーは、一国の経済状況をその国の総体的な歴史的経験の結果として把握するドイツ歴史学派の思想系統に属していた。キリスト教人道主義にも好意をもち、1885年には経済学者、社会福音を唱える牧師たちを糾合して「アメリカ経済学会」 (American Economic Association) を創立した人物でもある。

イリーは、資本主義制度における経済的利益を目的とする競争が、さまざまな弊害を起こしていると警戒はしたが、すべての競争に反対ではなかった。賞賛のための競争——この場合はcompetitionの代わりにemulationを用いる——、発明における競争など、資本主義社会の現在においても、自己利益的競争とは平行して機能している「競争」に注目した。そして、生に刺激を與えて人生を高揚させる動機をこのような「競争」に求めた。幸徳が社会主義社会において「智徳の競争」を永久なる進歩の動因としてあげたのと同じく、イリーは「社会的名誉」social esteemの競争を永久なる進歩の動因として挙げた。

もちろん、「社会的名誉」のための競争が、社会主義社会においてのみ働くとは言えない。現の資本主義社会においても「社会的名誉」は、人々の行動の大きな動因であった。イリーは、地主資本家が財産を蓄積するのもお金それ自体が目的ではなく、それを使って得られる「名誉」のためだと見ていた。ただし、現制度の下で行われている「社会的名誉」ある行為は、盗賊や強盗の名誉、上流階級の名誉などのように彼らが属する階級の基準に従っただけで、必ずしも社会全体の利益と合致するとは限らない場合もあると指摘した。だが、社会主義社会が実現されると、人々は自分の幸福と社会の利益が密接に結びついていることをますます実感するであろうし、そのように発達した「社会的本能」こそが社会主義を支えられるとのべた²⁵。

このように、幸徳が「生存競争」のかわりに「智徳」や「正義の競争」へと進化原理それ自体が進化するということのも、来るべき社会主義社会においても変わらず、社会の進歩が約束できるということのも、イリーの著書から多大な影響を受けたと考えられる。しかし、現体制から「競争」をもって社会主義社会が実現するのではないはずだ。生産手段の社会的所有や共有、協同を意味する社会主義が、その実現においては進化の原動力である「競争」と相反するのではな

いかという疑問は残るはずである。

4. 協同：もう一つの社会発展の原動力

幸徳は「人類と生存競争」の後半部分で、「生物の進化は独り生存競争に由るのみならず、亦実に生存協同の恩に浴する多」いといつて、もう一つの社会進歩の原動力を提示した。

多くの生物は其外敵と闘はんが為めに、自然を開拓せんが為めに、或は其種の繁栄の為めに、或は各自の利益増進の為めに、其同種族と協同し、或は其異種族とすらも相扶助して、為めに大なる進化を遂ぐる者甚だ多し²⁶。

これは、クロポトキン『相互扶助論—進化の一要因』(*Mutual Aid: A Factor of Evolution*, 1903)を思い出させ、後に幸徳が「直接行動論」を打ち出して、クロポトキンに接近していくことを予想させるような箇所である。しかし、この社説を出した時期に、幸徳がクロポトキンの『相互扶助論』を知っていたのかどうかは確かではない。週刊『平民新聞』の同志たちの間に初めて「無政府主義」を概括的に紹介したのは、この社説が出た二ヵ月ほど後、久津見蔵村によるものであったが、堺利彦が久津見の考えを「個人的無政府主義」として批判を込めた論評を出したくらいで、クロポトキンについて十分な説明があったとはいいがたい²⁷。『相互扶助論』について週刊『平民新聞』誌上に詳細な記事が見られるのは、西川光二郎が同年の6月20日の社会主義研究会について報告した記事が初めてだった。

だが、幸徳が「協同」「扶助」という概念を持ち出すのに、必ずしもクロポト

キンを頼る必要はなかった。前節に述べたハクスリー『進化と倫理』はすでに「相互扶助」について論じていた。ただ、注意しなくてはいけないのは、ハクスリーは「相互扶助」と「生存競争」を相反する概念として扱っている点だ。つまり、社会の進歩とは自然の進化原理である生存闘争を倫理によって克服してこそ達成できるものだという。その倫理とは「人間のあいだにおける相互扶助といふ偉大なる事業に寄与」することであり、「最大多数者の生存」にほかならないと説いた²⁸。繰り返すが、ハクスリーは自然法則である「生存競争」と対峙する「倫理的過程」として「相互扶助」を考えたのであった。

しかし、幸徳は「協同」を進化の自然法則性とは対立する「倫理過程」として説いていない。むしろ、自然法則の中から「協同」を把握して、これをもって社会主義社会の誕生を裏付けようとした。

『平民新聞』創刊号には、安部磯雄も幸徳と同じように「協同」を進化の原理として説明し、社会主義が進化法則に合致すると書いた。

進化論を説明するに唯一の生存競争を以てせんとするの時代は既に過ぎ去った。生存競争は進化の半面のみを現はしたるものであつて、他の半面には協同といふこともあり、犠牲といふこともあることを忘れてはならぬ、且つ競争てふことは生物の初期時代に行はれ、若くば小区域に於て行はるゝことはりても、進化の度進み、其区域の広がるに及びては協同の必要が益々感ぜらるゝのである²⁹。

安部において「協同」とは定言的な倫理性ではなかった。安部が「協同」を進化の原理であると確信するに至ったのは生物学からではなく、当時の産業界・行政界の動向からであった。産業界において拡大しつつある独占産業やトラスト、帝国主義時代の国家間の激しい競争のため、以前の夜警国家を放棄して公共事業などに積極的に乗り出す各国政府の動きなど、時代は「競争」から「協同」

に「進化」したように見えたであろう。安部のこのような見解を幸徳はマルクス主義と結び付けて考えていたようにみえる。

幸徳秋水におけるマルクス主義の理解を示している個所は、『社会主義神髓』の「第三章産業制度の進化」の部分である。この章は「有史以来何の時、何の処とを問はずして、一切社会の組織せらるゝ所以の者は、必ずや経済的生産及び交換の方法、之が根底たらざるは無し。而して其時代の政治的及び霊能的歴史の如きは、唯だ此根底の上に建てる者にして、亦実に此根底よりして始めて解釈することを得べき也」³⁰という、『共産党宣言』（1888年英語版）に付されたフリードリヒ・エンゲルスの序文の文章から書き起こされている。つづいて、ルイス・モーガン(Lewis Henry Morgan, 1818～1881)の名を挙げ、人類の始まりを原始共同体から求めて、次の人類の歴史を奴隸制社会→封建社会→資本主義社会へと法則的に発展してきたことを概括する。これはエンゲルスが『家族、私有財産、および国家の起源』(*Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staats*, 1884)で概括した近代以前の発展段階論の粗筋を書いた部分である³¹。

そして資本主義社会の分析に入り、資本家階級と労働者階級の「階級の闘争」、「資本の集中」、生産の無政府状態から来る恐慌の周期的爆発と

インダストリアル・レザーヴ・アーミー

「工業的予備兵」の発生を、この資本主義社会の矛盾として提示し

コンビネーション

た。そして、資本の集積と蓄積、企業の集中は「同業者大同盟」「ツラスト」などの社会的生産様式を創り出すが、所有は依然として資本家の手に委ねられている。やがて、その矛盾が頂点に達し、資本主義社会は「一大伝変の運」「一大破裂」を迎える。社会の生産様式は集中され、合同して社会的になっていくのは前進や進化である。問題はそれに伴わない所有形態を変更することだ。かくして、社会主義は「社会産業の歴史的進化に於ける必然の帰趨」として誕生する、

というのである。社会主義は「進化の理法」によって必然づけられたのだ。幸徳のマルクス理解を示すこの部分はエンゲルス『空想から科学へ』からの抜粋として書かれたものであった。

5. 進化論と社会主義との折衷

幸徳はエンゲルス『空想から科学』を援用して史的唯物論と進化論を関係づけて説明し、さらに両者の関連性を固く結び付けようと論を進めた。「人類の生存競争」で「協同」を論じた後、幸徳は「ダーキン氏の進化説は千古の真理」で疑問をはさむ余地がないが、ダーウィンは自分の発見した真理を自然科学の領域にとどめておいたと論じて次のように付け加えた。

故に如何に之を人類社会に応用すべきかに至りては彼所謂ダーキンニアン之徒、区々の見解を持し或は甚だしき謬見に陥れる者あり。而してダーキンが生物自然の上に為せると同一の創見を、直に人類社会の上に貢献せるは近世社会主義の祖師マルクス也。

ダーウィンが発見した真理の正当な継承者はいわゆる社会ダーウィニストではなく、カール・マルクス (Karl Heinrich Marx, 1818～1883) であると、幸徳は見ていたのである。さらに、週刊『平民新聞』第47号では「ダーキントとマルクス」という記事を載せて、この考えをもっと詳しく展開した。

幸徳は、ダーウィンの主著、『種の起源』(*On the Origin of Species*, 1859) とマルクス『経済学批判』(*Kritik der Politischen Ökonomie*, 1859) が同じ年に出版されたことを、数千年来の「億万人の知識」の集積がもたらした結果だと讃えた後、次のように書いた。

マルクスは即ちダーキンが自然界に向つて為したる発見を、人類社会に向つて為せり、生物界に於ける進化の理法を社会組織に応用せり、彼が歴史の物質的概念(マテリアリスチック、コンセプション、オブ、ヒストリー)は是れ也、彼れは謂らく、如何なる社会組織と雖も其根本的要素たるものは、富の生産分配の方法なり、社会を支持し生活せしむる所以の富の生産分配の方法が、進化発達するに従つて、社会組織全体も亦進化発達するもの也³²。

幸徳の社会主義理解のよって立つところはマルクスとダーウィンであり、しかもその方向はダーウィンからマルクスへであった。ダーウィンの発見した「進化の理法」を背景に、マルクスは人間社会の法則性を発見したわけであり、それ故に「科学的」という名に値することになる³³。このような論法は、歴史の発展を「進化の理法」という自然界における法則によって裏付けることであり、社会主義の実現はそれ自体が自然法則になる。そもそもダーウィンがいう進化は漸進的なものであつて、社会主義が唱える飛躍としての「革命」と同一化するのには無理が生ずる。

さらに、幸徳は『空想から科学』の英語版の序文を根拠にして、マルクスとダーウィン両者とも唯物論者であつたことなどを列挙して類似性を強調した。この記事の最後は、ダーウィンからマルクス宛に贈られた1873年10月1日付の書簡を載せて、両者の関係を確実なものにしようとした。

Dear Sir

I thank you for the honour which you have done me by sending me your great work on capital; and I heartily wish that I were more worthy to receive it, by understanding more of the deep and important subject of practical economy. Though our studies have been so different, I believe that we both earnestly desire the extension of knowledge; and this, in the long run, is sure to add to the happiness of mankind
I remain, dear sir your faithfully Charles Darwin.

この手紙は、1873年6月に、マルクスが『資本論』（*Das Kapital*、1867）第一巻の第二版を送ってくれたことに対するダーウィンの儀礼的な礼状にすぎないものであった。当時の書物は読者がページを切り開きながら読むようになっていたが、ダーウィン家の『資本論』は全822頁のうち初めの105頁しか切り開かれていない。また頁の切り開かれた部分には書き込みがない。ドイツ語が苦手であったダーウィンはほとんどこの本を読まなかったであろうと推定されている³⁴。

マルクスの関心をダーウィンにむけたのはエンゲルスであった。エンゲルスは『種の起源』を出版直後に読んで、これを絶賛する手紙をマルクスに書き、目的論を否定したことを高く評価している³⁵。マルクスもそれに追随した評価をしている。マルクスのダーウィンに対する評価は、キリスト教の教義や伝統社会の価値に対する批判を内包しているという理由からであった。しかし、1862年6月18日づけのエンゲル宛ての手紙の中で、「ダーウィンは動物や植物のなかに、分業、競争、新市場の開発、発明およびマルサスの『生存闘争』などをともなう、イギリス社会を認めている」と述べたように、マルクスのダーウィンに対する評価は次第に低くなり、イギリスの競争社会を反映したブルジョア・イデオロギーに過ぎないと批判している³⁶。

では、幸徳がマルクスとダーウィンを密接に関連付けて考えた根拠はどこから得たのか。英米の解説書から得た誤解であったのだろうか。

幸徳が、イリーから倫理性と競争を関連づける方法を学び、『社会主義神髄』の「第五章社会主義の効果」で展開したことはすでに触れた。また、『神髄』の「第四章社会主義の主張」は、イリーの著書のPart I, Chapter II, The Element of Socialismを骨子に書かれている。本論だけではなく、付録の五篇

のうちに「社会主義と国家」「社会主義と直接立法」や「社会主義と商業広告」³⁷などもイリーのこの著書を底本にして書いている。それを考えると、『社会主義神髓』のなかで最も影響が大きかったのはイリーの著書であることがわかる。因みに、『社会主義神髓』と同年に刊行された『社会主義論』（1903）は 安部磯雄がイリーの *Socialism, an examination of its nature, its strength and its weakness, with suggestions for social reform* を翻訳したものであり、片山潜『わが社会主義』（1903）にもその影響は濃く見られる³⁸など、明治期の日本における社会主義研究に対して、イリーのこの著作の影響は大なるものであったと言っている。

確かにイリー『社会主義と社会改良』には、カール・マルクスの信奉者たちが「恰もダーウィンが自然界において発見したのと同様に、彼が社会の動きに進化法則を発見したと主張」し、両者を「十九世紀における偉大なる知性」として讃えていると書いてある³⁹。幸徳はマルクスとダーウィンの関連性を、この箇所から思い起こしたとも考えられる。

イリーもマルクスが社会主義における第一人者であり、彼のように経済思想の発達に貢献した人物は稀であることを認め、社会主義を理解するためにはマルクスの著書が有効であると讃えた。しかし、イリーはマルクスの理論を「大いに演繹的な論理」の「連鎖」とであると評価し、経済論理の推論から構築された進化論的社会主義であると批判を込めていた⁴⁰。帰納的な方法を重んじ、また社会秩序の継続的な発展を考える立場であったイリーとしては、マルクス主義を高く評価できなかった。社会主義を論じるのは、当の欧米の各国において実際に行なわれた社会主義的な政策を個別に考察し、世界の趨勢が社会主義社会へ向かっていることを把握するので事足りるのであった。だからイリーは、抽象的な法則にしたがうように社会主義を進化論的に把握する方法に警戒を促

した。

イリーは方法論上の問題の他に、進化論的な説明では人々の理想とする社会の到来を約束できないという。なぜなら、自然法則と倫理性は必ずしも随伴することではないからだ。社会の進化が却って社会の状態を悪化させる方向に進む可能性もある。マルクス主義の予言を証明するために集めた統計データが、そっくりそのまま反対側の主張を貫徹するためにも用いられることがその好例だと述べる。

イリーにとっては社会主義の要点に触れないで、鑄鉄のごとき頑固な進化法則に依存するマルクスの説明は誤りであった。社会は単なる機械装置ではないため、それにはある意見や選択や良心が存在するし、社会の有意義な努力がなくては決して満足する結果を来たすことはできないと考えた⁴¹。このように、イリーの目にはマルクス主義が社会主義を自然法則化して、人々の選択や意見が入る用地を與えないと否定的に映った。

このようなイリーの見解にもかかわらず、幸徳がダーウィンとマルクス、進化論と社会主義の関係性を強調するという反対方向に進んだのはなぜだろうか。

周知のように、マルクスはヘーゲル左派として出発し、ヘーゲル左派の内部論争の過程でヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel、1770～1831) の観念論やフォイエルバッハ (Ludwig Andreas Feuerbach、1804～1872) の唯物論を批判しつつ独自の唯物論的歴史観を形成した。マルクスの史的唯物論は、ダーウィンの『種の起源』が刊行される前の『ドイツ・イデオロギー』 (*Die deutsche Ideologie*、執筆1845～1846、刊行1926) ですでに確立されており、マルクスにおけるダーウィンの直接的影響はないと見てよい。また、マルクスのダーウィンに対する評価が低くなっていったこともすでに触れた。

だが、エンゲルスの場合はそうではなかったようだ。エンゲルスは「カール・マルクスの葬儀」で「ダーウィンが生物界の発展法則を発見したように、マルクスは人間の歴史の発展法則を発見し」⁴²と書いて、マルクスとダーウィンの関係を強く印象づけた。さらに『ラ・ジュスティス』(La Justice)にのせた「草稿」では、ダーウィンが「地球上の生物界の発展法則を発見」し、マルクスは「それにしたがって人間の歴史がみずからを動かし発展させてゆくあの根本法則、同意を得るのには簡単な説明でほとんど十分なほど単純で自明な一法則の発見者」だと書いて、まるで進化論から史的唯物論へ、ダーウィンからマルクスへと影響関係があるかのように説いた。

マルクスの理論的研究は社会に対する研究であったが、エンゲルスは「歴史において所緒事件の外見上の偶然性をつうじて支配している弁証法的運動法則と同じものが、自然のうちでも…貫徹している」⁴³という観点から史的唯物論と自然科学をつなげる「自然弁証法」を発展させた。それは、「社会進化論」を根拠に社会主義に批判的であった政治的・文化的運動に対し、自然科学を武器としてまとい、それらの思想から自然科学的権威を奪い返して、マルクス主義の優越性を確保するためであったと考えられる。

カウツキー(Karl Johann Kautsky, 1854～1938)やベルンシュタイン(Eduard Bernstein, 1850～1932)などの第二インターナショナルのマルクス主義者たちは、ダーウィン主義の影響のもとにマルクス主義を解釈し、また社会ダーウィニズム側からの社会主義批判と戦いながら自分たちの社会主義論を展開した。たとえば、ドイツ社会民主党の機関誌『ノイエ・ツァイト』(Die Neue Zeit)のなかで、ヘーゲルまたは弁証法についての論じた論文はきわめて少ないが、ダーウィンとダーウィニズム、ダーウィニズムと社会主義などの関係に関する論文は十数篇を数える⁴⁴。

このように、社会主義理論の中心軸を進化論の枠組みにおいて解釈する史的唯物論の流れがあった。幸徳をはじめ明治社会主義者の社会主義理解における不徹底さをいうなら、それを彼等だけの責任に帰すことはできない。英米の啓蒙書がその原因を提供した一つではあったが、むしろ、当代の西欧のマルクス主義運動の動きが主な要因であったことが明らかだ。

そして、このように社会に対する自然科学＝進化論として解釈される社会主義は、社会に働いている自然法の結果として社会組織の変化がもたらされるという方向に進んでいく。

6. 社会進化としての「革命」

幸徳は『社会主義神髄』の「第六章社会主義の運動」のなかで、マルクス以前の空想的な社会主義運動を概観した後、進化論と社会主義の関係について次のように説いた。

彼等は或は共同生産の工場を起し、或は共同生活の植民地を拓くや、一に自己の模型に従つて直に社会を改鑄せんとする者なりき、一日一夜にして直ちに理想の世界を現出せんとする者なりき。彼等は人道の上に立てり、而も未だ科学の基礎を得ること能はざりき、彼等は建設を試みたり、而も未だ自然の進化に従ふ能はざりき。其前夜相踵で失敗に帰せしは固より其所也⁴⁵。

この部分はエンゲルス『空想から科学へ』からの援用であるが、幸徳にとって社会主義が「一個科学的教義」であり得るのは、「社会が一種の有機体」であることを理解して、「自然の進化」と等しい「歴史の進化」に従うと考えたからだ。「科学的社会主義」という言葉は、エンゲルスが『空想から科学へ』におい

て「唯物史観」と「剰余価値」の「発見によって社会主義は科学になった」⁴⁶と宣言したことから始まった。だが、幸徳にとって常に関心の軸になったのは、自然法則としての進化論＝唯物史観であった。

社会の状態が常に代謝して已まざるは、猶ほ生物の組織の進化して已まざるが如し。而して其進化や代謝や若し一たび休せるの時は、其生物や社会や即ち絶滅あるのみ。永久の生命は必ず暗暗裏に進化す、決して常住を許さざる也、社会の状態は必ず冥々の間に代謝す、決して不変を許さざる也。而して這の暗冥なる進化代謝の過程に於て、毎に明白に其大段落を画し、新紀元を宣言する者、即ち革命に非ずや⁴⁷。

人々はただその自然法を観察し、必然的にそこから生まれる結果を発見すればいいのである。ここで、「革命」は「進化」の中にとらえられる。「革命」とは「進化的過程の必然の結果」であり、子供が生まれるという有機体の必然的過程である「分娩」そのものであるとみなした。もはや、社会主義は人間の働きかけの及ばない自然の法則に位置づけられてしまう。そのため、人々が個人としてできることは、ただその自然法である進化法則に従って活動し、できればその進行を助け、旧時代より新時代に進む過渡期をできる限りに穏やかに通ることであった。人間は進歩の方向に関与できない。人類が自分で決めた道にそって進化していくという可能性は拒否され、自然の奴隷になる恐れをもっていた。我々の運命は我々には管理できない社会進化の法則と、うまく折り合うことができるかどうかにかかっている。社会主義者の役割は、ただその法則と人々をうまく折衷させることだけに定まってしまった。

夫れ然り革命は天也、人力に有らざる也。利導す可き也、製造す可きに有らざる也。其来るや人之を如何ともするなく、其去るや人之を如何ともするなし。而して吾人人類が其進歩発達を休止せざるを希ふ間は、之を恐怖し嫌忌すと雖も決して之を避く可らず、唯だ之を利導し

助成し、以て其の成功の容易に且つ平和ならんことを期すべきのみ⁴⁸。

「革命は天也」という有名な文章は、幸徳の革命観のルーツを、西欧の革命ではなく孟子の革命の伝統の中に探る傾向を生んだ。社会に本来的に存在していた善き秩序を回復するために、それを腐敗させてしまった人々を排除すべく暴力に訴える高潔な道徳的暗殺者という像は、後ほどの大逆事件を連想させてかなりの説得力を発揮してきた⁴⁹。確かに幸徳も社会主義に投身する遠因として孟子を挙げたし⁵⁰、堺利彦と論議した『孟子』の日本語翻訳の企画——実現はできなかったが——などがその論拠になってきたと思う。

しかし、幸徳が週刊『平民新聞』で直接に孟子を引用した部分は「孟子の国際観」だけである。孟子が「只仁政を行ふに在のみ、善を為すに在のみ、平和を尊ぶに在るのみ、戦を避くるに在るのみ」と唱えたように、『平民新聞』が掲げている非戦論の論理が「耶蘇教臭き舶来の異端」⁵¹として見られるのは誤解である、東洋の知恵からも同じことが言える、という文脈であった。社会主義についての論議、まして革命論議として語られたわけではない。

幸徳が「野蛮時代では女色、飲食等の如き下等なる欲望の為に競争をしたものが、次には土地、財産、名誉等を以て競争の目的物とするやうになつて来るが、尚ほ其の次には理想、正義等の競争となるのである」⁵²と述べた時、社会主義は儒学が説くような失われた善き秩序への回復というプロセスではなかった。低級な野蛮から、かつて無かった高次の善き時代へと進化法則によって前進することであった。

では、「革命は天也」という文句から何が読み取れるのであろうか。

近代初期の日本において、ダーウィニズムは、儒学の「天理」をそのリセプターとして、普遍的な真理として受け入れられた。進化論に立ちふさがる宗教

もなく、近代科学としての生物学の蓄積も持たなかったのがその主な原因であった。国家有機体論と儒学とを融合して家族国家論を唱えた加藤弘之の論議が広まるなど、自然と社会の進化を、自然法則を一元論的に受容した日本思想界の特徴⁵³が幸徳の場合にも表れたのである。イリーの警告にもかかわらず、幸徳がエンゲルスやドイツ社会民主党が唱える進化論化した史的唯物論に接近した理由もこれに起因すると思われる。

於是乎、欧米の同志は、所謂議會政策以外に於て、社会的革命の手段方策を求めざる可らず、而して此方策や、能く王侯紳士閥の金力、兵力、警察力に抵抗し得る者ならざる可らず、少しも其鎮壓を免かれ得る者ならざる可らず、而して彼等は能く之を發見せり、何ぞや、爆弾か、匕首か、竹槍か、蓆旗か。

否な是等は皆な十九世紀前半の遺物のみ、将来革命の手段として欧米同志の執らんする所は、爾く亂暴の物に非る也、唯だ労働者全體が手を拱して何事をも爲さざること、數日若くば數週、若くば數月なれば即ち足れり、而して社會一切の生産交通機關の運轉を停止せば即ち足

ゼネラルストライキ

れり、換言すれば所謂總同盟罷工を行ふに在るのみ⁵⁴。

その自然法則化された史的唯物史観には、幸徳が「直接行動」論に轉身した後にも、根本的な変化は起こらなかった。「世界革命の潮流」(1906)で幸徳が語ったのは、「十九世紀前半の遺物」にすぎない「議會政策」をすてて、「将来革命

ゼネラルストライキ

の手段」として欧州の同志たちが取っている「総同盟罷工」に移り変わるだけの話であった。彼が日本の社会主義運動の同志たちに向かって、「今後議會政策を執ることをやめて、一に團結せる労働者の直接行動を以て其手段方針となさんこと」⁵⁵を訴えた時に、変わったのは「手段方針」であった。社会主義は依然として自然法則であり、変化は「歴史が之を教え、時代の経過が之を証明」⁵⁶した上での戦術の変更にとどまった。そのため、「直接行動論」への移行について幸

徳秋水自身は、多くの幸徳秋水研究家たちが悩んだほど、深刻な矛盾を感じなかった。その転向の後にも、依然として彼自身は「科学的社会主義」——マルクス主義という意味ではなく——にたっていると考えていたはずだ。変わったのは、社会主義の実行方法であって、社会主義の徳目や社会主義社会における「智徳の競争」、社会主義が「進化的過程の必然の結果」として「分娩」されるという考えは、依然として変わらなかった。

もちろん、戦術におけるこのような変更は、同時の社会主義の同志からも疑問の声が投げかけられた。例えば、日本社会党の路線をめぐって、田添鉄二（1875～1908）が幸徳の直接行動論を「進化的革命をしらざる非科学的思想」⁵⁷だと批判したのがそれである。これに対して幸徳は「社会進化の動機」は「一本道ではない」といい、しかし、議会による方法は「革命の気焰を弱める」からいけないと応酬した。そして「直接行動と雖も一夜に革命を行ふと云ふのではない、即ち自覚を喚起し、団結を鞏固にする為に長月日」⁵⁸を費やした後に、革命は成就できると述べた。ここで、幸徳や田添も「科学性」を漸進的「進化」と関連して考えていることが伺える。そして、幸徳は以前と同様に「革命」を「社会進化の大段落」ととらえ、自分の立場が連続的な漸進主義であると説明し、そのために科学的であることを疑わなかった。

幸徳のこのような思索は、しかし、1910年を迎えて一気に幕を下ろすことになった。彼が抱いた理想も、同僚や後輩に託すことになった。

7. おわりに

幸徳秋水が思想的活動を展開したのは、加藤弘之『人権新説』以来、社会進化論が社会的常識になり、科学的真理として通っていた時期であった。

当の社会主義に対する認識には、社会進化の原動力である「競争」を取り除く「平等」の思想であり、そのため自然法則に反する理論として論じる傾向が存在していた。幸徳はそれに対して、「競争」という概念の再考を促して、人類は「腕力の競争」→「智謀や技術の競争」→「名誉の競争」→「道德の競争」というような「競争」の様子を変えてきたと述べ、真の「競争」である「道德の競争」ができる舞台を提供できるのは社会主義社会であるといった。そのことで、社会主義社会になっても社会は停滞するどころか、永久の進歩が約束されると説いた。この倫理性に富んだ説明は、彼の儒学的素養が導いたとは思いうが、社会主義社会における進歩の原動力を「競争」に求めた点など、イリーに大きな影響を受けたことがわかった。

また、幸徳は進化の原動力として「競争」だけではなく、「協同」もとりあげた。進化に関連して「協同」を説いたのはイギリスの生物学者ハクスリーであったが、彼は動物にも愛と恐れがあるといい、「協同」の本能に認め、人間はそれによって、「競争」に対峙するよう努力すべきと説いた。しかし、幸徳の場合にはあくまでも「協同」を自然法則、進化の原理の中で把握している。それにはエンゲルを経由したマルクス主義の理解が裏付けになった。剰余価値論に対する理解不足やプロレタリア階級の歴史的役割に対する没理解など、幸徳の欠陥を指摘することも重要ではある。だが、幸徳が史的唯物論を社会進化論として理解する主な原因は、当時における第二インターナショナルの社会主義解釈に影響を受けたためだ。

そして、「革命」も「進化的過程」の中でとらえるなど、自然進化と社会の進化を一元的に考える「科学的社会主義」が出来上がった。また、この立場は、1906年以後、彼がアナキズムに傾倒したといわれる後にも堅持されたことを確認した。

確かに、幸徳の社会主義は連続的な漸進主義の性格を持ち、自然進化と社会進化を同一線上で考えるなど、社会進化論的な性格がつよい。しかし、その原因が幸徳の儒学的偏見や英米の社会主義概説書によるマルクス主義の理解不足に求められるものではなかったことを、本章では論証しえたと思う。では、この傾向は、幸徳の一番弟子とも言われる、大杉栄の思想形成にいかなる影響を与えたのであろうか。次章では、連続的な漸進主義としての「無政府主義」から、「生」や「本能」の拡充を唱える「革命的サンジカリズム」への変化の過程における社会進化論との関係を詳しく探ることにしよう。

(注 釈)

-
- ¹ 岸本英太郎編 『日本近代社会思想史』 青木書店、1959、96頁。
- ² 絲屋寿雄『日本社会主義運動思想史』法政大学出版局、1979、319頁。
- ³ 堺利彦「日本社会主義運動史話」『日本社会主義運動史』河出書房、1954、148頁)
- ⁴ 大原慧 『幸徳秋水の思想と大逆事件』 青木書店、1977、102頁。
- ⁵ F. G. ノートヘルファー著、竹山護夫訳 『幸徳秋水ー日本の急進主義者の肖像』 福村出版、1980、132頁。(F. G. Notehelfer, *KOTOKU SHUSUI: Portrait of Japanese Radical*, Cambridge Univ. press, 1971)
- ⁶ 山泉進「社会主義と社会進化論ー幸徳秋水」『近代日本思想の軌跡ー西洋との出会い』北樹出版、1982、118～119頁。
- ⁷ 松沢弘陽『日本社会主義の思想』筑摩書房、1973、17頁。
- ⁸ 幸徳秋水「宣言」週刊『平民新聞』創刊号、1903、11月15日、1頁。(明治文献資料刊行会発行『明治社会主義資料集(別巻3・4)』による。以下同じ)
- ⁹ 無著名「読者と記者」週刊『平民新聞』第13号、1904、2月7日、5頁。(「読者と記者」欄は、第7号より第517号まで、担当の幸徳の多忙や病気以外に、各の特集号、裁判の訴訟などの弾圧時の号を除いてつづいた。太田雅夫『初期社会主義史の研究ー明治30年代の人と組織と運動』新泉社、1991、570～575頁参照。)
- ¹⁰ 注9と同一。
- ¹¹ 幸徳秋水「人類と生存競争」週刊『平民新聞』第12号、1904、1月31日、1頁。
- ¹² 鈴木貞美「日本近代における個人主義ー生命観と関連させて」『「個人」の探究ー日本文化のなかで』、日本放送出版協会、2003、173～174頁。
- ¹³ 無著名「読者と記者」週刊『平民新聞』第27号、1904、5月15日、5頁。
- ¹⁴ 堺利彦「新刊紹介」、週刊『平民新聞』第13号、1904、1月31日、5頁。
- ¹⁵ 丘浅次郎『丘浅次郎著作集5 進化論講話』有精堂、1969、380～383頁。
- ¹⁶ 幸徳秋水「人類と生存競争」前掲書、1904、1頁。
- ¹⁷ 明治期の日本におけるハクスリーの進化論受容については、明治期の新式貸本屋、共益貸本社のカatalog(第2版、1887)を一瞥しても確認できる。英書部分の「博物書類」13タイトルの中、3タイトルが彼の本で、ダーウィンの著書は8タイトル、残る2タイトルは図鑑である。(鈴木貞美『生命観の探究ー重層する危機のなかで』作品社、2007、135～136頁参照。)

-
- ¹⁸ トマス・ハクスリー著、上野景福訳 『進化と倫理』 育生社、1948、11～21頁。
- ¹⁹ 同上、57～58頁。
- ²⁰ 同上、57～58頁。
- ²¹ 『社会主義神髓』は創生訳で1907年に出版され、『二十世紀之怪物帝国主義』も1902年頃に趙必振訳で刊行された。(陳力衛「「主義」の流布と中国的受容——社会主義・共産主義・帝国主義を中心に」『成城・経済研究』第199号、2013年1月参照)
- ²² 幸徳秋水「社会主義神髓」『幸徳秋水全集』第4巻、日本図書センター、1972、398頁。
- ²³ 同上、499頁。
- ²⁴ 幸徳秋水「読者と記者」週刊『平民新聞』第7号、1903、12月27日、5頁。
- ²⁵ Ely, Richard. T. *Socialism. An Examination of its nature, its strength and its weakness, with suggestions for social Reform*, Thomas Y. Crowell & co.: New York, 1900, pp. 223-229.
- ²⁶ 幸徳秋水「人類と生存競争」前掲書、1904、1頁。
- ²⁷ 久津見蕨村「社会主義者諸君に告ぐ」週刊『平民新聞』第19号、1903、3月21日、4頁。この記事は第2回目の「社会主義研究会」(1904年3月13日)において久津見蕨村がおこなった講演の報告書的な性格のもので、「蕨村君に答へ」という堺利彦による批評も同じ日付の号に載っている。
- ²⁸ トマス・ハクスリー、前掲書、1948、54～58頁。しかし、ハクスリーは「厳密に言へば、もちろん社会生活や社会が完成へ向かつて進みゆく倫理過程は、進化の1般過程の1部である」と注をつけてはいる。
- ²⁹ 安部磯雄「社会主義の運命を決すべき問題(1)」週刊『平民新聞』創刊号、1903、11月15日、3頁。
- ³⁰ 幸徳秋水「社会主義神髓」前掲書、1972、47頁。
- ³¹ 『社会主義神髓』のこの部分をマルクス『経済学批判序説』から学んだとみる見解があるが、ルイス・モーガンの引用から考えると『家族、私有財産、および国家の起源』の「第9章未開と文明」の援用であると推測できる。ただし、幸徳がエンゲルスのこの著作を直接読んでいたか、あるいは他の資料から得た知識なのかは確かではない。
- ³² 幸徳秋水「ダーキンとマルクス」週刊『平民新聞』第47号、1904、1月2日、5

頁。

- ³³ 山泉進「社会主義と社会進化論—幸徳秋水」『近代日本思想の軌跡—西洋との出会い』北樹出版、1982、123～124頁。
- ³⁴ 松永俊男『ダーウィンをめぐる人々』朝日新聞社、1987、213頁。
- ³⁵ 同上、211頁。
- ³⁶ 保住敏彦「社会主義者の社会ダーウィン主義観—第2インターの場合—」『経済論叢』（京都法学会）141(6)号、1988、412～413頁。
- ³⁷ Ely, Richard. T. (1900) *Ibid*, Part I, Chapter IV The socialistic StateやPart IV, Chapter X Political Reforms, Part II, Chapter II The Strength of Socialism as a scheme of productionをそれぞれ参照していた。本稿では取り上げないが、儒学的残滓として取り扱われた知識人の役割に関する言説や、社会主義と君主制の関係も、イリーの著書からヒントを得たと考えられる。(幸徳の儒学的影響に関しては、大原慧『幸徳秋水の思想と大逆事件』青木書店、1977、107頁)で詳しい説明がある。)
- ³⁸ 片山潜とイリーとの関係については大川内一男「解説」(『社会主義 現代日本思想大系15』、筑摩書房、1963)や、辻野功「明治期の片山潜」(『キリスト教社会問題研究』11号、1967年3月)が詳しい。
- ³⁹ *Ibid*, p. 74
- ⁴⁰ *Ibid*, p. 97
- ⁴¹ *Ibid*, p. 97
- ⁴² エンゲルス 「カール・マルクスの葬儀」『マルクス・エンゲルス全集』第19巻、大月書店、1968、331頁。
- ⁴³ エンゲルス 「反デュリング論」(第2版序文)、『マルクス・エンゲルス全集』第211巻、大月書店、1968、11頁。
- ⁴⁴ 保住敏彦、前掲書、1988、406～428頁。
- ⁴⁵ 幸徳秋水「社会主義神髓」 前掲書、1972、512～513頁。
- ⁴⁶ エンゲルス「空想から科学への社会主義の発展」『マルクス・エンゲルス全集』第19巻、1968、206頁。
- ⁴⁷ 幸徳秋水「社会主義神髓」 前掲書、1972、511頁。
- ⁴⁸ 同上、512頁。
- ⁴⁹ この論議は寺谷隆「幸徳秋水論」(『国語と国文学』第317巻5号、1960)に見られ

る。大原慧『幸徳秋水の思想と大逆事件』（1977）とノートヘルファ『幸徳秋水』（1980）も同一意見に沿っている。

- ⁵⁰ 幸徳秋水「予は如何にして社会主義者となりし乎」、週刊『平民新聞』第1号、1904、1月17日、5頁。
- ⁵¹ 幸徳秋水「孟子の国際観」週刊『平民新聞』第11号、1904、1月21日、7頁。
- ⁵² 幸徳秋水「進化説と社会主義」『幸徳秋水全集』第4巻、日本図書センター、1972、380～381頁。
- ⁵³ 鈴木貞美『生命観の探究－重層する危機のなかで』作品社、2007、141～142頁。
- ⁵⁴ 幸徳秋水「世界革命運動の潮流」『幸徳秋水全集』第6巻、日本図書センター、1968、101頁。
- ⁵⁵ 幸徳秋水「余が思想の変化」同前、1968、145頁。
- ⁵⁶ 幸徳秋水「日本社会党大会における幸徳秋水氏の演説」同前、1968、149頁。
- ⁵⁷ 田添鉄二「議会政策論」日刊『平民新聞』、1907、2月14日、5頁。
- ⁵⁸ 幸徳秋水「日本社会党大会に於ける幸徳秋水氏の演説」前掲書、1968、155頁。

【第一章、参考文献】

- 安部磯雄「社会主義の運命を決すべき問題(一)」週刊『平民新聞』創刊号、1903、11月15日
- 絲屋寿雄『日本社会主義運動思想史』法政大学出版局、1979
- エンゲルス「カール・マルクスの葬儀」『マックス・エンゲルス全集』19巻、大月書店、1968
- 「空想から科学への社会主義の発展」『マックス・エンゲルス全集』19巻、大月書店、1968
- 「反デューリング論」第2版序文、『マルクス・エンゲルス全集』21巻、大月書店、1968
- 大川内一男「解説」『社会主義 現代日本思想大系15』、筑摩書房、1963
- 太田雅夫『初期社会主義史の研究－明治30年代の人と組織と運動』新泉社、1991

-
- 大原慧 『幸徳秋水の思想と大逆事件』 青木書店、1977
- 丘浅次郎 『丘浅次郎著作集5 進化論講話』 有精堂、1968
- 岸本英太郎編 『日本近代社会思想史』 青木書店、1959
- 幸徳秋水 「社会主義神髓」『幸徳秋水全集』第4巻、日本図書センター、1972
- _____ 「進化説と社会主義」『幸徳秋水全集』第4巻、日本図書センター、1972
- _____ 「世界革命運動の潮流」『幸徳秋水全集』第6巻、日本図書センター、1968
- _____ 「余が思想の変化」『幸徳秋水全集』第6巻、日本図書センター、1968
- _____ 「日本社会党大会における幸徳秋水氏の演説」『幸徳秋水全集』第6巻、日本図書センター、1968
- _____ 「宣言」週刊『平民新聞』創刊号、1903、11月15日。(明治文献資料刊行会発行『明治社会主義資料集(別巻3・4)』による。以下同じ)
- _____ 「読者と記者」週刊『平民新聞』7号、1903、12月217日
- _____ 「予は如何にして社会主義者となりし乎」週刊『平民新聞』1号、1904、1月17日
- _____ 「孟子の国際観」週刊『平民新聞』11号、1904、1月214日
- _____ 「人類と生存競争」週刊『平民新聞』12号、1904、11月311日
- _____ 「読者と記者」週刊『平民新聞』13号、1904、2月7日
- _____ 「読者と記者」週刊『平民新聞』217号、1904、5月15日
- _____ 「ダーキンとマルクス」週刊『平民新聞』47号、1904、1月2日
- 堺利彦 「日本社会主義運動史話」『日本社会主義運動史』 河出書房、1954
- 鈴木貞美 「日本近代における個人主義—生命観と関連させて」『「個人」の探求—日本文化のなかで』 日本放送出版協会、2003
- _____ 『生命観の探究—重層する危機のなかで』 作品社、2007
- 田添鉄二 「議会政策論」日刊『平民新聞』1907、2月14日
- 陳力衛 「「主義」の流布と中国的受容——社会主義・共産主義・帝国主義を中心に」『成城・経済研究』第199号、2013年1月
- 辻野功 「明治期の片山潜」『キリスト教社会問題研究』11号、1967年3月
- トマス・ハクスリ著、上野景福訳 『進化と倫理』 育生社、1948
- 久津見蔵村 「社会主義者諸君に告ぐ」週刊『平民新聞』19号、1903、3月21日
- 保住敏彦 「社会主義者の社会ダーウィン主義観—第2インターの場合—」『経済論叢』(京都法学会)141(6)号、1988
- F.G.ノートヘルファー著、竹山護夫訳 『幸徳秋水—日本の急進主義者の肖像』 福村出版、1980 (F. G. Notehelfer, *KOTOKU SHUSUI: Portrait of Japanese*

Radical, Cambridge Univ. press, 1971)

松沢弘陽 『日本社会主義の思想』、筑摩書房、1973

松永俊男 『ダーウィンをめぐる人々』、朝日新聞社、1987

山泉進 「社会主義と社会進化論—幸徳秋水」『近代日本思想の軌跡—西洋との出会い』、北樹出版、1982

Ely, Richard.T. *Socialism.AnExaminationofitsnature,its strength and its weakness, with suggestions for social Reform*, Thomas Y. Crowell & co.; New York, 1900.

第二章 「生の拡充」として読み解く労働運動

— 大杉栄の進化論的解釈 —

1. はじめに

本章では、大杉栄の進化論に基づいた社会主義解釈に注目し、その特徴を究明することを目的とする。社会主義理論を進化論および自然科学にアナロジーする方程式を探って、連続的な漸進主義としての「無政府主義」から、「生」や「本能」の拡充を唱える大杉栄独自の「革命的サンジカリズム」に展開して行く経緯を明白に究明してみる。

大杉栄は「大逆事件」後の日本社会主義運動の「冬の時代」のただ中において、「徒に運動復興の機運を待つよりもむしろ進んでその時期を作るべきだ」¹という積極的な姿勢から雑誌『近代思想』を発刊して評論活動を始める。『近代思想』で展開された活発な評論活動によって、彼は新進の評論家として世に認められるに至った。大杉栄の評論活動は、この後に、月刊『平民新聞』、『文明批評』、『労働運動』と続く一連の機関誌や『中央公論』、『早稲田文学』、『改造』等の諸雑誌を主要な活動舞台としつつ、1923年の彼の死にいたるまで続けられた。彼の評論の対象は、文学論、芸術論をはじめ、近代思想史、労働運動史、哲学、倫理学、社会学、人類学、生物学などの多方面に及んでいる。

大杉栄は評論活動においても、直接に労働運動にかかわる時も、頻りに「生」や「本能」という言葉を用いて自分の議論を展開した。同時代に活動していた堺利彦は、彼自身を「唯物論必然論」に立脚するとし、大杉を「稍神秘的なる

唯心論自由論」に位置付けた。このような解釈は荒畑寒村や山川均にも類似であった。また、現在に至ってもこの解釈は受け継がれ、西洋の哲学から取り入れた観念論的な要素として扱われがちである。

ところが、これらは幸徳秋水の『社会主義神髓』や丘浅次郎『進化論講話』に啓発されて、社会主義運動に足を踏み入れた人物に対する評価としては、多少奇妙に思われる。大杉が出した翻訳書の多くが、自然科学にかかわる著書であったことや、度重なる収監の間にも、自然科学に関する書籍を耽読していたことなどから、このような評価は肯定しがたい。

それゆえ本章では、大杉栄の進化論や進化論哲学の受容に焦点を合わせ、それによって、大杉栄の思想の特徴を明らかにしてゆきたい。大杉栄が、一見観念論的な要素のように思われる「生」や「本能」に着目する経緯を考察し、それを労働運動論にいかに関係していくのかを浮き彫りにすることを目的にする。

2. 学問への探求心と革命への渴望

香川県丸亀市に生まれた大杉栄は、陸軍軍人である父東の任地の関係で新発田へ転じ、そこで少年期を過ごした。気の強い母親譲りの腕白な少年であった大杉栄は、軍人一家という家庭の環境や日清戦争後の三国干渉によるナショナリズムが高揚する中で、陸軍士官を目指して名古屋の幼年学校に入学した。

しかし、幼年学校の厳格な規律と無条件な服従を強制する環境は、大杉栄をして「脳神経衰弱」になるまで追い詰め、同僚との格闘事件を起こし、退校となった。大杉栄においてこの体験は反軍思想の培えとなった。

新発田へ戻った大杉栄は漠然と文学をやろうと思っていたが、文学では父の許可をもらえないと汲んで、妥協案としてフランス語に将来を託すことを決

めた。1920年正月に上京し、替え玉を使って、やっと順天中学校後年級に編入したが、翌年には首尾よく東京外国語学校へ入学できた。

田舎から上京してきた野心に満ちた青年として大杉栄は、時流の最先端に行く新思想や新知識、そして国の運命を左右する運動や事件に敏感に反応し始めた。周りの青年たちを通じて、はじめて社会学や心理学という学問を知り、貸本屋から哲学書、宗教書、そして社会問題に関する書籍を借りて読みあさった。その中の丘浅次郎『進化論講話』や幸徳秋水『社会主義神髓』は「社会主義」への接近に大きなきっかけとなった。とりわけ、丘浅次郎の本について「すべてのものは変化すると云ふ此の進化論は、また僕の中に大きな権威として残つてゐたいろんな社会制度の改変を叫ぶ、社会主義の主張の中へ非常に入り易くさせた」²と回想しているように、進化論的な観点が彼の歩みに重要な契機を与えたと見受けられる。

しかし、前章でもふれたように、丘浅次郎は社会主義について、平等な社会を主張して個人の間、あるいは集団の間の生存競争を否定し、社会進化のもっとも重要な動因である「生存競争」を除去する論議であると否定的な立場を示していた。人間は常に競争する存在であると考えた彼は、たとえ社会制度を改めたとしても、世は以前と同様に激しい競争や生活の苦しさから免れることはできないという³。

それにもかかわらず、大杉が進化論を社会主義への経路として回想しているのは、やはり幸徳秋水の役割を考えるべきである。やはり前章で論述したように、幸徳秋水は『社会主義神髓』や週刊『平民新聞』の社説を通して、進化論と社会主義の関連性について繰り返して説いていたからである⁴。

大杉栄は上京して間もない時、ただ一番安いからという理由で『萬朝報』を購読して幸徳秋水、堺利彦、木下尚江、安部磯雄などの名前を覚えた。また、幼年学校で培われた反軍的な感情も働き、日露戦争に際して一時期、『萬朝報』

で展開された非戦論に強い共感を抱いた。やがて、戦争についての編集方向をめぐり、幸徳秋水や堺利彦らが『萬朝報』を離れて週刊『平民新聞』を創刊すると、大杉栄はただ熱心な読者から社会主義運動の「一兵卒として」参加したという情熱に駆けられ、「平民社」同志の一人になった。

大杉栄は新聞の発送を手伝ったり、西川光次郎と一緒に名古屋に「社会主義伝道行商」に出たりしていたが、社会主義運動の前面に立つためにはもう一つの契機が必要であった。それは監獄での思索と読書であった。大杉は1906年3月の東京市電値上反対示威のために検束され、引き続いて二度の筆禍事件や同志山口孤剣の出所歓迎会の時の赤旗事件などで合計約三年二ヵ月におよぶ獄中生活を余儀なくされた。赤旗事件とは、山口孤剣の出所歓迎会の折に、片山潜らの議会政策派に対する挑発のため、大杉栄や荒畑寒村らが「無政府」「無政府共産」「革命」と書いた赤旗を街頭で打ち振った途端に検束されたというもの。これは明治政府の急進主義に対する手加減抜きへの圧迫の幕開きを意味するものであったが、皮肉にも大杉は千葉監獄で「大逆事件」後の最も危険な時期を潜りぬけることになった。

大杉栄は自らが「監獄で出来上がった人間」だと自負する⁵ほど、獄中での読書と思索の蓄積、語学の練磨はその後の活動に大きく滋養分になった。社会主義やアナキズムの書籍を丹念に探る大杉栄の成長振りには、幸徳秋水も一目置いた程である⁶。大杉はこれらの書籍から社会主義理論だけではなく、自然界から人類社会にいたるまで、幅広く展開される研究方法に刺激を受けた。

バクーニン、クロボトキン、ルクリュ、マラテスタ、その他どのアナキストでも、まず巻頭には天文を述べている。次に動植物を説いている。そして最後に人生社会のことを論じている。(中略) そして、僕は自然に対する知識のはなはだ薄いのに、毎度毎度恥じ入る。これから大いにこの自然を研究して見ようと思う。(中略)僕はまた、この自然に対する研究心とともに、人類学にはなはだ趣味をもって来た。そ

してこの人類学はまた、人生の歴史に強く僕の心をひきつけて来た。
(幸徳秋水宛・1907年9月16日付)⁷

その刺激は「自然に対する研究心」と「人類学」に対する興味として表れ、学問に対する探究心と革命に対する渴望をさらに助長させた。当初から進化論と社会主義を強く結び付けて認識していた大杉栄にとってみれば、自然な成り行きのように思える。この探求欲は大沢正道氏が評したように、翻訳的な明治社会主義の限界を超えて、自立したアナキズム理論の確立へ導く一歩であった⁸。

赤旗事件時の獄中書簡からは、社会主義関係の書物が厳重に禁止されたこともあって、文学をはじめ、社会学、生物学、人類学、経済学や最近の哲学などの多様な書籍の差し入れの要求が続く。後にこの時期を回想して、「その独立を書物でやろうと思った僕は馬鹿だった」⁹と自嘲はしているが、『近代思想』以降に展開する彼の思想的に原点はこの時期に形成されたといえる。

しかし、1910年5月、大杉栄は千葉監獄で「大逆事件」という大きな危機を迎えた。全国各地から数百人の社会主義者が検挙されて厳重な取調べを受け、些細な理由でも爆弾事件の関係者であると認定されて投獄された。やがて幸徳秋水をはじめ12名が死刑に処されるなど、これまでとは比べられないほどの弾圧が社会主義者やそのシンパに降り注いだ。ただ、赤旗事件ですでに囚われの身であったため、連座を免れて済んだことが大杉栄にとって不幸中の幸いであった。やがて出獄の時がきたが、社会的状況は組織的な活動はもちろんのこと、一切の宣伝活動もできず、ただただ沈黙を強いられることになった。だが、その底から、大杉栄は、その後の思想的傾向を思わせる一つの文章を『太陽』に寄稿している。

3. 進化の新たな出発点としての「革命」

大逆事件の余波がいまだに鮮明だった1911年5月、大杉栄は雑誌『太陽』主幹を務めていた浮田和民（1860～1946）宛に一編の文章を送った。浮田が同年の3月と5月に『太陽』誌上で発表した「社会主義及び無政府主義に対する憲法上の疑義」（1911）に対して論駁を試みた「無政府主義の手段は果たして非科学的乎」（1911）がそれである¹⁰。

浮田は「社会主義及び無政府主義に対する憲法上の疑義」で、こう述べている。

我國現今の狀勢は假令ひ外國から危險思想が入り來らずとも隨分内部から危險思想を發生することも有り得べき時期に近づいて居るけれども、併し乍ら我國民は古來保守的であり又た極端に走ることを好まぬ習慣を有つて居る。故に内部の事情から言へば今頃自然に社會主義を發生し、其極無政府主義者をも産み出だす程には社會進化の順序、生活困難の程度が進んで居らぬ。西洋諸國の例を以て言へば一般人民は先づ政治上の自由平等を要求し、次に經濟上の自由平等を要求する順序となつて居る。然るに是迄日本の多数人民は未だ一向に政治上の自由權利を要求して居らぬ。彼等は政府の専制若しくは小數政黨の爲すまゝに政治を放任し満足して居る。是くの如き人民の中から今頃有力なる社會主義や無政府主義の起つて來る氣遣ひはない¹¹。

浮田は政府の強硬策がむしろ社会主義者たちを一層危険な方向に追いやるという、当局の思想政策が失敗であると批判する論旨だった。彼によれば、いまだ日本は自然に社会主義に移行するほど「社会進化の順序」が進んでいない、それにもかかわらず、思想的な流行をみせるのは社会的な原因があるからなので、それを取り除くのが優先であり、一部の思想家を弾圧して余計に人心を刺激する愚は取るべきではないという。そして、社会主義と無政府主義を区別し、

社会主義と理論的なレベルにとどまる無政府主義は容認する方が立憲国家たる日本のとるべき政策であると論じたのである。

では、浮田は社会主義と無政府主義をどのように区分していたのか。浮田によると、「科学的な社会主義」はドイツをモデルとして「輿論を基礎として漸次経済的大革命を成就せん」¹²とするもので、日本の国体とも相容れるという。社会主義と比べると無政府主義は、一層個人の自由に重きを置いて一切の権威を否定する点で「極端な個人主義」であり、また徹底した共有制を主張する点で「極端な社会主義」だという。浮田の無政府主義の概略について、大杉栄も「個人主義の魂と社会主義の才」をあわせた「大調和主義」が無政府主義であるとおおむね認めていた¹³。「青年に訴ふ」（日刊『平民新聞』43・45～47・50～56号、1907年3月）の翻訳の前にも『相互扶助論』の抄訳に携わってクロポトキンに詳しかった大杉栄にとっては、浮田の論理にさほど違和感を感じなかったはずだ¹⁴。

だが、その実践方法に対する浮田の説明に大杉栄は食って掛かった。浮田によれば、社会主義は、かりに実行は不可能としても、「進化の法則」に従って漸進的に社会主義社会を目指す「科学的」な議論である。ところが、無政府主義は「一足飛びに完全なる理想境」に到達しようとする「空想」に過ぎない「非科学的」で「非立憲的」な議論だとした。

之に反して無政府主義は実行の出来ぬ空想である上に其の手段が非科学的で又た非立憲的である。嘗に理想として理論的に主張するに止まらず、之を實際に實行せんとするに至ては革命的無政府主義で現行犯罪となるから之を法律にとって處罰するの外はない。犯罪的無政府主義は文明社會共同の敵として取り締りを嚴重にす可きは當然の事である¹⁵。

「健全なる国家及び家族」という土台の上で個人の健全な発達が可能だと

みる浮田にとっては、そのひとつの柱である「国家なく政府なしに」それができると主張する無政府主義は、あまりにも人間の天性に対して楽観的な夢想到過ぎなかった¹⁶。

浮田の無政府主義批判は、四年前に日本社会党の路線をめぐって、田添鉄二が幸徳の直接行動論を「進化的革命をしらざる非科学的思想」¹⁷だと批判したと軌を一にしている。それに対して幸徳は「社会進化の動機」はさまざまであるが、「直接行動と雖も一夜に革命を行ふ」というのではない、「団結を鞏固にする為に長月日を費やした後に革命は成就できると考えるのだと応酬した¹⁸。このように進化論すなわち科学性は、当時における社会主義の正統性を計る重要な尺度として認識されていた。しかも、丘浅次郎や幸徳秋水の影響の下で社会主義に接近した大杉栄にとって、その核心である科学性については、積極的な反駁を示さなくてはならなかったはずだ¹⁹。ここで注意しておきたいのは、幸徳秋水は無政府主義者に転身した後にも、「革命」を社会進化の大段落ととらえる漸進主義に立って、それを科学的であると考えた点である²⁰。浮田の理解は、幸徳の思想に対するものとしては一知半解というべきものであろう。

さて、大杉栄は浮田が狭義のダーウィニズムに立脚していると反論を始め、いわゆる「ダーケンやヘッケル一流の進化論」はもはや最新の科学的発見に合致できなくなっているという。

まずワイズマンの旧来の遺伝説破壊論が出た。すなわちある生物がその生存中に得た特性は、その子孫に影響するものでないということになった。そしてこの遺伝によって新しき変種が出来ると言った説は主として原始生物のジャームプラズムに対する周囲の影響、胎内にあるジャームプラズムに対する周囲の刺激、および授胎の際のジャームプラズム結合によって新しき変種ができるという説に変わった。次にデ・フリースの平凡なる進化の程順論を破壊するの説が出た²¹。

ワイスマン (August Weismann, 1834～1914) の生殖質連続説やド・フリース (Hugo De Vries, 1848～1935) の突然変異説、クロポトキンの相互扶助説の「三つの新学説」が新たに「真理」として認められつつあると記した。そして、その新学説を社会科学に応用すれば、突然変異説によって「急激なる革命」が擁護できるとし、生殖質連続説は「相互扶助の大感情」が「人類の原始ジャーンプラズム」(生殖質)に備わっていることを説明してくれるという。西欧無政府主義の代表者であるクロポトキンが説く相互扶助説は、言うまでもなく、無政府主義の「根本哲学」とであると論じた。

大杉栄のこのような論駁は妥当なものだったのか。

確かに世紀の変わり目に進化論の議論に大きな動きが生じていた。ダーウィニズムは19世紀後半まで、進化それ自体とまったく同意語としてとらえられた。世紀の変わり目においても、進化論に対する信頼は崩れなかったが、進化を起こす要因についてダーウィンが唱えた「自然選択」ではなく、その他の要因に目を向ける生物学者の数が増加していた²²。生理学の発達によって、ラマルク (Jean-Baptiste Lamarck, 1744～1829) の「用・不用説」を立証しようとするネオ・ラマルキズムが新たに台頭した。それと並行して、ド・フリースの突然変異説はダーウィンが論じた漸進的でまた連続的に起こる進化を、非連続的で急激に起こる現象だと説いて、ダーウィニズムを完全に失墜させた。

大杉栄がこの変動についていち早く反応できたのは千葉監獄での読書のためであった。とりわけ、浮田に対する論駁には、アーサー・ルイス『社会のおよび有機体の進化』(Arthur Morrow Lewis, *Evolution, Social and Organic*, 1907)を参照して行われたと思われる。ルイスはダーウィンの知識が社会主義哲学を理解するために必要であると認めつつも、ダーウィンは「遺伝と変化の原因および起源」について明白な答えを提供できなかったと指摘した。そし

て、社会主義を「社会現象に対する進化論の応用」であるとするルイスには、新たに登場した進化論に社会主義を調和させることは当然のことであった²³。

ルイスはド・フリースの突然変異説は「偶発的变化」の妥当性を証明し、スペンサーやヘッケルが説いてきた連続的な漸進主義の進化論に大打撃を与えたという²⁴。急激的な革命に対する進化論の正当な理論付けが表れたのである。また、社会ダーウィニストたちが生物の努力の結果として進化が起きると主張したのに対し、ワイスマンやド・フリースの理論は、物理的な環境の変化による種の変異を証明したという。これによって、社会主義者が経済的環境を正しく変化させれば、人類は救われるということが、正しく裏付けられたという²⁵。

大杉栄が急激的な革命の科学的な正当性を、ド・フリースを用いて説いたのは上述したとおりで、ルイスの観点と同一であった。ところが、ワイスマンの遺伝説についての説明は少し異なる面をもっていた。

獲得形質の遺伝に対する環境の作用の重要性に重点をおいたルイスは、スラムなどの劣悪な環境下で人々が獲得した悪習慣や悪い性質は、次世代に遺伝できないことが証明できたため、社会環境改善によって社会問題が解決できるという社会主義を援護する説であると述べた²⁶。いわゆる環境決定論ともいえる。ところが、大杉栄はワイスマンの生殖質連続説をクロポトキンの相互扶助論に混合させて、「相互扶助の大感情」が生殖質に備わっており、進化の動因として作用すると説いた。

大杉栄は、浮田に対する論駁にルイスの著作以外にも、ルクリュ (Elisee Reclus、1830～1905) の *L' Evolution la revolution et l' ideal anarchique* (1902) の第一章を用いたと直接に言及している。進化と革命は同一現象の相次ぐ二つの「行為」で、進化が革命に先立つ。革命が遅れる理由は「周囲の抵抗」に起因すると見ていた。物質世界においても人間社会においても変化の

際には、周囲の惰性による障害や抵抗にぶつかり、それを乗り越えようとする「強き精力」「荒き努力」によって完成できるという²⁷。

この進化の大段落および新たな出発点としての革命は、幸徳秋水の革命観とも似ている。しかし、幸徳が方法はともあれ、間断なき努力や「利導」によって新社会が訪れるという漸進主義的な色彩を残しているのに対し、大杉は抵抗による蓄積された「力」の爆発に急進的な革命観が成り立つ余地を作っている。そして大杉栄は次のように論を進める。

子供は父と母との相続ではない、一新生である。進歩ということは、常に異なる各個人に出発点の断えざる変化にあるによって起る。生物の系統樹は、樹自身と同じく、種々たる大枝小枝のより集まりであるが、各枝はその生の力を各々の親枝に求めてはいない。各々その根原の水液の中にこれを見出している²⁸。

革命は旧形が不十分になった時に、新たな新形に移る生命の「自己発現」作用であり、「一足飛びに完全な理想郷」に達することではないという。そして、それは「根源の水液」のもつ傾向性が個々人において表れることだというのだ。

ここで大杉栄が、ワイスマンのいうジャーム・プラズム(生殖質)を「根源の水液」のようにとらえていること、その連続性を個体を超えて滔々と流れる「生命」のイメージのように考えたことがわかる。これによってド・フリースの突然変異説とともにアンリ・ベルクソン (Henri-Louis Bergson、1859～1941) の『創造的進化』(*L' évolution créatrice*、1907)にも接近しやすくなったのではないだろうか。大正年間に「生」のそのものの活動に重点を置く方向に向かう大杉栄の思想の歩みを予見させる場面である。

4. 大杉栄とベルクソン、創造的進化の一動力である「本能」

大逆事件の二年後、大杉栄と荒畑寒村（1887～1981）が文芸雑誌『近代思想』を創刊して、運動の新たな活路を模索しはじめた。大杉栄は『近代思想』の誌上において、「生の拡充」（1914年7月号）や「生の創造」（1915年1月号）など、「生」と「自我」を基調とする思想を展開する。

西欧の思想界において、ダーウィンに触発された進化の議論が、ただ生物学の領域にとどまらず、人間社会と宇宙一般の進化と発展という図式を形成していた。「生」と「生命」についての議論は観念論的範疇から離れ、実感をもって迫ってきた。日本の思想界もその大きな波の外にはなかった。

生と云ふ事、生の拡充と云ふ事は、云ふまでもなく近代思想の基調である。近代思想のアルファでありオメガである。然らば生とは何にか、生の拡充とは何にか、僕は先づここから出立しなければならぬ²⁹。

大杉栄にとって近代思想の核心である「生」の真髄は「自我」であり、「一種の力」であった。「生」を抽象的な生命一般に還元せず、個々人の「自我」から求め、さらに「力」＝「動作」＝「行為」をその根本性質として取り上げる。活動する力、しかも普遍的なものではなく、生身を持つ個人を個人として存在させる意味においてのこの概念は、シュティルナーにも見られる。しかし、シュティルナーは、力である個人と生命の関係は明白ではなかった³⁰。

大杉栄は「生」そのものを動作する力として活動に直結させている。その「生」は、ひとつの固定された空間に居座らず、「拡充」を開始する。個人の生は、それを束縛する一切の規範——国家をはじめ、抽象的な権威になった既存の道德、宗教、芸術、そして人間性などの普遍概念——を超えて己を「拡充」し、「充実」を求める。ここで問題になるのは、如何なる活動が「生の充実」

を獲得できるかである。

大杉栄は『近代思想』創刊号の「本能と創造」で、坪内逍遙の「新しい女」論を取り上げて論を進める。逍遙によると、女は本来感情的に生まれついて本能に走るといい、男の理性と対立図式を設定した。大杉栄はこの逍遙の図式において本能のほうに軍配を上げる。

僕は此の衝動的行為或は本能的行為と云ふことに重大なる意味を結びつけたい。即ち本能の偉大なる創造力を考えたい。僕は此の衝動的行為、或は本能的行為が、近代のあまりに聡明なそしてあまり優柔不断な青年に対する一種の解毒剤となり、そしてベルグソンの謂はゆる創造的進化の一原動力となつて、現代の沈滞し切つた頹廢的気分を救う重要な一要素となるものではなかろうかと思ふ³¹。

人間の生は力であるため、行為することをその本領としているが、その個々人の「生の拡充」をするために大杉栄が注目したのは、「衝動的行為」、すなわち自分の内部にある「本能」の命ずるに従う行動こそが大なる創造を生むという等式である。つまり、多様な経験を積んだり、勤勉に知識を増やしたり、知性と理性を磨き上げたりすることは問題ではない。まず、本能的・衝動的な行為が重要である。

だが、これはいささか奇怪に聞こえるのではないだろうか。一見、自己利益のためにしか働かないようにみえる本能にすべてをゆだねてもいいのか。

「本能」に従うことは「生の充実」のどころか、ぶち壊してしまわないだろうか。しかし、大杉栄がいう「本能」はただ単に自己の欲望として解釈できない様子を表す。むしろ人間の「生」を変化と創造へと導く力の根源として位置づけている。そして、「本能」をベルクソンの「創造的進化の一動力」として定義した。

船山信一氏（1907～1994）は、大正期に活動した他の社会主義者たちが「明

治の社会主義者と同じく」「進化論や俗流唯物論または実証主義」に基礎をおいた頃、「ベルグソンの生命哲学やプログラマティズムにつらなる大杉栄の多分に観念論的な哲学」が、大正期の社会主義をもっとも顕著に現したという³²。明治末期から大正期にかけての日本では、ベルクソンの思想が大いに流行した。確かに、大杉栄はこの時期にベルクソンの思想を、いち早く受容した一人である³³。

20世紀の初めに起ったダーウィニズムの失墜については、前節で簡略に述べた。ネオ・ラマルキズムとネオ・ダーウィニズムの論戦が飛び交う中、ド・フリースの突然変異説の登場は新たな進化論哲学を生んだ。ベルクソンの『創造的進化』がそれである。ベルクソンは「生命」の流れの底に、ある一つの種が別の種に分裂することを用意する「根源的な躍動」が起っているに違いないと考える。これが「生命の躍動」(élan vital)である³⁴。この生命の推進力は突発的な飛躍によって進化してゆくが、それは一直線的なものではない。むしろ爆発してさまざまな方向に分岐してゆくものである。生物は多様な方向性のなかで、主に「植物的麻痺」「本能」「知性」の三つに分岐されてゆく。とりわけ動物は「本能」と「知性」の二つに分かれて行く。

そして、「本能」は「事物」の認識にむかい、「知性」は「素材」と「素材」の関係を認識することにむかう。「知性」は過去の推論をたわめて現在の経験の方向に沿わせて科学を作り出す。物質を使って道具を作ることに長けているこの知性は、物理的な作用の秘密を明らかにしてくれる。知性の本性は物質を操作することであるため、物質についての認識には大きな問題にぶつかることはない。しかし、生命については問題が大きく変わる。知性は生命を理解する時にも、物質化して認識してしまうからだ。そもそも物質ではない生命について、科学はただその外観だけを語ることはできない。知性は物質に向かって、本能は生命にむけて据え置かれているということである。

大杉栄はこの生命をつかみ得る「本能」を賭博者の心理から描き出す。アナトール・フランス (Anatole France、1844～1924) の『エピキュウルの園』(Le Jardin D'Epicture、1895) の「賭博者」に触発されて書かれた「賭博本能論」がそれである。「一枚のカルタ」の中に「一生涯を生きる秘訣」が潜んでいるとし、生命に潜んでいる可能性を引き出す「本能」を見せる。

科学は、この前者の本能を満足すべく、理知によって創られた。われわれは科学の教える正確の領域において、できるだけ苦痛を避けて快楽を求めねばならぬ。また科学のいわゆる正確領域をますます拡大することに努めねばならぬ。しかし科学の領域は甚だ狭い。われわれの生活本能は到底この科学だけで満足は出来ない。そこで 臆断
フィロゾファイズ
をやる、哲学をやる。かつ彼の科学そのものにすら、その根底において、必ず何らかの仮定がある。かくしてわれわれは、この後者の本能に押されて、未知の世界に入っていく³⁵。

大杉栄は、人間には相反する二つの本能が存在して、現実の生に甘んじてなるべく苦痛を避けようとする本能があり、もうひとつの本能は冒険を楽しむように「苦痛を通じて更に快楽を求める」という。その両者のうち、科学が宿るのは前者の本能であるが、人間はそれに満足せず、もっと自分の生を充実させようと努める。その鍵になるのは后者であり、それは現実に安住することなく、我々を未来に向かわせる。現実との妥協である「科学」に代表される本能と未来への跳躍を促す本能は、それぞれベルクソンの「知性」と「本能」に当てはまる。

大杉栄がいう「本能」は、逸脱的な、快楽に耽る、統制不可能な本能でなく、このように真の「生」の意味をつかみ得るという意味での「本能」である。また、現代人においては動物の本能がそうであるように赴くままの本能ではな

く、「理性の洗練」を受けた本能である。

本能は盲目だ。従つて本能そのままの表現は多くの誤謬を伴ふに違ひない。けれども失敗は猶 イナクティブ 無 為 に優る。可なりの誤謬を犯しつつも、猶多少の長い間これが続けて行く時には、やがて本能の行為そのものにアイデアが出て来る。人の行為を律する在来の多くのアイデアは、在来のミリオウの間に出来た旧人のアイデアである。新人はこれ等の在来のアイデアを棄てて、更に新人自身の新しいアイデアを創り出さねばならぬ³⁶。

現代人の「本能」は、生の根源により近かった「原始の野蛮人」の逞しさはなくしてしまったが、知識と経験の助力を得て「モラル」と「アイディア」を獲得した、反省された「本能」である。動物から人間まで一貫する「本能」という流れの中に、人間にだけ持つことができない性質の本能は、またベルクソンの「直観」の概念を想起させる。

ベルクソンによれば、知性が「生命」をつかむことができない限界を持っているのはすでに見てきた。本能は生命を内部から認識する。しかしこれは反省的意識として内在化できない。本能は生命と共感をもつが、特殊な対象に限定され、生命一般に拡大することは不可能である。しかし、人間において意識が高度に覚醒されると、理解関心による利害から自由になり、本能を意識化させる。このように覚醒された本能が「直観」である。「直観」は利害から自由であり、自己意識的で、対象を無限に拡大させる本能である³⁷。

5. 生命主義と労働運動、そして「生の拡充」

ベルクソンは、「生命」が物質に触れている時は「衝動力ないしは躍動」で

あるが、「生命そのものとしてみるならば測り知れない潜在力」であり、その根源にあるのは「意識」であるという³⁸。生命の進化はこの「意識」の流れが物質に浸入してきた過程であり、この運動は物質によって遅らせながらも、無限に分岐されてきた。有機体の「潜在的な意識」は、進化にめざめ、「表象として内面化」しないで、むしろより活発に活動する方向を獲得した。そして、「生命」の流れの分岐した一つの先端にたつのが人間である³⁹。

また、人間の意識の特性は「知性」であるとベルグソンはいう。だが、「直観と知性は意識作業にむかう相反する二方向をあらわす」ゆえ、「完全で充実した人間性」はその両方向を発達させていくことである。人類の意識は物質を征服するために、自分の最大の力を枯渇させた。ほんの灯火のように点滅している「直観」を取り戻す役割を、ベルグソンは「哲学」にゆだねる。

大杉栄は有機体がむかう活動性を「行動」に、「直観」を社会的「実行」や「革命」に置き換えて社会変革にむかう「行動の哲学」としてまとめあげる。「生」の根本性質である「生の拡充」は、周囲との闘争や人類同士の間での闘争によって進んできた。だが、資本主義社会の現代に至って、「人類同士の闘争と利用」は、互いの「生の拡充」を侵害し、「生」そのものを沈滞させるにいたった。上昇を阻止された「生」は突破口を探す。「生」の要求を最も阻止された「非征服階級」である労働者の少数によって「生の拡充を障害する、一切の事物に対する破壊が現れる」と大杉栄は見なす。だが、生の要求によるものとしても、「反逆」は新生活を「創造」できるのだろうか。

実行とは生の直接の活動である。そして頭脳の科学的洗練を受けた近代人の実行は、いわゆる「本気の沙汰でない」実行ではない。前後の思慮のない実行ではない。あながちに手ばかりに任した実行ではない。多年の観察と思索とから、生の最も有効なる活動であると信じた実行である。実行の前後は勿論、その最中といえども、なお当面の事件の背景が十分に頭に映じている実行である。実行に伴う観照がある。観

照に伴う恍惚がある。恍惚に伴う熱情がある。熱情は更に新しき実行を呼ぶ。そこにはもう単一な主観も、単一な客観もない。主観と客観とが合致する。これがレヴオリュウシヨナリーとして僕の法悦の境である。芸術の境である⁴⁰。

「知性をもとどおり直観の中に吸収しようとつとめる哲学の目」⁴¹のように、新生活・新社会の創造者である少数者は「科学的洗練」をうけた「実行」を行なう。統制できない破壊ではない。過去と現在、そして未来を、空間化された停止画像ではなく、一貫する流れに身をおく「実行」である。芸術家が自分と対象の間に置かれた障壁を直観の働きで崩して共感を得るように、革命家は自分の生命を物質である外部世界に浸透して絶えず創造していくことで「恍惚」や「情熱」を得る。

大杉栄にとっての「革命」は、ある社会的状態へと進むためにとる戦術的な手段ではない。「実行」すること、「革命」そのものが目的であり、「生の拡充」を得られるのである。これを以て社会体制を一挙に転覆すること、ましては暴力革命として読み取ることには無理がある。「客観」である外部・社会と「主観」である自我が相互浸透し、相補って新たな関係を創り出すことを意味する。この新生活創造において、切り口を開いた少数者は「革命」を指揮する存在ではない。ただ、人類が赴くであろう「生の活動方向」を示している存在である。突然変異体が種全体に広がり、新たな種として進化するように、「将来社会の大勢を」形づくる個体群である。大杉栄は「僕」の「生の拡張」は同時に「人類の生の拡充」であると言い切れるのも、このように「個体」と「種」との関係を「僕」と「人類」に見出したからである。

なお、このように個人の生が他人のために他人の中に広がっていくという構図は、ジャン＝マリ・ギュイヨー（Jean-Marie Guyau、1854～1888）の影響によって強められたと見られる。大杉栄は「生の道德」（『近代思想』1913年1

0月)を、ギュイヨーの『義務も制裁もなき道德』(*Esquisse d'une morale sans obligation ni sanction*, 1885)の結論の一章を直訳したものとしている。そして、ギュイヨーをベルクソンやクロポトキンやニーチェに影響を与えた人物として一つの系譜において紹介した。ギュイヨーは人間の生を意識的な生と無意識的な生に二分化して、人間活動の根底を無意識的な生に置いて両者は相ともに自己意識をなすと言った。なお、生は自己の拡充を意識しながら、その力を増進していく。

個人の生は、他人のために、他人の中に、拡がって行かねばならぬ。また必要に応じては自らの生を擲たねばならぬ。しかしこの拡大は生の本来に反したことはない。かえってその本来に従ったことである。さらに進んでは、これが真の要件ですらもある⁴²。

大杉栄はこの観点にたって、既存の社会主義についての批判やサンジカリズムに新たな意味を与えていく。『近代思想』第2巻4号の「生の創造」は、エンゲルスの『空想から科学へ』の一部を引用して筆を起し、「必然から自由への飛躍的生活」の意味を「外的強迫から内的発意への創造的生活」と解釈し、これが社会主義の理想とする最後の目標であり、「最近思想界における最も鮮やかなる色彩の旗印」とであると論じた。だが、既存の社会主義の根底には重要な問題が潜んでいると警戒を促す。

社会主義は此の所謂物質的史観説に立脚して、社会進化の要素として経済的行程、工業技術的行程を過大視するの結果、彼の必然から自由への飛躍を、外的強迫から内的発意への創造を、単に到着点としてのみ強調して、等しく亦之を出発点しなければならぬ事を忘れて了った⁴³。

大杉栄が問題にしたのは、新たな道德、新たな社会秩序は、外部の環境の

変異によって反射的に誕生するような性質のものではないということだった。大杉栄には、既存の社会主義が人間の意識や意志の外にある諸要素を寄せ集めれば、条件反射的に新世界が生ずる機械論に映った。さらに、それは「社会主義社会」というはっきりした一つの「到着点」を予め用意する目的論でもあった。だが、それは、新たな社会・新たな道徳を創ることを人間の生命活動の領域、つまり人類の進化として把握する大杉栄には受け入れられないものであった。われわれが得ようとする未来は、外部の環境によって自動装置のように到来するものではない、到達すべきある一定の目的はそもそもないということである。

ベルクソンは、生命の進化を「機械論が考える環境にたいする一連の適応とも、目的論が考えているある全体計画の実現とも」ことなるものであると強調した。不断に繰り返す創造こそ進化である。進化は生命の諸形態を新たに創造するだけでなく、「さらに知性なるものが生命を理解するのに役立つ観念や生命を表現するのによいような用語までつぎつぎに創造してゆく」⁴⁴とのべた。

大杉栄は、いくら未来を正確に描こうとしても、それは資本主義社会が生んだブルジョア「民主的思想や制度」の「模倣」にしかすぎないと論じ、真の自由と創造とは、労働者自身の中に、自身の団体の中に、自らの努力によって、新たな思想と制度を「発育成長」させることで得られると考えた。「進化が一本道を描かない」ように、「社会主義社会」の実現への道も単一的な過程しかないとは考えられない。「進化がそれぞれの方向をたどりはするが目的をめざししない」ように、「実行」にも予め目的を持たない。

センディカリズムは、其の影響（社会主義の理論家たちの影響—引用者）によつて形成されたと云ふよりも、寧ろ労働者がただ生きんとする本能に駆られて、或は右に行き、或は左に行き、或は進み或は退き、

遂に彼等の生活そのものの自覚と経験とから不断の流転を経て創造されたものである。彼等は最初から理想をもたなかつた。又定まつた運動方法をもたなかつた。素より何等社会的学説などをもつてゐよう筈もない。彼等はただ盲滅法に、其の目前の死から遁れんがために、更により善く生きんがために、彼等の能ふだけの全力を尽くした⁴⁵。

大杉栄は、幸徳秋水が社会主義の実現のために戦術的に取り入れた「直接行動論」に、新たな意味を見出すことができた。幸徳の「直接行動論」は議会で議席を争う「議会政策」に対する反対であつて、革命的政党、「無政府党」に反対したわけではない。つまり、依然として労働者はそれらに「伝道」される対象であり、「議員の選挙」に代わって「直接の伝道」による「団結訓練」が必要とされる存在であつた⁴⁶。

だが、大杉栄はこの「直接行動論」をサンジカリズムに見出す。サンジカリズムは惰性的・自動的運動ではなく、労働者の生命的・意思的な運動であるとし、労働者の生命、人類の生命の要求を充実に具現する運動形態であると考えた。これが生命の進化過程に沿った運動形態であるということを根拠に彼はこれを正しいものとしたのである。生物は「行動の中心」をなし、「世界に入りこんだ偶然性の総和」であるように、生命の表現である労働運動もさまざまな偶然性をもって展開するのは当然のことであつた。

このように、大杉栄はベルクソンの進化論哲学を応用した社会主義理論、サンジカリズムの中から「生の創造」を見出した。「自我」と「生」の「創造的進化」としての社会運動という試みは、大正期の文壇における大杉栄の地位を一定程度確保しただけでなく、民衆高揚期における労働組合運動からもかなりの共鳴を受けることになった。

もちろん、ベルクソンの「直観」を「実行」に、「進化」を「革命」に、「物質」を「社会」に等値することは強引な印象を受ける。恣意的であることは確

かだ。「哲学」の領域を社会運動の領域に置き換えたことにもたぶんに無理が生ずる。しかし、大杉栄が用いる用語や論理展開の構造は、ベルクソンから大なる着想を得たことは否定できない。

この生命主義的な労働運動論にたいして、堺利彦は『近代思想』誌上で、フランスのゲード派マルクス主義者であるラポポル（Charles Rappoport、1865～1941）が『ニュー・レビュー』（the New Review）に掲載した記事を抄訳して批判を試みた⁴⁷。山川均（1880～1958）はその二年後に『新社会』誌上で「唯物論者の見たるベルグソン」というタイトルでその全訳を載せた。山川が「ベルグソン哲学が特に吾々の興味を惹くことは、センヂカリズムとの関係であるが、本編は僅かに数行の批評で片付けている」⁴⁸ともらしたように、ラポポルのベルクソンへの批判は非理知主義に重点をおいていた。ラポポルは、ベルクソンが理知の役割をあまりにも過小評価し、分析の仕様が無い「直観」に立ち入ってしまったとして、それでは「吾々は何事も知らず」、「何事をも言ふ能はず」、「何事も理解」できないと論じた。

「直観」を問題視するのはマルクス主義の立脚した社会主義者だけではなかった。当代において無政府主義の代表者であったクロポトキンも共通していた。大杉栄はクロポトキンの『相互扶助論』を翻訳するなど、彼から多大な影響を蒙っていた。だが、クロポトキンのベルクソンに対する評価は、「隣人に関する仮定を無駄話しする農夫達と変わらない直観的才能を信賴して、その直観的断定が、事実に対する無智と彼自らの仮定の上にしか置かれてゐない、といふことをすら理解」⁴⁹できないとする「空想的主張」であると結論している。サンジカリズムと無政府主義との共通点を大いに認めたクロポトキンであったが、サンジカリズムにおける生命主義的な意味づけを入れる余地は持たなかった。

大杉栄は「僕がクロポトキン大明神でおさまっていたのはもう十年も十五

年も昔のこと」⁵⁰だといって、クロボトキンだけではなく、無政府主義からも遠ざかったとのべたのは、必ずしも政府の弾圧をさけるためのカムフラージュではなかった。彼の社会主義が立脚する世界観が、既存の社会主義理論から大きく変わっていたからである。

6. おわりに

以上のように、本章では、大杉栄の進化論に基づいた社会主義の解釈と、その変化過程を検討し、大正期を通して展開して行く彼独自の革命的サンジカリズムの根拠を確認できた。大杉は、丘浅次郎の『進化論講和』に啓発され、その社会的な応用として社会主義に関心を寄せるようになった。もちろん、これには幸徳秋水の「進化論的社会主義」が一役買っていたのは確かである。幸徳の影響の中、大杉は、社会主義に対する連続的な漸進主義解釈を、自分の立場を直接行動論に定めた後にも、また「大逆事件」の後の厳しい弾圧下にも変えなかった。

ところが、社会主義を進化論にアナロジーする、大杉の態度は、進化論における新たな発見と共に、彼自身の社会主義論にも変化をもたらすようになった。突然変異説によって非連続的な革命の可能性を確認し、やがてベルクソンの『創造的進化論』に出合い、革命の主体であるべき個々の労働者の「生」に注目する。「生」はそれ自体拡張するもの、充実を求めるもの、力として発現するものである。また、特定の目標を想定しない、偶然性を含むが、常に向上を求める。

この過程によって、大杉栄は、幸徳が戦術として導入した「直接行動論」に、その理論的な根拠を確立することができた。また、歴史唯物論に立脚する、マルクス主義に対する批判とともに、学者の理論としてのアナーキズムとも一

定の距離を置くようになる。このようにして、大杉は、労働者たちの自律的な労働運動の参加に多大な意味を与える、異色を放つ社会主義思想を展開するようになる。

(注 釈)

-
- ¹ 荒畑寒村「寒村自伝」『荒畑寒村著作集』第9巻、平凡社、1977年、317頁。
- ² 大杉栄「自叙伝」『大杉栄全集』第3巻、世界文庫、1963、192頁。
- ³ 丘浅次郎『丘浅次郎著作集5 進化論講話』、有精堂、1969、380～383頁。
- ⁴ これについては、本論の第1章5節に詳細に論じている。
- ⁵ 大杉栄「続獄中記」『大杉栄全集』13巻、現代思潮社、226頁。
- ⁶ 幸徳秋水は吉川守圀宛の手紙（1907年12月23日付き）で「アナキズムの書は、日本では未だ煙山のと久津見の外に纏まったものはないので残念だ。（略）併し書物が無くとも大杉栄と山川などが余程よく研究して居るから、聞けば分かるだろう」と書いている。（塩田庄兵衛編『幸徳秋水の日記と書簡』未来社、1990、140頁）
- ⁷ 大杉栄研究会編『大杉栄書簡集』、海燕書房、1974、38～39頁。
- ⁸ 大沢正道『大杉栄研究』、法政大学出版局、1971、62頁。
- ⁹ 大杉栄「クロボトキン総序」『大杉栄全集』第4巻、現代思潮社、1964、7頁。
- ¹⁰ この論文は、大杉栄の死後の8年に過ぎた頃、浮田和民によって再発見され、『思想善導の唯一手段は何か？』（文明協会、1932）の中に収録された。この経緯については、梅森直之氏の優れた研究を参照した。（梅森直之「大杉栄の精神史の一齣」『初期社会主義研究』4号、1990年、65～66頁）
- ¹¹ 浮田和民「社会主義及び無政府主義に対する憲政上の疑義（二）」、『太陽』、1911年5月号、8頁。
- ¹² 浮田和民「社会主義及び無政府主義に対する憲政上の疑義（一）」、『太陽』、1911年3月号、6頁。
- ¹³ 大杉栄「無政府主義の手段は果たして非科学的乎」『思想善導の唯一手段は何か？』、文明協会、1931、88頁。
- ¹⁴ クロボトキンの死後に同志ルドルフ・ロッケルは、彼の社会主義について「個人的自由と社会的平等」を結びつける「一種の総合」と評価した。（『クロボトキン全集』3巻、春陽堂、1930、496頁。）また、クロボトキン自身による説明は「無政府主義・その基礎と原理」Anarchist communism : its Basic and Principles などで詳しく行われている。
- ¹⁵ 浮田和民（二）、前掲書、6頁。
- ¹⁶ 同上、5～6頁。

-
- ¹⁷ 田添鉄二「議会政策論」日刊『平民新聞』、1907年2月14日、5頁。
- ¹⁸ 幸徳秋水「日本社会党大会に於ける幸徳取水氏の演説」『幸徳秋水全集』第6巻、前掲書、155頁。
- ¹⁹ 梅森直之氏はこれについて、発言の機会を失った大杉栄が、無政府主義の宣伝のために「浮田の論旨においてはやや末梢的な位置をしめる」主張のみをとらえる「意図的戦略」であって、やや「的外れ」だと説いたが、『近代思想』やその以降の大杉栄の論文の傾向を考えると、積極的に考えるべきだと思う。
(「大杉栄の精神史の1齣」『初期社会主義研究』第4号、初期社会主義研究会、1990、74～76頁参照。)
- ²⁰ これについては、本論の第1章6節に詳細に論じている。
- ²¹ 大杉栄「無政府主義の手段は果たして非科学的乎」前掲書、92～100頁。
- ²² ピーター・ボウラー著、鈴木善治訳『進化思想の歴史』下巻、朝日新聞社、1987、399～400頁。
- ²³ Arthur M. Lewis, *Evolution, Social and Organic*, Charles H. Kerr & Company, Chicago, 1907, pp. 41-58
- ²⁴ *Ibid*, pp. 87-88
- ²⁵ *Ibid*, pp. 56-57
- ²⁶ *Ibid*, pp. 78-80
- ²⁷ 大杉栄「無政府主義の手段は果たして非科学的乎」前掲書、1931、92～100頁。
- ²⁸ 同上、102頁。
- ²⁹ 大杉栄「生の拡充」『近代思想』、1913年7月号、2頁。
- ³⁰ 大沢正道『個人主義—シュティルナーの思想と生涯』、青土社、1988、149～154頁。
- ³¹ 大杉栄「本能と創造」『近代思想』、1912年10月号、4～5頁。
- ³² 船山信一『大正哲学史研究』、こぶし書房、1965、189頁。
- ³³ 当時のベルクソン受容に関しては、宮山昌治「大正期におけるベルクソン哲学の受容」『人文』第4号、学習院大学人文科学研究所、2006年、83～104頁。
- ³⁴ 鈴木貞美『生命観の探究—重層する危機のなかで』、作品社、2007、177～178頁。
- ³⁵ 大杉栄「賭博本能論」『近代思想』、1914年7月号、6～7頁。
- ³⁶ 大杉栄「本能と創造」、前掲書、5頁。

-
- ³⁷ ベルクソン著、真方敬道訳『創造的進化』、岩波書店、1979、213～214頁。
- ³⁸ 同上、305～309頁。
- ³⁹ 同上、315頁。
- ⁴⁰ 大杉栄「生の拡充」、前掲書、4頁。
- ⁴¹ ベルクソン、前掲書、319頁。
- ⁴² 大杉栄「生の道德」『大杉栄全集』第3巻、現代思潮社、1964、31頁。
- ⁴³ 大杉栄「生の創造」、前掲書、3頁。
- ⁴⁴ ベルクソン、前掲書、132～133頁。
- ⁴⁵ 大杉栄「個人主義者と政治運動」『大杉栄全集』第1巻、前掲書、308～309頁。
- ⁴⁶ 幸徳秋水「余が思想の変化」、『幸徳秋水全集』第6巻、日本図書センター、1968、142～143頁。
- ⁴⁷ 堺利彦「胡麻塩頭」『近代思想』、1914年9月号、16～17頁。
- ⁴⁸ 山川均訳「唯物論者の見たるベルグソン」『新社会』、売文社、1916年3月号、14～211頁。
- ⁴⁹ クロポトキン「ベルグソン氏の科学に対する反抗」『クロポトキン全集』第5巻、春陽堂、1929、297頁。
- ⁵⁰ 大杉栄「クロポトキン総序」『大杉栄全集』第4巻、現代思潮社、1964、6～7頁。

【第二章、参考文献】

- 浮田和民^a 「社会主義及び無政府主義に対する憲政上の疑義(1)」『太陽』、1911年3月号
- _____ ^b 「社会主義及び無政府主義に対する憲政上の疑義(2)」『太陽』、1911年5月号
- 梅森直之 「大杉栄の精神史の1齣」『初期社会主義研究』第4号、初期社会主義研究会、1990
- 丘浅次郎 『丘浅次郎著作集5 進化論講話』有精堂、1969
- 大沢正道 『個人主義—シュティルナーの思想と生涯』青土社、1988

-
- 大杉栄 「本能と創造」『近代思想』、1912年10月号
- _____ 「生の拡充」『近代思想』、1913年7月号
- _____ 「生の道德」『近代思想』、1913年10月号
- _____ 「賭博本能論」『近代思想』、1914年7月号
- _____ 「生の創造」『近代思想』、1915年5月
- _____ 「無政府主義の手段は果たして非科学的乎」『思想善導の唯一手段は何か?』、
文明協会、1931
- _____ a 「個人主義者と政治運動」『大杉栄全集』第1巻、前掲書、1963
- _____ b 「自叙伝」『大杉栄全集』第3巻、世界文庫、1963
- _____ a 「クロポトキン総序」『大杉栄全集』第4巻、現代思潮社、1964
- _____ b 「続獄中記」『大杉栄全集』第13巻、現代思潮社、1964
- 大杉栄研究会編 『大杉栄書簡集』海燕書房、1974
- クロポトキン 「ベルグソン氏の科学に対する反抗」『クロポトキン全集』第5巻、
春陽堂、1929
- 幸徳秋水a 「日本社会党大会に於ける幸徳秋水氏の演説」『幸徳秋水全集』第6巻、
日本図書センター、1968
- _____ b 「余が思想の変化」『幸徳秋水全集』第6巻、日本図書センター、1968
- 堺利彦 「胡麻塩頭」『近代思想』、1914年9月号
- 塩田庄兵衛編 『幸徳秋水の日記と書簡』未来社、1990
- 鈴木貞美 『生命観の探究-重層する危機のなかで』、作品社、2007
- 山川均訳 「唯物論者の見たるベルグソン」『新社会』、売文社、1916年3月号
- 田添鉄 「議会政策論」日刊『平民新聞』、1907年2月14日
- 船山信 『大正哲学史研究』こぶし書房、1965
- ベルクソン著、真方敬道訳 『創造的進化』岩波書店、1979
- ピーター・ボウラー著、鈴木善治訳 『進化思想の歴史』下巻、朝日新聞社、198
- 7
- 宮山昌治 「大正期におけるベルクソン哲学の受容」『人文』第4号、学習院大学人

文科学研究所、2006

ルドルフ・ロックエル著、新居格訳 『クロボトキン全集』3巻、春陽堂、1930

Arthur M. Lewis *Evolution, Socialand Organic*, Charles H. Kerr & Company : Ch
icago, 1970

第三章 大杉栄の「政治的な理想」論

― 戦略としての「自己獲得運動」の意味 ―

1. はじめに

本章では、大杉栄が抱いた社会主義社会への展望を、その「政治的な理想」論から追求してみる。大杉は常に運動における方向性を重視し、最後の目的を特定することに反対であった。また、体制の形にこだわるより、運動の主体の在り方を重視し、関心を注いだ。しかし、大杉の議論を推し進めて特定するならば、その「社会主義社会」は、いかなる姿で登場するのだろうか。当代における社会主義運動の動向との比較を通して、彼の革命ビジョンを具体的に探ることにする。

大杉栄は日本を代表する無政府主義者と言われている。たとえば『広辞苑』でも、幸徳秋水や石川三四郎は社会主義者、大杉栄の妻・伊藤野枝は女性解放運動家とし、大杉栄だけ無政府主義者としている。つまり、大杉栄といえば無政府主義という枠組みにおさめることに疑いが抱かれることもないほど定説になっているのである。

この無政府主義者という枠組みは、大杉栄に関する多くの情報を我々に提供すると同時に、またある種の偏見も与えてしまう。たとえ、無政府主義者は団体を組まない故に、大杉栄は組織的な活動に反対したとか、政治的な活動にも全く反対であり、せいぜい経済闘争に没頭する偏狭な革命展望しか持たなか

ったなどの評価が出かねない。この根底には無政府主義＝「反政治」、「反政治」的な傾向を持つ大杉栄という等式が成立していることが考えられる。それに対しては、ここでいう「政治」とは何を指すのか、また大杉が取った態度は全く没政治的なものであったのか検討する必要がある。そのために、まず大杉栄に対する先行研究を批判しながら、大杉栄の発言と照らし合わせて、彼の思想内容を検討してみたい。

その中からは大杉栄の「政治的な理想」が浮かび上がってくるが、それがどのような背景の中で誕生したのかを、世界的な労働運動・社会主義運動の潮流の中でとらえてみよう。そして、彼が取った姿勢を当時における社会主義運動の主流との関係において考察し、無政府主義という党派性を越えた分析を試みたい。

このような検討を通して、日本における初期社会主義運動の軌跡を、無政府主義やマルクス主義といった予め定められた枠の中から救いだし、良き社会を造ろうとした試みとして、より豊かに理解しうる手がかりを提供したい。

2. 自治の連合制 ： 機能的な民主主義

三谷太一郎氏は『大正デモクラシー論 吉野作造の時代』(1995)の中で、ロシア大革命の前における大杉栄を含む大正社会主義者たちがとった路線を「政治の否定」だと語る。「政治の否定」とは「議会を志向し、また議会を通じて国家権力を志向する一切の政治運動の否定である。なかんずくそれは社会主義運動における政党の否定である」と指摘し、その「政党の否定」の具体的な様態として政党内部の「政治」としてあらわれる「指導服従(リーダーシップ)関係の否定」や、政党間における「妥協交譲(バーゲニング)の否定」を挙げて説明する。そして、三谷氏は、大正社会主義者たちが「政治」のアンティテーゼ

として「自治」を対置したと語り、大杉栄もまさしく「政治」を否定して「自治」を打ち出した一人とした¹。この説明は一般的に流通してきた「反政治」という評価の典型である。また、浅羽通明氏は大杉を「権力を生み出す組織や代表を拒」²んだ人物として評価するが、これも大杉栄の「反政治」的な傾向に重点をおいていると言えよう。

三谷氏は、大杉栄は既成の「政治」を否定し、「自治」を打ち出した一人であつたが、その「自治」を担う自由な個人を作り出すために、彼は「再び政治を導入しなければならなくなった」ともいう³。大杉栄は常に、既成の「征服の事実」に対する「反逆」の意志は、「被征服者」に一般的に同時に起こるものではなく、その中の鋭敏な「少数者」の間により強固に形成されると言つた。しかし、彼はこの少数者の役割を、かつてフランソワ・ノエル・バブーフ（François Noël Babeuf, 1760～1797）やルイ・オーギュスト・ブランキ（Louis Auguste Blanqui, 1805～1881）が夢見たような武装した少数精鋭の秘密結社による権力奪取や独裁に置いたわけではない。そして、少数者は「被征服者」である多数者と結びつかなければならないことを主張した。そして、大杉栄はこの自覚した少数の反逆者が、いまだ社会変革には消極的で潜在的である多数の「被征服者」に刺激を与え、彼らに先例を示す模範としての役割を担うと言つた。

彼等少数者は多数者の無為と懶惰を知っている。多数者が自らその自我を捕捉する能わざるを知っている。自動力の欠如を知っている。されば彼等の事をなすや決して多数者のいわゆる一般意志に謀るの愚をしない。彼等はまず自ら起つた。そしてその大胆なる思想と行為とをもって、多数者に発意と実例と先導とを与えた。多数者は、自らを運転せしめて、その強力な潜勢力を働かしめる、何等かの衝動力を必要とするものである⁴。

このような自覚した少数者のイニシアチブをもって、三谷氏は「再び政治を導入しなければならなくなった」と批評したのだろうか。しかし、三谷氏は少数者のイニシアチブがなぜ「政治」と同一な意味になり得るのかについては詳しく語っていない。その最初の前提は「政治の否定」すなわち「政党の否定」であったはずだが、イニシアチブを「政治」と同一視して論じている。もし、イニシアチブを労働組合におけるリーダーシップを想定しているものとしても、イニシアチブと指導服従関係を等置するのは無理があろう。

そもそも「政治」は果たして「自治」と対立概念になり得るものなのか。「政党政治」に限って語るなら「自治」をその対概念として設定できると思えるが、上述した図式はこの含意を超えているように受け取られる。その図式の根底には、「政治闘争」＝「政党的社会主義（マルクス主義）」と「経済闘争」＝「サンジカリズム」という機械的な二分法が働いているのではなかろうか。大杉栄の発言を検討する限り、確かに「政党政治」に対する批判や不信感は根強い。しかし、だからとして大杉が政治一般を否認したわけではなかった。

僕の政治的理想は、さきにもいったごとく、各個人が相課することなくして相合意する、そしてこの個人より成る各団体も同じく相課することなく相合意する、個人も団体もまったく自治の連合制度である。そしてこの理想は、高遠なもしくは実現することのできない性質のものでなく、すでにわれわれの日常生活における個人と個人との関係および種々たる団体と団体との関係の間にすでに実現されて、しかもその真実なる生活であるとされているものである。われわれはただ、われわれの日常生活の中にあるこの事実をますます充実せしめますます拡張せしめて、さらにこの事実をして他の種々なる社会生活を、そしてついに政治的領域を支配せしめればいいのだ⁵。

大杉栄は、「自治の連合制度」を既成の「政治」にとって代わる理想像と

して語った。ただし、彼には「自治」を政治一般の領域の中で思考したことが窺える。

大杉栄も山川均や荒畑寒村と同様に、幸徳秋水が日露戦後に「余が思想の変化」（日刊『平民新聞』、1907年2月5日号）を媒介にして打ち出した「直接行動論」を積極的に支持した新しい世代の一員であった。とりわけ大杉は「直接行動論」の台頭の以前からも第2インタナショナルにおける改良派に批判的な態度を取り、自らを革命派と自認してきた。幸徳秋水に刺激を受けた後には、第2インタナショナルの趨勢を「平和的な運動より革命的運動」、すなわち「政治的運動より革命的運動に進みつつある」とみている。その顕著な兆候として「労働組合主義的、無政府主義的の不評者」が続出していることを革命派の新たな動きとして紹介している⁶。それまでの社会主義政党を中心にした運動から抜け出たこの運動方法に目を向けたのは他の新しい世代も同様だった。

ところが、大杉栄の既成の「政治的運動」の批判は政党内の「指導服従関係」や政党間の「妥協交譲」の他に議会の役割に向けられた。議会在がまったく無意味とは言えないが「議会は自由を与える所ではなくして、自由を承認する所」にすぎないとして、社会変革を遂行する中心部として認めなかった。議会の役割はせいぜい既成の「事実」として表れたことを法律で承認するだけの機能しか持たないという。代議政治や議会は民衆が叛逆的な行為を以て専制君主から勝ち取った結果に他ならないと、その起源を喚起し、政治的な自由も議会在が生み出すものではなく民衆の絶え間ない「自由と叛逆との精神」による行動が新しい「事実」として作り出すものであると語る⁷。この議論は議会無用論とまでは言えないが、幸徳秋水以来の「直接行動論」の解釈の延長線上にある。ところが、大杉はここにとどまらず、「代議政治そのものが各個人の充実せる活動を妨げる」制度であるとし、現行の「代議政治制度」そのものにも疑問を投げかける。

どこの国の代議政治に、代議されるものと代議するものすなわち選挙人と被選挙人との間に、および選挙人相互の間に、すき間のないピッタリと接触した関係があるか。（中略）しかるに翻って政治の上を見る。数千、数万、もしくは数十万の、互いに相見ず相識らざる、またなんら共同の事業に相従わざるいわゆる選挙人等が、ある一人を選出する。この被選出者は、ある特殊の問題を説明するために、もしくはある特殊の問題についての決議を主張するために、議会に送られるのではない。いわゆる代議士等は、議会において何事をも相議し得べく、何事の上にも相決し得べく、そしてその決議はただちに法律となって国民の上に課せられる。かくして彼等はきわめて複雑なる人間生活の全部を決定し、選挙人は自己の主権の名の下に実は棄権を強いられることとなる。⁸

大杉栄が既成の議会を通しての代議制に不信感を表したのはその代表性が持つ問題点であった。まず、現行の議会を中心とする代議制では、選挙権者は事実上その代表者に対する統制権が行使できない。せいぜい一定期間において代表を変える権利しか持たない。

そして、現在の代議制は代議士が選挙権者のすべての意志や個性を代表できるという一般的で包括的な代表権を前提にしている。選挙区のすべての人々を代表するというのは、実際には何も誰も代表することができないことになってしまう。いかなる人も他人のすべてを代表することはあり得ない。ある人が他人を代表するというのは、その代表者が他の人々と共有できるある特定の目的に限ってのことである。選挙権者が一人の代表を選ぶということは、その目的を機能的に代表できる場合限るべきであるという。ここで大杉が要求しているのは、選挙権者が自分たちの代表と「すき間のないピッタリ」とした絶え間ない関係をもつことであり、選挙権者の特定な目的と関連して自分たちの見解を代表できる代表が選出されるべきであることを示したのである。

浅羽通明氏のように大杉が「権力を生み出す組織や代表を拒」⁹んだという

ことにもいささか疑問の余地がある。大杉が志向したのはいわば機能的な参加民主主義であったと思われる。ヨーロッパにおける「国際鉄道会議、国際郵便会議もしくは気象学者や統計学者などの会議」などをその例として挙げて、特定の目的に関連して多様な分野別に代表できる方法で選出されるべきことを示した。つまり大杉栄は代議制そのものを否定したわけではなかった。彼は議会を通しての民主主義——それが現行人口の4%ほどの富裕層に限った制限選挙によるもので、普通選挙の実施によるものではなかった——は、ある地域から選出された人物がそこに暮らしている多様な人々の雑多な利害関係を適切に反映できるという疑わしい仮定による制度であることを批判したのであった。そしてその代案として、特定の目的に合わせてその代表を選出することを提案した。その背景には政治の疎外からの克服し、主体が持つ多様性をより「ピッタリ」と代表できる方式に関心をもっていたからだ。なお、このような構図は自然に政治的に領域における権力分散型志向となり、いかなる中央集権的な権力構図への志向とも相容れないものである。

以上をまとめると、大杉栄が考えた「政治的な理想」は構成員たちの直接的な接触ができるほどの規模の機能的な団体の「自治の連合制度」であった。

3. 「新労働運動」の勃興と「科学的社会主義」への批判

ところが、社会の様々な利害関係の中、その根幹をなすのは暮らしの問題、つまり経済問題に他ならない、このように大杉栄は当時の他の社会主義者たちと同様に生産関係が社会の下部構造を構成することを前提にした。資本主義的な生産関係における過酷な条件は労働者をして相互の救済と扶助のための組織、労働組合を造らせた。大杉栄は資本主義における新たな社会組織の根幹をこの労働組合に求めて、欧米の先進の資本主義国家におけるその発達過程に

注目した。

日本における労働組合の発生と同様に、ヨーロッパの労働組合もその最初には疾病や失業などの生活上の困難を相互の救済を目的とする組織であった。それが資本主義的な生産様式の発達とともに自らの利害を守るために雇用主側と交渉や闘争する機関に転換した。ところが、労働者たちは日常の闘争が激しさを増すにつれ、賃上げなどの既存の争点を乗り越えて、資本家側との闘争の永久性と普遍性を悟りはじめて政治の領域に関心を寄せ始めたという。そして彼らは労働者の利益を代弁すると唱える政党に期待を託して法律による状況の改善を図った。しかし、幸徳秋水がかつて「余が思想の変化」で説いたように、ドイツの社会民主党（SPD）は議会内の活動にその無気力さを露呈していた¹⁰。

フランスの場合は、社会主義各党派は労働組合を自己の党派の政治活動に従属した足場としか考えず、むしろ労働組合を分裂に導いた¹¹。また、例えば、かつてフェルナン・ペルーティエ（Fernand-Léonce E. Pelloutier）とともに総同盟罷工（ゼネラル・ストライキ）を唱道し、社会党の代議士として首相にまで上昇したアリスティード・ブリアン（Aristide Briand）が1910年におけるフランスの鉄道の大ストライキに対する徹底的な鎮圧を支持し¹²、労働者たちに失望感を与えたように、社会主義政党の指導者たちに対する不信は議会による改革から労働者を遠のける結果をもたらしていた。

イギリスもその例外ではなかった。1906年の選挙で自由党の執権と労働党の大躍進（50人の立候補中29名の当選）を成し遂げたのは事実である。しかし、経済状況の悪化と実質賃金の低下の中で、資本の覇権には手掛けようともしない自由党と、労働党の無気力な対応は労働者たちの期待を裏切るものであった。そして、労働組合幹部たちの行政職の進出による労働組合の国家機構への転落はさらに労働者たちの危惧を招く結果となった¹³。

政党と議会、国家権力の獲得といった既成の社会主義の路程に愛想を尽かした労働者たちは、また賃上げや互助的な性格に留まっていた既存の労働組合主義からも離脱していった。それまでの労働組合主義は社会変革における積極的な道具とみなされず、せいぜい雇用条件の改善か労働階級政党の足場的な存在にすぎなかった。しかし、罷工に対する警察や軍隊のような公権力の鎮圧を経験しながら、雇用主に対する運動から国家権力にまで疑問を投げかける運動へと政治的な労働運動として変化しだした。議会や既存の労働運動の指導部に対する不信が蔓延する中、議会を手段としない、独自の労働階級の運動を求める動きが、19世紀の最後の10年から20世紀初頭にかけて、フランスをはじめとした南欧諸国からアメリカやイギリスに至るまで広がった¹⁴。

大杉栄は、これら欧米のサンジカリズムと呼ばれる動向を「新社会主義」と呼んで国際労働者協会（第1インタナショナル）の「労働者の解放は労働者自身の事業である」とした「臨時規約」の条項¹⁵を「まったく文字通りの意味に復活」しようとする試みであると評価した。

されば労働者の精神的教育ということがまず肝心である。労働者に自ら意志することを教え、活動によって彼等を訓練し、そして彼等自身の才能を彼等に啓示しなければならぬ。これが社会主義教育の全秘訣であると。

かくしていわゆる新社会主義は、「労働者の解放は労働者自らの仕事であらねばならぬ」という『共産党宣言』の結語を、まったく文字通りの意味に復活せしめようとしたそしてこの「労働者自らの仕事」というところに、サンジカリズムは、自由と創造とを見出したのである。過去とは絶縁した、すなわち紳士閥社会の産んだ民主的思想や制度とは独立した、またそれらの模倣でもない、まったく異なった思想と制度とを、まず彼等自身の中に、彼等自身の団体の中に、彼等自身の努力によって、發育生長せしめようとした¹⁶。

そしてサンジカリズムは「労働者自らの仕事」として「自由と創造」を追い求めて、「過去とは絶縁した、すなわち紳士閥社会の産んだ民主的思想や制度とは独立した、またそれらの模倣でもない、まったく異なった思想と制度とを、まず彼等自身の中に、彼等自身の団体の中に、彼等自身の努力によって、發育生長」しようとしてきたとし、労働者自身が労働組合を通して「一切の生産方法を社会の所有」に収める実現を多少とも試みた後、「少なくとも精神的に実現せしめて後、初めてその社会的可能を信じ、社会革命の可能を信ずる」と語る。つまり、大杉栄は、労働者をしてその運動の中から新時代に対する熱望や自らの能力に対する自信を拡張させる点においてサンジカリズムの意義を見出した。彼は究極的な社会革命と労働解放は、労働者たちの日常的な闘争の中から発達される組織的な意識と主体的な覚醒によって成就できると見込んでいた。

労働組合は、それ自身が労働者の自主自治的能力のますます充実して行こうとする表現であるとともに、外に対してその能力のますます拡大して行こうとする機関であり、そして同時にまた、かくして労働者が自ら創り出して行こうとする将来社会の一萌芽でなければならない。

労働運動は労働者の自己獲得運動、自主自治的生活獲得運動である。人間運動である。人格運動である¹⁷。

このようなサンジカリズムへの着目は幸徳秋水の影響によって欧米における社会主義や労働運動の動向に敏感に反応した結果であった。しかし、大杉はこの傾向を情勢の趨勢としてただ追認したわけではなかった。

大杉は「鎖工場」（『近代思想』1913年9月）という寓話小説で、資本主義下の当代を描いた。夜中にふと目を開けると、「俺」は「鎖工場」にいた。自分自身や仲間たち体を十重や二十重も巻きついて束縛する「鎖」を自らの手で作っている工場の中で、誰もがこれに気付かず、また知ったとしてもむしろ甘

んじている。あるいは空想妄想に耽ることによって現実逃避を図る者もいる。工場主は「俺達の胃の腑の鍵を握って」俺達を思うままに働かせている。「俺」は自らの「鎖」を鋳ることをやめると決心する。「脳髓」に巻きついたものは思ったより容易く解けたが、「手足」にまとわれた「鎖」はなかなか解けず、しかも、皆の「鎖」と巧みにつながっていて「俺」のその束縛を断ち切るすべがない。しかし、そこで「俺」は仲間らしい人々を見つける。彼らは自分たちばかりで「鍵」を主人から奪い取ることを断念して周りに団結を促す。そして代表者を選出し、主人がいる会議の多数を占めて「鍵を俺たちの代表者の手にあずけたまま、俺たちの理想する新しい組織、新しい制度の工場にはいる」ことを願う。そして「俺」は彼らを見て次のように思う。

こいつらは恐ろしいPanlogistsだ。そして恐ろしい機械的定命論者だ。自分等の理想している新しい工場組織が、経済的行程の必然の結果として、今の工場組織の自然の後継者として現れるものだと信じている。したがって奴等は、ただこの経済的行程に従って、工場の制度や組織を変えればいいものと信じている¹⁸。

大杉栄はこのように「科学的社会主義」といわれた既成の社会主義運動の主流の路線に対して、その議会政策にだけ否定的な態度を取ったのではなかった。当時のマルクス主義の論理が「汎論理論」、「機械的定命論」であり、いわゆる「宿命論」¹⁹であると批判的な態度を取った。これはアナーキスト、あるいはサンジカリストといった党派的な立場に陥った無暗な誹謗だったのだろうか。彼も生産機関が社会の下部構造をなしており、社会主義は資本主義制度の発達した生産力によって初めて可能になることには異論は挟んでいなかった。

僕は歴史を解釈する主要なる一導線として、いわゆる物質的史観説（Materialistic conception of History）を懐いていることである。もう

少し詳しく言えば、史上の相闘争する諸階級が、主として生産および交換の方法の結果であること、すなわち主としてその時代の経済的狀態の産物であること、そしてまたこの経済組織がその社会の主要なる基礎であって、われわれはこれによって、歴史上のある一時期における法律上政治上の諸制度より道德、宗教、および哲学等に至る全体の組織構造に対する、有力なる説明をなし得ることを知識する²⁰。

大杉栄は中村孤月「人間生活の要求について」に対する返事の中でこのように書いて、歴史唯物論を否定していないことを明らかにした。つまり、人間の歴史が経済的な要素に左右され、社会の諸関係の中で最も重要な要素が経済的な条件だという点を認めていた。ただし、経済的狀態などの環境が独自な力を持って自動的に動き出すという意味ではなく、人間の能力は既存の条件によって制約されているという程度に理解し、歴史唯物論を受け入れていたと思われる。そして社会主義社会の必然的な到来の条件について次のように語った。

今日の資本家社会は、その経済制度の必然の結果として、すなわち社会的生産と個人的分配との矛盾がますます増大するに従って、ついに何らかの根本的改革を施さなければならぬ必要に迫られている。この改革は、今日の社会制度によってなんらかの特権もしくは利益を享けているものによってではなく、そのためにもっとも不利益を蒙るものによって、計画されまた実行されなければならぬ。そして労働者は、この地位にあるとともに、さらに社会の原動力たる生産そのものを掌中に握っている。彼等はただ欲しささえすればいいのだ²¹。

資本主義社会においてますます増大する社会的生産と私的所有関係の矛盾を打破するためには労働者階級が実践に踏み出なければいけない。私的所有の発展とともに生産と所有の矛盾は労働者階級をして物質的にも精神的にも社会的にも疎外に追い込める。その局限的な状態は労働者階級に社会の根本的な改革を欲する革命的な意識を必然的に芽生えさせる。労働者たちが知覚しても社

会主義社会が到来するわけではない。自ら欲して行動に踏み出なければいけない。生産の真の源泉であることを自覚して世界の変革に着手すること、未来を志向して能動的に動き出すことで歴史の必然と自由は結合するはずであった。ところが、大杉栄の目に映った当時の「科学社会主義」はこのような労働者階級の能動的な実践に対する認識が欠けていたようだ。

社会主義は信ずる。平民の解放はわれわれの意志の外にある諸種の事情、ことに工業の発達より生ずる事情に係わる。労働階級の精神的進歩は、ただこの解放を容易にするものに過ぎない。新しき経済が新しき道徳を創るのであると。

社会主義はこのいわゆる物質的史観説に立脚して、社会進化の要素として経済的行程、技術的行程を過大視するの結果、かの必然から自由への飛躍を、外的強迫から内的発意への創造を、単に到着点としてのみ強調して、等しくまたこれを出発点としなければならぬことを忘れてしまった²²。

大杉栄が「客観中毒の社会主義」²³とまで批判した「科学的社会主義」の路線が広く普及されたのはカール・カウツキーのマルクス主義の解釈によるところが大きい。青年時代にダーウィニズムと自然主義に魅了された彼は歴史唯物論と両者の統合を図った。レシエク・コワコフスキ（Leszek Kolakowski）によれば、カウツキーのマルクス主義解釈は進化論的・決定論的な特徴を帯びていた。カウツキーにとってのマルクス主義は社会現象に対する科学的・決定論的・統合的で、歴史全体は単一な図式に還元できる一貫的な理論体系に他ならなかった。この特徴はエンゲルスの後期著作からマルクス主義における科学的・実証主義的な観点を発展させた側面を持つ。ダーウィンの進化論を盲信したカウツキーは、その科学的な世界観においてもより決定論的で普遍的な法則に対する信念が強かった。彼は進化論を環境に最も適応した個体の変化の過程として見なし、文明そのものの進歩も環境適応の法則で説明できると考えた

²⁴。彼が唱える「科学的社会主義」は経済法則の結果として無階級社会の到来の不可避性、つまり「客観的」な必然性に対する立証であった。

4. 自己獲得運動 : 知覚と実践の統一

カウツキーを始めとする第2インターナショナルの正統派は、資本主義の没落と社会主義社会への移行に関する必然性を、これまで技術的な進歩が社会・経済的体制を出現させてきたような客観的な必然と同一視して両者の違いを区別しなかった。資本主義は漸進的で持続的に自ずと崩壊にむけて進むはずで、革命はその経済的条件が熟成した時に初めて可能になるという²⁵。ところが、仮に資本主義がこのように人間の意志とは関係なく自然法則に従って社会主義に移り変わるとするなら、なぜわざわざ何かを図る必要があるのだろうか。労働者たちはただゆったりと資本主義の矛盾がその頂点に達して体制が崩れていくこと、つまり歴史の贈り物として最終勝利を待つだけで充分ではないだろうか。大杉栄が反発したのはこの決定論であった。彼にとって社会主義とは自然法の作動に任せた歴史の単純な結果ではないはずであった。

社会主義者はよく、自覚が社会生活を創るのではない、社会生活が自覚を創るのであると言う。そして常にこれを誇張する。われわれもまた、この事実の真実でありかつはなはだ重大であることを知っている。けれどもそれと同時にまた、さらにこの自覚が新しき社会生活を創るの事実を忘れることはできない。すなわちわれわれは、種々なる社会的傾向を判断し、その中からわれわれの内的憧憬と近きもの、われわれの個人的生活意志と近きものを選ぶの事実を知っている。時としてはそれらの諸傾向を否認し、超越して行くの事実をも知っている。すなわちわれわれの権力意志が奮起するの事実を見るのである。かくしてわれわれは、自我の、個人的発意の、自由と創造とを思い、かつここに個人および社会の進化の基礎を置かねばならぬことを感ず

る²⁶。

「社会進化」論は人間の外部に存在する自然法ではなく、諸種の社会的傾向から内的な憧憬に最も近いものを実現しようとする意志や発意そのものを「社会進化」の基礎とすべきことを唱えた。ただし、人間の意志や発意が直接に社会を変革する基礎になると考える大杉栄が持つ社会主義の意味について考慮する必要がある。言い換えれば、彼は社会主義を制度の変化というより別の意味合いから求めた気配が濃厚である。

大杉栄が労働運動に着目した重要な動機は貧困の問題と富の所有権を巡るものではなかった。労働者たちが極限状態の環境に置かれているにも関わらず、その革命的本能を発揮して創り出す創造力に惹かれたと語る。ただ、現状のすべての労働者たちをむやみに肯定したわけではなく、自分たちを取り巻く社会環境を変革して内部に潜在する社会的憧憬の実現のために立ち上がる労働者たちの心理的な変化に大きな意義を感じ取ったのである。彼は社会主義社会の到来が歴史の法則や予定された計画が保証するものではなく、人間の意識的な創造によるものであるとみなした。

労働者が人間である限り、労働運動は決してこの生物的要求だけに止まるものではない。労働者といえども、ただ多少楽に食って行けさえすればいい、というのではない。それ以上に、もう少し進んだ、ある人間的要求を持っている。

労働運動のこの人間的要素を見るこのできないものには、労働運動の本当の理解はできない。また、労働者が自分の要求の中にこの人間的要素をはっきりと自覚しない間は、その労働運動はついに本当の値打ちのある労働運動に進むことはできない²⁷。

大杉栄は、労働者たちの胸中にある「人間的要求」を表出することが労働運動の本当の目的だという。現行の社会で生産機関を専有している資本家階級

は労働力の購買という名目で実際には労働者を「掠奪」していると見なした。つまり資本主義制度における搾取を、労働力の販売者である労働者と購買者である資本家の間における非等価的な交換であると考えた。そして資本家階級は彼らの特権を維持するためにあらゆる社会制度を用いて労働者たちを欺瞞して、意識の歪曲や生産活動からの疎外を企ててきたという²⁸。

大杉は、意識の歪曲と疎外の問題をカール・マルクスのように交換価値と使用価値の対立といった、労働の二重的な性格から追求してはいない。疎外の原因や商品の物神崇拜に対する洞察も欠いている。資本主義的な生産様式が持つ労働力の事物化の問題や疎外現象を、支配階級すなわち資本家階級の悪しき意図にその原因を見積もったにすぎない。然らば、労働者に現状より適切な賃金が保証できる方法を探す解決案も導き出せるはずであった。ところが、この問題の解決の道標である「人間的要求」は、労働力の公正な取引でも資本家階級の悪意に対する「憤懣や激昂」でもなかった。それは他人に左右されない、自分たちの生活を取り戻すことであった。

僕等はそのいわゆる僕等自身を持たなければならない。僕等自身とは、労働階級自身、労働団体自身の自主自治的能力である。その自意識である。そして僕等は、労働組合をもってこの僕等自身を支持する最良の方法であると信ずる。

労働組合は、それ自身が労働者の自主自治的能力のますます充実して行こうとする表現であるとともに、外に対してその能力のますます拡大して行こうとする機関であり、そして同時にまた、かくして労働者が自ら創り出して行こうとする将来社会の一萌芽でなければならない。

労働運動は労働者の自己獲得運動、自主自治的生活獲得運動である。人間運動である。人格運動である²⁹。

確かに大杉は疎外の原因や資本主義生産様式に対する洞察にはいささか欠けるところがあった。とは言え、生産現場における疎外に敏感に反応し、その克

服を探ろうとした。これは注目に値する。大杉栄にとって、社会主義は単に不平等や搾取、社会的な敵対関係を廃棄するための新たな体制づくりに留まるものではない。社会主義はある体制というより、消失した人間性の回復、個人と種としての人間の和解、人間存在の本性へ回復を意味した。そのために労働運動を労働者の「自己獲得運動」、「自主自治的生活獲得運動」、「人間運動」、「人格運動」として位置付けた。そして、その「自己獲得運動」である労働運動は労働者たちが自らの置かれた状況そのものが現行の資本主義社会と対立するという事実を理解することから始まる。そして労働者は過去の歴史全体が階級闘争の歴史であり、今日もその歴史の単純な形式の反復として知覚し、その理解の上で自分の内面の憧憬と衝突する現行の社会制度や政治・道徳を跳ね返して新たな世界の構築を図らなければならないと述べた。

われわれはまず、現代社会の根本に横たわるこれらの事実を、真に明確に理解せねばならぬ。われわれの日々の生活の経験によって、骨身にまでこれらの事実を徹しこませねばならぬ。しこうして彼等掠奪階級が製造して、われわれ被掠奪階級に無理強いするいっさいの社会的政治的・道徳的の理論と感情とを放抛して、人間本来の本能に従って、われわれ自身の気質に従って、われわれ自身の自覚的経験に従って、われわれ自身の個人的世界を建設するとともに、またその社会的実現をはからねばならぬ³⁰。

大杉にとって、世界を知覚することと実践によってそれを変革することの間には隙間が存在しない。実行の中で労働者は社会の全構造を理解し、そのように理解した事実を通して社会の変革に踏み出る。社会主義は自分たちの行動を認識する人々によって成就できるのである。そのために、大杉にとって抽象的な知識や理論から導き出される労働運動はあり得なかった。

5. 労働組合による革命

大杉栄は常に「個人革命」と「社会革命」の調和や同時遂行を唱えた。ところで、彼が訴える革命とは一体いかなるものなのか。大杉の文章からはその展望がはっきりとは読み取れない。もちろん、幸徳秋水の「大逆事件」の後に作動していた言論統制のせいでもあろう。しかし、そもそも大杉が唱えった「革命」とは一般的な通念から多少逸脱した面を持ち合わせていたと思われる。この内容を追跡して大杉栄の革命ビジョンを押し詰めてみることにする。

資本家制度の中に社会主義が成熟するということには、工業技術的発達を俟たなければならぬのはもとよりである。社会主義は、十分に発達したかつ不斷に進歩して行く生産力の上にのみもとづく、一経済組織である。

しかしこの技術的発達は、単にその一面に過ぎない。そして、より少なからざる重大の他の一面は、旧組織の中における新しき精神的力の発達である。すなわち労働者階級の政治的、司法的、および精神的諸才能の発達である。

伝習的国家なるものを一掃し去って、労働者自身の組織をもってこれに代らしめんとする、かくのごとき大変革は、労働者の高き精神的教修と、社会の経済的職能を指導するの才能とを予想しなければならぬ。されば労働者自身にこの準備ができた時、すなわち自ら社会を経営し得ると感じた時、初めて社会革命が来るのである。³¹（下線は引用者）

大杉栄が構想したサンジカリズムは、労働組合によって労働者自らが自分たちの能力を自覚して資本主義下での社会の政治・経済の根幹に置くというものであった。ここから読み取れるのは、彼が唱える革命とは、古き社会的な形態から新しい社会的な形態が出現し、社会的にその効用性を失くしつつある旧制度を駆逐して新しい制度がその地位を取って代わるというビジョンとして見

受けられる。原始社会から中世、産業革命以後の今日に至るまで、物質的な条件に相応して社会の根幹を成す一定の結社体が登場してきた。近世の社会から資本家階級が議会の以て資本主義社会の幕を上げたように、資本主義社会でも新しい組織の広がりとともに新時代の登場が期待できるはずである。しかし、この過程が自動的に行われるとは考え難い。支配階級が自分より強力な力を持つ階級の圧力による以外に、自らの利益を譲ったことは皆無に等しいからである。歴史の進化の基礎になる力是人々の発意であり、意志であった。労働組合はその最初、利害をともにする労働者たち団体から、革命的な展望が期待できる組織に成長していった。これが「自ら社会を経営し得ると感じた時、初めて社会革命が来る」と語った大杉の意図であろう。そして、このような言辞が彼をしてよく急進分子や過激派という印象を与えてきたのも事実である。ところが、大杉栄が想定した「革命」はその方法論をより深く考察する限り、想像よりもはるかに穏やかな「革命」像になる可能性が高い。彼の「革命」とは、武装蜂起のような内乱を想定したとは考え難い。

奴等が相手にしようとしまいと、そんなことはどうでもいいようなものだが、それでもやはり、相手にして貰う方がにぎやかになっていい。奴等に相手になって貰うには、というよりもむしろ、相手にしなければならないようにさせるには、労働運動そのものという事実をうんとみせつけてやることだ。（中略）そしてなんとかかんとか勝手なことをいわせておいて、それをまた、理屈の上ではなく事実の上で、うんとやっつけてやることだ。

僕等には、少なくとも今のところ、理屈なんかどうでもいい。理屈は理屈屋に任しておく。勝手にこね廻させておく。僕等の大事なものは、僕等自身が創ってきた、また今から創っていく、事実だ。その事実の意味だ³²。

上記のように、大杉にとって労働組合の活動によって成就できた「事実」

を認めさせ、すでに作用しているこの傾向をその絶頂へと向かわせるものが「革命」に他ならなかった。したがって、現在の社会秩序を武装蜂起によって暴力的に転覆するという内乱としての「革命」は想像し難い。だからと言って、変化は決してゆっくりとしたものを期待してはいなかったようで、漸進的ではあるが、その傾向は爆発的に広がると予期した。逆説的ではあるが、革命の成就のためにゆっくりと急ぐ方式になる。つまり、「革命」は「直接行動」による事実の承認としてとらえられる。

けれども僕は、さらにこの新思想と新感情とを僕の行為の上に具体化せしめねばならぬ。そしてこの具体化は、初めて僕をして全人的に新事実を獲得せしめるとともに、僕の真の生活とかの社会組織とを闘争に入らしめる。すなわちこの新事実の獲得の中に、僕は僕のいわゆる「生の闘争」の序幕を見る³³。

大杉がいう「新事実の獲得」は、労働者たちが各自の領域で権利——職場や地域における——を獲得していくこと、つまり賃上げや作業環境改善などの生活闘争の内に労働組合による団結や教育を拡大していくことを意味するといえよう。そして、それは日常の生活闘争から「生の闘争」への飛躍を促す手順になる。

19世紀末頃に、国家権力の獲得を目指す社会主義者たちはその方法において大きな変換を余儀なくされた。武装蜂起による道がもはや不可能になった後、事実上、議会を通した方法にしか権力奪取が達成できなくなった。ところが、その誕生において封建的な秩序との闘争における資本家階級の武器であった議会が、社会主義の新秩序の成立に同様の機能を果たせるかという疑問は依然と存在した。そして、ヨーロッパにおける社会主義諸政党の分裂や無気力さはその戦略を廃棄するのに充分であった。既存の議会を通す戦略を乗り越え、

社会の根幹をなす生産機関を土台に、労働者たちの参加型民主主義が可能な労働組合の連合体の建設に向けての道のりがより現実的に思われたはずであった。労働者は日々の闘争の中で自らの力量や創造力に目覚めて各々の主体性を取り戻し、これが労働運動や社会主義運動を高揚させる結果をもたらすと予期できた。大杉栄が考えた労働運動や社会主義とは、労働者たちの集团的利益追求や富の分配の観点から、かけ離れていることがわかる。

政治を議会や行政府の権力をめぐる闘争に限定づけた偏見から、サンジカリズムを反政治的な理論として規定する結果がもたらされる。そのため、議会が政治の中心だという偏見も生まれる。しかし、サンジカリズム運動は一定の「政治的」な立場を取っていた。ここでいう「政治的」とは、彼らが資本家権力に挑戦した意味のみならず、彼らの闘争の本質的な部分が権力闘争であったという点である。権力現象は国家権力だけをめぐるものではない。権力の網状は社会の全構造の中に張り巡らされていると認めるなら、サンジカリズムをただ反政治的な理念として規定し得なくなる。議会や行政を中心とする権力よりもっと重要な権力に着目した人々に、前者の権力を等閑視したとして彼らを反政治的だというレテルを張るのはいささか問題があると思われる。彼らにとっての「闘争は議会を中心とする、いわゆる「政治の場」ではなく、「労働者の作業場」という新しい空間で展開された。少なくとも、大杉は経済的闘争に埋没し、権力闘争、革命的戦略がないという批判からは自由になると思う。なお、大杉は経済的領域である労働組合を重視したが、彼らが経済決定論的な立場ではなく、意志論的な立場に堅持していたことも、彼らの政治的関心に関連して重要な意味を持つ。人間の意志に対する確信をもって、直接行動をはじめとする、さまざまな方法を用いた継続的な運動を展開せねばならぬと強調した。

それに労働者は、そんな観念とか理想とかの見本を理屈の上で比較研

究する前に、そのせっぱつまった生活の、少々でもの改善を謀らなければならない。それが労働者の目下の急務だ。

そして労働者は、この急務に努力しつつある間に、資本家と労働者との関係、政府と資本家もしくは労働者との関係についての、その地位を漸次自覚してきた。今日の社会制度の根本的誤謬にまでも気づき出した。また労働条件改善のためのその努力のなかに、それよりももっと強くその心中に湧いてくる、自由の精神に目覚めてきた。

これは、僕が今多くの労働者の中にみる事実だ。そしてそれらの労働者は今、その眼前に見せつけられる諸種の社会的観念や理想をそのまま受け入れる前に、彼等自身が獲得した社会的知識と自由の精神との結合に努力している³⁴。

大杉栄のこの労働組合論には常に個人の自由がその中核になっている。優れた組織や社会のためにも個人の自由なる発展が必要であったが、それよりも個人の自由な発展こそが世界を変革する真の目的でもあった。そして、大杉の自治とは地域別の住民自治ではなく、労働と生産の現場における自治であった。その究極にはすべての社会組織を網状的な自治の原理が実現できることを期待した。

このように変化し始めた労働運動は——たとえ体系的な社会改革のプログラムを備えなくとも——社会的な平等に関する新たな精神を表出しながら既得権層を脅かした。体系的な理論に頼らずとも、労働者たちは自らの憤怒を表出する能力を備え、その過程において今何を求め、何に向かって進んでいるのかを自覚する能力も持ち合わせていることを見せつけた。しかしながら、大杉は産業部分や各作業場には民主主義が実現できずに専制的な制度や慣行が横行し、まさにそこに勢力を張っている階級によって事実上に国家権力が掌握されているという問題意識がその根底にはあった。従って、資本主義社会の国家では政治的な民主主義が実行されたとしても、結局のところそれは中立的ではないという結論に到達したのである。

けれどもこの政治的領域は、他のあらゆる社会生活の少なくとも外権上最上部に位して、他の種々なる社会的関係ことに経済的関係と密接に連続しているので、われわれは単に政治的領域そのもののみをか的事实によって占領せしめることはできない。人類の社会を本質的に観て、その二次的および一時的の現象を取除けば、政治的制度はつねにその社会の経済的制度の忠実なる発想である。したがって政治の根本的改革を謀らんとすれば、まづその社会の経済的制度に根本的改革を加えなければならぬ。僕等が政治的連合制度を理想とすると同時に、また経済上に共産制度を理想するのも、その理由はここに在る³⁵。

経済力を掌握した階級が現在の国家を支配すると考え、国家機構の性格を根本から変えようとするなら、民主主義の原理を政治的な分野だけに止めず、経済的な分野にまで実現させなければならないという見通しが付く。サンジカリズムは、政治的民主主義あるいは議会制民主主義の欺瞞性に注目して、政治的民主主義が資本によって行使する、社会的な独裁を隠蔽しているものとみなした。

また今日の政治組織は、その名義のいかんにもかかわらず、またその人物のいかんにもかかわらず、この経済組織の維持と拡張とをもってその任務とするものであることを覚った。政府がまったく資本家階級の傀儡であり、労働者階級の仇敵であったことを覚った。同時に彼等はまた、従来の一っさいの祝聖されたる社会制度および個人的感情すらも、すべて彼等の生きんとする本能を防圧するいかさま仕掛であることを覚った。彼等はもはや、一っさいを抛擲して、ただ彼等自身の生の本能によるほかはなかった。その本能の赤裸々の発現によって得られた、彼等自身の感情と思想とによるほかはなかった。彼等は、その本能の命ずるがままに一っさいの事物と当面し衝突し、そこに彼等自身のあるものを発見しもしくは創造した。あらゆる価値を顛倒した³⁶。

しかし、大杉のこのような説明には国家の体制変革に関する能力をあまり

にも看過した感がある。国家が社会の制度や構造を変更してきた歴史的な経験——それが良い方向なのかはともかくも——について、この両方ともに説明できなくなる。

大杉栄の歿後のことになるが、1930年代の大恐慌の後に登場したアメリカのニューディール政策や北欧の福祉社会、そして最近のブラジルのルーラ政権の模範的な事例も我々は歴史的に経験し、目の当たりにしているのである。

大杉は内乱などの流血衝突による革命より、新しい社会へ変化は古き社会の胎内から現れて、社会的な効用を失くした制度を駆逐して取って代わるという方法を目指したと思われる。つまり、既存制度の単なる廃止とともに有機的な社会組織が表れるとは想定していなかったとみられる。現在の生産構造の上で、労働者階級の組織化された土台に乗かって社会の再組織を図ったものだったといえよう。

6. おわりに

本章では、大杉栄の議会制民主主義や「科学的社会主義」に対する批判の論拠を確かめて、「自治の連合制度」としての新たな政治的領域の可能性や、自己獲得運動として実践に基づいた「新社会主義」であるサンジカリズム運動の展望を確認した。

先行研究では「反政治」を唱えた人物として描かれてきた大杉栄を、その根底になっている「政治」の規定を確認することで反論を試みた。既存の研究では「政治」を議会や行政府の権力をめぐる闘争に限定づけた視角をとるために、大杉栄の論理はその枠組みには嵌らない異質な論理に映っていた。しかし、今日では権力現象をもはや国家権力にだけ留めて思考してはいない。権力の網状は社会の全構造の中に張り巡らされている視点が提唱されてすでに久し

い。大杉が唱えるサンジカリズムはその権力の発生機関として最も有力な産業現場における「権力闘争」をその基底に据えていた。この点において彼の視座は一定の「政治的」な立場を取っていた。むしろ、ここでいう「政治的」とは、彼が資本家権力に挑戦した意味のみならず、彼が抱いた闘争の本質的な部分が権力闘争であったという点である。彼がとっていた闘争は議会を中心とする、いわゆる「政治の場」ではなく、「労働者の作業場」という新しい空間で展開された。議会や行政を中心とする権力よりもっと重要な権力に着目した人々に、前者の権力を等閑視したとして彼らを反政治的だというレテルを張るのはほとんど倒錯というべきだろう。大杉が「自己獲得運動」や「人格運動」と呼んだこの方法を制度的な面で積極的に解釈するなら「産業自治論」や「労働者自主管理」といった形が想定される。

また、大杉栄は現行の議会制民主主義における「代議制」に問題点を見出して、被選挙権者と選挙権者との間隔がより密着できる「代議制」を提案した。彼は地域に基づく包括的な代議制の効用に疑いを持ち、現今の制限選挙のみならず普通選挙が実施されて構成する議会でさえもはたして民主的で国民の意志を代弁できる機構にあり得るのか、という議会制の政治民主主義に対する不信感があった。その代案として特定な目的と関連して自分たちの見解を代表できる代表が選出する機能的で、代表と選挙者が密着した参加民主主義を志向したと見られる。なお、様々な目的による多様な会議や協会が網状に結び付いた構造は中集権的な権力機構とは相容れないものであった。

このような様々な機能的な機構の中、大杉栄は新たな社会組織の根幹を生産機構に関わる労働組合に求めた。労働組合は労働者たちが自らの能力を伸長させる場として期待された。また労働組合は生産における有機的な単位、未来産業組織の核心として見込んだ。労働組合を闘争機構のみならず、新しい体制内で機能できる新制度としての意味も持ち合わせていた。

大杉栄はこのように経済的領域である労働組合を重視したが、彼らが経済決定論的な立場ではなかった。むしろ、既存の「科学的社会主義」に反発を抱いたのもその決定論的な側面に他ならなかった。社会主義への移行は外部に存在する自然法の作動に任せた歴史の単純な結果としては期待しなかった。彼にとって社会主義への移行は、実行の中で労働者は社会の全構造を理解し、諸種の社会的傾向と内的な憧憬を合致させる意志的な運動によらなければならなかった。そのために、サンジカリズム運動は新時代の建設とともに「自己獲得運動」であった。

(注 釈)

-
- ¹ 三谷太一郎『大正デモクラシー論 吉野作造の時代』、東京大学出版会、1995、278～283頁
- ² 浅羽通明『アナーキズムー名著でたどる日本思想入門』、ちくま新書、2004、19頁
- ³ 三谷太一郎『大正デモクラシー論 吉野作造の時代』278～283頁。
- ⁴ 大杉栄「生の創造」『全集』第2巻、61頁。（『近代思想』2巻4号、1914年1月）
- ⁵ 大杉栄「個人主義者と政治運動」『全集』第6巻、219頁。（『早稲田文学』1915年4月）
- ⁶ 大杉栄「欧州社会党運動の大勢」『全集』第1巻、249～250頁。（『日刊平民新聞』17～22号、1907年2月6日～2月12日）
- ⁷ 大杉栄「個人主義者と政治運動」、前掲書、211～213頁。
- ⁸ 大杉栄「個人主義者と政治運動」、同上、216～218頁。
- ⁹ 浅羽通明『アナーキズムー名著でたどる日本思想入門』ちくま新書、2004年、19頁。
- ¹⁰ 幸徳秋水「余が思想の変化」『幸徳秋水全集』第6巻、日本図書センター、1968、134～146頁。
- ¹¹ 喜安朗『革命的サンディカリズム』五月社、1982年、78頁。
- ¹² 大杉栄「個人主義者と政治運動」、前掲書、224頁。
- ¹³ 김명환 『영국의 위기 속에서 나온 민주주의 - 길드사회주의 : 노·사·민 합의 민주주의(1900~1920년대)』 해안, 2009. pp.168～172.
- ¹⁴ フランスは労働総同盟(CGT)に代表される動きが1895年以來に活発になりつつあった。アメリカではタニエル・ビル・ヘイウッド(William D. Haywood)やユーゲン・デブス(Eugene V. Debs)が率いる世界産業労働組合(IWW)が1905年に創立して日本から来た幸徳秋水にも影響を与えた。そしてイギリスには、ジョン・ラスキン(John Ruskin)やウィリアム・モリス(William Morris)の影響を強く受けたトム・マン(Tom Mann)が率いるサンジカリズム運動が胎動していた。(喜安朗『革命的サンジカリズム』、김명환『영국사회주의의 두 갈래 길』参照)。
- ¹⁵ マルクス「国際労働者協会創立宣言」『マルクス・エンゲルス全集』第16巻、大月書店、1966。

-
- ¹⁶ 大杉栄「生の創造」、前掲書、57～58頁。
- ¹⁷ 大杉栄「労働運動の精神」『全集』第6巻、6頁。（『労働運動』1919年10月）
- ¹⁸ 大杉栄「鎖工場」『全集』第2巻、43頁。（『近代思想』1巻12号、1913年9月）
- ¹⁹ 大杉栄「ベルグソンとソレル ベ氏の心理学とソ氏の社会学」『全集』第6巻、278頁。（『早稲田文学』1926年1月）
- ²⁰ 大杉栄「現代社会観 中村孤月君に答える」『全集』第3巻、129頁。（『第3帝国』1915年8月）
- ²¹ 大杉栄「労働運動と個人主義—労働者の個人的社会的創造力—」『全集』第6巻、252～3頁。（『近代思想』3巻3号、1915年12月）
- ²² 大杉栄「生の創造」、前掲書、55～56頁。
- ²³ 大杉栄「主観的歴史論 ピョートル・ラヴロフ論」『全集』第3巻、56頁。（『近代思想』2巻7号、1914年4月）
- ²⁴ Leszek Kolakowski, *Main Currents of Marxism, vol. II*, Clarendon Press ; Oxford, 1978, p.31～37.
- ²⁵ カウツキーや第2インタナショナル中央派については、Leszek Kolakowskiの著作の他に、山本左門『社会民主党とカウツキー』（北海道大学図書刊行会、1981）と相田慎一『カウツキー研究—民族と分権—』（昭和堂、1993）、久間清俊「カウツキーの社会民主主義観」（『アドミニストレーション』5（4）、1999年3月）を参考した。
- ²⁶ 大杉栄「生の創造」、前掲書、58～59頁。
- ²⁷ 大杉栄「労働運動の精神」『全集』第6巻、4頁。（『労働運動』1919年10月）
- ²⁸ 大杉栄「労働者の自覚」『全集』第6巻、56頁。（月刊『平民新聞』1号、1914年10月）
- ²⁹ 大杉栄「労働運動の精神」、前掲書、6頁。
- ³⁰ 大杉栄「労働者の自覚」、前掲書、56頁
- ³¹ 大杉栄「生の創造」、前掲書、56～57頁
- ³² 大杉栄「いわゆる評論家に対する僕等の態度 —評論の評論—」『全集』第6巻、36～37頁。（『労働運動』1920年4月）
- ³³ 大杉栄「新事実の獲得」『全集』第2巻、91頁。（『新潮』1915年1月）

³⁴ 大杉栄「社会的理想論」『全集』第6巻、45頁。（『労働運動』1920年6月）

³⁵ 大杉栄「個人主義者と政治運動」、前掲書、220頁。

³⁶ 同上、225頁。

【第三章、参考文献】

相田慎一『カウツキー研究—民族と分権—』、昭和堂、1993

浅羽通明『アナーキズム—名著でたどる日本思想入門』、ちくま新書、2004年

大杉栄「欧州社会党運動の大勢」『大杉栄全集』第1巻（『日刊平民新聞』17～22号、1907年2月6日～2月12日）

_____「鎖工場」『大杉栄全集』第2巻（『近代思想』1巻12号、1913年9月）

_____「生の創造」『大杉栄全集』第2巻（『近代思想』2巻4号、1914年1月）

_____「主観的歴史論 ピョートル・ラヴロフ論」『大杉栄全集』第3巻（『近代思想』2巻7号、1914年4月）

_____「正気の狂人」『近代思想』1914年5月

_____「労働者の自覚」『大杉栄全集』第6巻（月刊『平民新聞』1号、1914年10月）

_____「新事実の獲得」『大杉栄全集』第2巻（『新潮』1915年1月）

_____「茅原華山を笑う」『時事新報』1915年3月

_____「個人主義者と政治運動」『大杉栄全集』第6巻（『早稲田文学』1915年4月）

_____「現代社会観 中村孤月君に答える」『大杉栄全集』第3巻（『第3帝国』1915年8月）

_____「2種の個人的自由 福田博士の新社会論を読む」『近代思想』1915年10月

_____「労働運動と個人主義—労働者の個人的社会的創造力—」『大杉栄全集』第6巻（『近代思想』3巻3号、1915年12月）

_____「労働運動の精神」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』1919年10月）

_____「労働運動理想家 賀川豊彦論（続）」『労働運動』1920年1月

_____「いわゆる評論家に対する僕等の態度 —評論の評論—」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』1920年4月）

_____「社会的理想論」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』1920年6月）

_____「ベルグソンとソレル ベ氏の心理学とソ氏の社会学」『大杉栄全集』第6

卷（『早稲田文学』1926年1月）

喜安朗 『革命的サンディカリズム』、五月社、1982年

カール・マルクス「国際労働者協会創立宣言」『マルクス・エンゲルス全集』 第1
6巻、大月書店、1966

久間清俊「カウツキーの社会民主主義観」『アドミニストレーション』5（4）、19
99年3月

幸徳秋水「余が思想の変化」『幸徳秋水全集』第6巻、日本図書センター、1968

三谷太一郎『大正デモクラシー論 吉野作造の時代』、東京大学出版会、1995

山本左門『社会民主党とカウツキー』、北海道大学図書刊行会、1981

김명환 『영국사회주의의 두 갈래 길』 한울아카데미, 2006

_____ 『영국의 위기 속에서 나온 민주주의 - 길드사회주의 : 노·사·민합
의 민주주의(1900~1920년대)』 해안, 2009

Leszek Kolakowski, Main Currents of Marxism, vol. II, Clarendon Press ; Oxford, 1
978

第四章 大杉栄の「革命的サンジカリズム」

― 労働組合運動にもとづく実践的な革命観 ―

1. はじめに

本章では、第1次世界大戦の後の日本の労働運動高揚期に、革命的サンジカリズムが実際に労働運動を結合して行く様相を、大杉栄の実践活動から探ってみる。これによって、大杉栄が堅持していた思想的な特徴を再照明しようと思う。

大杉栄を評価する観点のほとんどが、彼が「アナーキズムを標榜し、労働者の直接行動を重視して政治闘争やロシア革命に対しても否定的な立場であった」ということであった。広く通用している「無政府主義者・大杉栄」という言葉は、彼を日本を代表する無政府主義者とみる一方で、その思想的な限界点を示すものでもあったと思う。そして、この評価に決定的な役割を演じたのが、1920年代初めに起きたアナ・ボル論争であることは周知の通りである。

アナ・ボル論争は、ロシア革命に対する評価と労働組合運動の組織論を巡って、激しく対立したアナルコ・サンジカリズム(anarcho syndicalisme)側とボルシェヴィズム(bolshevism)側の間の行われた論争と言われている。この時期に山川均など「ボルシェヴィキ」はプロレタリアート独裁や民主集中制などのロシア革命の理論と実践を紹介しながら、それに乗った形で日本の労働運動の組織化を図った。これに対して大杉栄と代表される「アナルコ・サンジカリ

ズム」派はロシア革命を批判し、個人の主体性に基づいた集団の自発的な連合による革命の可能性を主張して対抗した。両派の対立は1921年から激しさを増し、1922年、労働組合全国総連合運動の決裂に至り、その頂点に達した。

ところが、ここで注意したいのは、アナ・ボル論争について論じる際に、その是非とは別に、党派性にとらわれがちであったことだ。つまり、大杉栄を論じる際に、アナコル・サンジカリズムに照らし合わせて行われていることである。確かにこの観点からいえば、大杉が積極的に擁護を試みた、クロンシュタット蜂起やロシア共産党内の労働者反対派は確かにレーニンなどのロシア共産党が言った通りに、ただアナーキストやサンジカリスト的な傾向か、あるいはこれに踊らされたものであったかも知れない。なら、「すべての権力をソヴィエトへ！」といったスローガンはどうなってしまうのだろうか。これらを貫く大杉の観点はどこにあったのか、ということがまだ十分に議論されていないと思われる。

このような問題意識を以って、この章では、一九二〇年を前後する大杉栄の実践的革命観をより詳細に探ってみる。大杉栄を中心にしたグループの労働運動における影響力はいかなるものであったのか、同時代の証言をもとに具体化する。また、山川均と大杉栄とのロシア革命に対する見解の違いを検討し、このような認識の違いが以後の「労働組合全国総連合」の決裂に際して如何なる解釈を交わしたかを論じてみたい。

2. 日本の労働組合運動の成長と大杉栄の「実践方法」

日本の労働組合運動は、1900年以来、ストライキを犯罪行為として、労働組合を事実上禁止する治安警察法によって弾圧されてきた。日露戦争後の不景気の中で、工場や造船所を中心に組織をもたない、自然発生的なストライキな

どの闘争が起こり、足尾銅山、別子銅山の争議は暴動化を伴いながら存続した。これらの労働者たちの闘争の激化・暴動化は、幸徳秋水が唱えはじめた直接行動論に多くの若き社会主義者たちを引き寄せる要因にもなった。ところが、1910年「大逆事件」を契機に、労働組合運動と社会主義運動は、根柢から覆され、労働者組織としては欧文印刷工を中心とした欧文会(1907年創立)のみが存在するにとどまった。このような状況の中、キリスト教信者である鈴木文治はわずか15名の労働者と共に、労資協調主義で反社会主義的な立場から、友愛会を設立した。他の組織的な労働運動が閉塞している間に、友愛会は年々組織を拡大していった。

「大逆事件」後の窒息状態から、やがて労働組合運動が本格的に復活して発展したのは、第1次大戦とロシア革命の後のことである。1914年の夏に、第1次世界大戦が勃発すると、日本は連合国側に加担し、ドイツ領の青島攻略を皮切りに、領土的な拡大を図る一方、連合国の兵站部を担う形で、造船を始め、化学用品、鉄鋼、機械など、重化学工業が著しい発展を遂げた。これによって工場労働者の数が大幅に増え、世帯持ちの男子労働者が京浜や阪神などの工業地帯に定着し始め、労働階級の構成に大きな変化が現れた。これを基盤に組織的な労働組合運動もいよいよ展開し始める。

新たな労働運動の高揚には国内の産業構造の変化と共に、国際情勢の大きな変化があった。ドイツの軍国主義に対する民主主義の防御という連合国側が掲げた戦争スローガン¹や、パリ講和条約労働規約が挿入され、1919年に国際連盟の発足に際して国際労働機関(ILO)がつくられたことは、日本政府をして労働組合活動に対する拘束を緩和させ、労働組合の結成を事実上承認する契機となった。また、1917年10月のロシア社会主義革命の成功は、日本の労働運動に強い刺激を与えた。翌年、1918年の夏、米価の暴騰に反対した民衆の暴動(米騒動)が全国的に広がったことは、民衆の力を見せつけることになり、社会運

動の局面のみならず、ジャーナリズムの領域で「資本主義と社会主義」、「階級と搾取」、「革命」などの言葉が一般に用いられるようになった²。また、統治の上でも大きな転機をもたらし、寺内内閣を辞任に追い込み、初の本格的な政党内閣、原敬内閣の誕生をみた。原内閣の融和政策に乗じて、労働組合も1918年から1919年にかけて107組合から187組合までと大増加を見せ、その勢いは大正末期まで続いた³。

数量的な変化とともに労働争議の内容においても変化が見られる。労働組合による組織的で計画的な争議が進められ、一作業場に止まらず、同一産業部分の一斉ストライキが初めて起こった。1919年7月に起きた東京の16新聞社製版工の8割増給と8時間労働制などの要求を掲げた一斉ストライキや、印刷工の組合の信友会が率いた東京印刷同業組合の160余の工場主に対する一斉ストライキがそれである。なお、同年の足尾銅山のストライキに際しては、東京の労働団体との共同闘争に見られるように、個々の資本家に対する闘争や、同一産業部分に限った闘争を乗り越えて、階級的連帯を示す闘争様式も出現した。

また、1920年に始まった戦後恐慌は労働争議を激化・深刻化させた。戦後の好景気が1919年を頂点にすると、1920年3月の株式市場の暴落から引き続いて商品の大暴落となり、各産業にもその余波が広がって、有力な銀行も破綻して全国的な大恐慌となった。大量失業の発生する中で、労使間の力のバランスも急激に崩れていった。1919年の497件のストライキ件数も、1920年には282件に下がり、好況時代には上り調子を免れなかった労働組合運動は次第に防御戦となって深刻な様相を呈するようになった⁴。失業や賃金引下げの旋風が巻き起こる中、資本と官憲の弾圧や普通選挙運動の挫折は、労働者側の反抗を煽るように働き、労働運動の思想は急進化の傾向を強めた。1920年2～3月には、官営八幡製鉄所の2万数千の労働者がストライキに参加し、6月には神戸の三菱・山崎両造船所の3万8000人の労働者が1カ月間におよび争議を続けた。また、同

年の5月には、東京の上野公園で第1回のメーデーが開催され、組合間の連帯の意気も高まった。この結果、友愛会、信友会、正進会、啓明会、日本交通労働組合など9組合によって「労働組合同盟会」が結成された。後日には、全日本鉱夫連合会、東京鉄工組合、機械技工組合もこれに加入して、争議の応援やシベリア出兵反対の活動も行った。

このような労働組合運動の成長や急進化には、社会主義との結合も背景にあった。大杉栄と荒畑寒村は早くも1914年に、これまで文芸雑誌を標榜していた『近代思想』を廃刊して、月刊『平民新聞』を創刊して直接に労働者へ働きかけようと試みたが、相次ぐ発禁処分で挫折した。大杉と寒村は『平民新聞』の内容を併せ持つ第2次『近代思想』を復活させたが、これも発禁の連続で廃刊となった。1915年には、堺利彦が『へちまの花』を『新社会』に改題して創刊し、この流れに呼応した。

だが、大杉は神近市子と伊藤野枝と恋愛問題を起こし、同志の多くが大杉から離反することになった。とりわけ、大杉にとって、『近代思想』以来の盟友の荒畑寒村と決別したことは最も大きな損失であっただろう。荒畑は「大杉君の個人主義的な色彩の強い無政府主義の傾向に不満を抱くとともに、他面また彼の恋愛問題に対しても同感できなかった」⁵といているように、思想的な差異以上に恋愛沙汰が大きく響いたと推測できる。赤旗事件で投獄されていた時期、妻の菅野スガが幸徳秋水と恋愛関係に陥って、失意と苦しみを味わった荒畑にとっては古傷が痛むような事件だったろう。

孤立状態に陥った大杉は『文明批評』を創刊して再起すると、1917年の暮れには、亀戸の労働者街に転居した。そこで「労働運動研究会」⁶を開く傍ら、『労働新聞』を発行して労働者に毎月数千部を配布した⁷。こうして、研究会に参加してきた労働者会員や、また『労働新聞』というメディアを媒介に、大杉らのグループと職場の労働者は結び付き始めた。この時期に労働者との直接的

な接点がなく、評論的であった堺利彦や山川均より、大杉の方が労働者との接触と働きかけに一步先を進んでいた。また、1919年10月に第1次『労働運動』が創刊されると、東京、関東のみならず大阪、名古屋、神戸にも支局や出張所が設けられた⁸。こうして、大杉の影響下にかなりの労働者が結集しはじめ、印刷工の信友会、正進会などは革命的サンジカリストの拠点となった。このように大杉が蒔いた種子は、第1次世界大戦後の労働運動の再生期に多くの若木となって育ち、1920年から1922年にかけて、労働運動の指導的地位に立つことになった⁹。秋山清氏が「わが国で革命運動と労働運動を結び付けて展開した最初の人」¹⁰と評価したように、大杉は「冬の時代」に他のいずれの社会主義者にも先駆けて労働運動の再生にのりだした人物であった。

亀戸に居住しながら、大杉が最初に手掛けたのは民本主義と労資協調主義に対する批判であった。まず、民本主義に対する批判を『文明批評』を通して行った。労働者たちの「社会的憧憬」は、民本主義者たちの枠を超えて、より遠くを凝視していると述べ¹¹、民本主義者たちの限界性を指摘した。そしてまずを吉野作蔵に向け、政治の目的は何であるかを問い続ける。

初期の民主思想は個人的自由の尊重ということとその抽象的根本義とし、最大多数の最大幸福ということとその具体的要諦とするに至った。

次に、政治の絶対的原則であったこの民主主義は、それに反対の国家主義の発達のために、単にこの国家主義の弊害を矯めるために一便宜的主義となった。そして最後に、民主主義はついにその民主主義の名までも失って民本主義と改名した。民本主義とは、要するに治者側から見れば民意の尊重である。被治者側から見れば参政権の要求である。そしてこの民本主義が最近政治学の絶対的原則であるそうである

¹²。

吉野の民本主義は、民主主義と国家主義との不安な同居状態と説き、国家

主義を絶対的な原則としているため、政治の目的——何のためか誰のためか——が分からない主張だと批評した。松田道雄氏はこの大杉の民本主義批判を、最下層の人々の中に身を置いて行ったため、実感を持つものとして、他の同時代者の批評に比べて光っていると称賛している¹³。

このようなメディアを通しての批判と共に、当時、友愛会を中心に盛んになっていた普通選挙運動に対する批判宣伝活動に出た。1920年5月、原内閣の総辞職に伴う総選挙に向かって、普選運動は高揚していた。大杉は労働者たちの普通選挙権獲得運動を徹底的に批判して東京をはじめ、関西方面も飛び回った。その影響のほどは、「普選に対する皆の固い信仰がグラつき始めたのは、確かに此頃からだと思われる」¹⁴という京都の織友会会長の辻井民之助の証言にも、垣間見ることができる。

また、『労働運動』（第1次）を通して、労資協調主義に対する批判を展開する。

資本と労働とは元来協力調和すべきものであることは言うをまたない。協力調和というよりむしろ一致融合すべきものである。その間に何らの利害の衝突もなく、また意志の疎遠もない。

これだけのことがわかっているなら、すなわち資本と労働とのこの元来の性質が分かっているなら、この二つのものが利害衝突し意志相隔離するがごとき場を見て、なぜそこに次のような疑問を起こさないのか。これは資本と労働とがその元来の性質を維持すべき地位におかれていない故ではあるまいかと¹⁵。

大杉は、学者や政府、資本家たちがこの疑問を看過し、資本と労働との元来の性質を、資本家と労働者との関係にすり替えたと批判する。そして、このような労資調和論者の論理を徹底化するなら、一切の社会問題や労働問題の解決法は、資本と労働との分割の廃止、すなわち共同資本と共同労働とに変えな

ければならなくなるので、社会主義者たちの主張と同一なものにまで高めることができる」と唱えた。

そして、国際労働会議（ILO）に政府が官選労働代表を派遣することに対して、世論が沸騰すると、「世界的な労資協調主義の会議」と批判し、反対運動を展開した。また、上述した東京印刷同業組合の一斉ストライキの際、大杉は同志、社会主義者たちに働きかけ、争議支援に力を注いだと、信友会の会長・水沼辰夫の証言がある¹⁶。また、『労働運動』（第1次）の1920年1月は、足尾銅山の坑夫たちが組織した大日本鉱山労働同盟会の支援にも奔走した様子を伝えている¹⁷。

同年の2月に勃発した官営八幡製鉄所の争議にも大杉らの影響を見ることができる。争議を指導した浅原健三は、1919年の7月から労働運動社に出入りして、大杉や和田久太郎と接触して強い影響を受けたという。浅原は、同年10月に八幡製鉄所の職工を中心に労友会を結成して会長になると、1920年2月に、1万数千人の労働者を率いてストライキに突入、溶鉱炉5基の火は消えた。4月上旬、製鉄所は職工の要求をほとんど受け入れる優遇策を引き出したが、犠牲も多く、浅原の懲役4か月などをはじめとする幹部の入獄など、労友会は弾圧によって壊滅した¹⁸。その2年後の1922年2月、旧労友会が罷工2周年記念演説会を計画して、大杉栄に応援の演説を依頼する所以はこれにある。

このように、労働運動社に訪れる労働者たちとの交流とともに、労働争議・ストライキに「ほとんど連日連夜どこかしらに開かれる労働団体の演説会を利用して」¹⁹宣伝活動を行ったという。ここでいう「演説会を利用する」とは、「演説会貫い」のこと、つまり演説会をのっとしてアジテーションをすることを指している。このアジテーションはかなり効果的であったようで、大杉栄の直接的の息がかかった組合は少なかったにもかかわらず、その影響力と伝播力を次第に強めていった。もちろん、友愛会の会員たちに対する「労働組合

研究会」への参加の直接的な勧誘も怠らなかった。

明治期からの社会主義の老荘であった渡辺政太郎の死後、彼が主催していた研究会と「労働組合研究会」は合同して、渡辺の号に因んで「北風会」と改称した。北風会のメンバー同士の研究以外に、「演説会貫い」は北風会の戦術、宣伝方法であった。演説の短評をしながら、いわゆる労働運動指導者を窮地に追い込んで、指導者に指導されなくても、労働者自身の力を意識することができると促すものだった²⁰。自由な演説会を開くことができなかった大杉らにとって有効な宣伝方法であった。しかし、この「演説貫い」は単なる「打ち毀し」や「伝道」のためではなく、「新しい生活、新しい秩序」を築き上げて行く一つの実際運動であった²¹。当時、関西労働同盟会を率いていた賀川豊彦も「聴衆と講演者が合意的に話しするのが真のデモクラチツクな遣り方だ」²²と感心した。北風会の主な対象になったのは友愛会などの労使協調的な演説会であった。この運動方法には、最も手を焼いたのであろう友愛会の会長・鈴木文治も一目置いた感がある。

大杉君は独り理論を以って労働者を率ゐていたのみならず、其風采性格——飄逸な、快淡な、純情な、情熱的な、生一本な——を以て同君に接近して行つた多数の労働者を魅惑してゐたやうである。同君はその頃よく其一党を引具しては、例の筒袖の和服の着流しかなどでいろいろな労働者の集会に顔を出し、野次其他の方法で、満座の空気をざわめかして居た。無政府主義者に殆ど言論の自由の認められなかつた当時としては、これも亦かなり有力な宣伝方法であつた²³。

鈴木も触れたように、大杉が訴えた宣伝は、討議や会話の方式を重んじて各自の自主性を強調して実践的にその開発を促していた。労働者の直接的な行動や参加を重視する大杉の主張内容に加えて、この運動様式は労働者に訴えるところが多かつたと思われる。このような方式は、北風会から労働運動同盟会

にかけて、大杉の活動を紹介した次のような記事にも垣間見ることができる。

そこではいわゆる大杉一派がリーダー格になっていたが、インテリぶった発言はまったく聞かれず、もっぱら労働者の自主性、自発性をうながし、「労働者の解放は労働者自身の力で」というモットーが常に先行していた。……その思想的根拠は、大杉らの強調する、労働者の自主的直接行動によって、それをゼネストまでもっていこうというアナルコ・サンディカリズムにあった。当時、友愛会などの大組合が労使協調主義に傾いていた情勢のなかで、あくまでも労働者の革命的自主性を強調したところに、北風会の存在意義があったといえるだろう²⁴。

このような実践方式を山川均らの研究会と比べた高津正道の証言があって面白い。山川らの研究会が、いわば学校における先生と生徒のような関係で行われたとすると、北風会はまるで反対で、先生のいない自由討議の場であったという²⁵。この時期における北風会の宣伝活動は、日本の労働運動の戦闘化や、労資協調論に疑問を投げかけるのに大きな功績をした²⁶というのは確かであろう。大杉は、労働者一人ひとりの自己獲得運動としての意味を重視している。演説を受け身で聞き、リーダーに追随するのではなく、自由発意を発揮して、自分の道を開いて行くことを強調した。労働運動を労働条件の改善を図る運動に止まらないで、労働者自ら新しい社会制度の像を形づくる稽古として位置付ける。

賃金の増加と労働時間の短縮とを要求。労働者が人間である限り、労働運動は決してこの生物的要求だけに止まるものではない。もう少し進んだ、ある人間的要求を持っている。資本家に対する憤懣や激昂の奥底に、むしろ、それらのものを湧き立たせる源。労働者の心にも時代精神の反響はある。近代的自意識のはげしい波動は労働者の貧しい心の中にも伝わっている。（中略）僕等はそのいわゆる僕等自身を持たなければならない。僕等自身とは、労働階級自身、労働団体自身

の自主自治的能力である。その自意識である²⁷。

大杉は、このように労働者の自主性を強調し、これを高揚させるベースに労働組合運動を転換すること、その発達による社会の変革を試みた。労働運動は賃金の増加や、労働時間の短縮の要求にとどまらないで、労働者の人格獲得運動であるとした。大杉がいうのは、「自分の生活が自分の生活でない」で、「すべてが他人に課せられて」「自分の生活とを左右されている」現状を「まず僕等の工場生活から痛感」する労働者たちに、自分の運命を取り戻すことを促している。つまり、人格獲得運動とは、資本からの疎外や職場における疎外の克服を図るものとして定義することができる。このように定義できるのは、次の文章からも確かめることができよう。

労働運動は労働者の専有物ではない。知識階級がそれに加わるのになんの差し支えのあろうはずがない。しかし労働運動の主体はやはり労働者でなければならない。

労働運動は、その精神において、労働者の一切の能力、人格の獲得運動である。労働運動に加わらんとする知識階級は、何よりもまず、労働運動のこの本質に徹底していなければならない。そして知識階級そのものの歴史的任務が権力階級の擁護であり被圧制階級の欺瞞であったことの反省と、こんどこそは被圧制階級の真実の友達になるのだという新しい覚悟とに徹底していなければならない²⁸。

労働者がその自主性を取り戻す対象は政府や資本家や工場主に限ったものではない。労働運動においても、労働者は知識人の理想に左右されてはいけな
いと、大杉は主張する。これは、他の社会主義者や労働運動家たちの姿勢を批判する大杉栄の観点にもなった。

労働者たちの主体性を強調する、このような大杉栄の主張が彼の運動方式と共に、大正期の労働運動高揚の時期に大きな波及力を持っていたのは、上記

に確かめた。しかし、労働組合運動の戦闘化——意図する目標や路線の違いはともかく——というのは、ただ大杉栄だけが強調したものではなかった。荒畑寒村や山川均も『青服』をこの時期に発行して、労働者たちに直接働きかけたことは周知のとおりである。

3. 急進的な社会変革への「協同」闘争とその「亀裂」

労働組合に基づく急進的な社会変革運動の傾向は、大杉栄だけの専有物ではなかった。大杉と長い間に同じく活動してきた荒畑寒村はもちろん、マルクス主義を指向していた山川均の場合も類似な立場を示した。

山川は明治末期に、幸徳秋水の影響を受けて直接行動論の論陣を張り、片山潜らの議会政策論に対立した。赤旗事件による収監中には、経済的側面からの理論的な思索を積んでいたが、出獄後は故郷で薬屋になってしばらく社会主義運動から離れていた。ところが、1916年、再び東京に舞い戻って堺利彦の売文社に身を寄せて評論活動を開始し、吉野作造、大山郁夫、室伏高信らの民本主義批判を行って、現行の議会や普通選挙の役割を認めない論調を繰り広げていた。荒畑寒村も大杉栄との連携は見合わせたが、世界産業労働者連盟（IWW）を手本とする、産別労働組合運動を展開して行った。労働組合の直接行動に基づく社会変革を肯定し、議会を通しての社会改革を改良主義と見做すのは、衆議院選挙にも挑戦し、常に中央派を自認してきた堺利彦を除くと、明治社会主義を継承した彼等のグループでは共通な見解であったと思われる。また、堺利彦もロシア革命の消息が届くようになると、山川とともに『新社会』や『社会主義研究』紙上でロシア革命や国際社会主義運動の研究や紹介に取り組み、インターナショナルにおける中央派の立場を後退させ、社会変革の力として労働者の結集に論旨を移して行った。明治期からマルクス主義を自認して

きたこれら社会主義者たちは、第2インターナショナルが改良主義、議会主義、合法主義のためにマルク主義から離脱して行ったと見做し、マルクス主義の革命的伝統を戦闘的な労働組合に基づいた直接行動論に結びつけて考えていた。山川均の次の文からもこれを察することができる。

社会民主党の政治運動を以って、マルクス主義の正統の運動とみなし、ややもすれば労働者の階級的運動を政党運動に従属せしめようとした年来の傾向は、なお形成の過程にあって労働階級の発達を反映したものである……

労働組合は職業の組織から階級の組合となり、労働運動は同職者の運動から同階級の運動となった。さらに進歩した組合運動は、労働者の階級的団体たる労働組合の組織を以って、ただちに新たなる生産組織そのものであるという自覚に達して居る²⁹。

このような、労働組合運動の独自の意義を追及するマルク主義の解釈は、ボルシェヴィズムをマルクス主義の正統な継承者として受け入れるのに、重要な契機になったと推理できる。山川によれば、堺利彦がサンジカリズムと議会主義との結合をボルシェヴィズムとして解釈するのに反対し、彼自身は単なる結合ではなく、上位の政治闘争のための修正案として考えたという³⁰。

マルクス派社会主義は、その故郷にあっては、社会民主主義によって右傾的に修正され、フランスにおいては、サンジカリズムによって左傾的に修正された。しかるにこのマルクシズムはロ国において最初の実現の機会を得ると、社会民主主義の形においては実現されないで、かえってサンジカリズムの影響をいちじるしく受けていた。ソヴィエト・ロ国の産業組織が、多くの点においてサンジカリズムの理論を実現したことは、争うことのできない事実である³¹。

つまり、山川はサンジカリズムも革命的な伝統の上に置き、ボルシェヴィズムをその発展的な後継として位置付けた³²。このように、社会主義者たちに

は各自の展望や思想的な背景の違いは存在するものの、労働組合を階級闘争の重要な根拠地と考えた点では同じであった。なお、「事実の承認」という観点や、革命の成功を「民衆の革命的精神と、創造の力とを、ほとんど無限に信用」³³する指導者像といった要素は、ボルシェヴィズムにサンジカリズム的な親近感から接近したものとも見える。世界的な革命の熱気の高まるなか、議会政策を排除した戦術上の類似性は協同闘争を図る重要な要因として作用したとみられる。そして、社会変革を追求しようとする同時代的な雰囲気の中、その協同的闘争の中心的な役割を「労働組合」に集約して行く³⁴。大杉は当時、中心媒体としての労働組合の役割を次のように強調する。

労働組合の進化とでもやはりおなじことだ。その将来はあらかじめ定められていない。

労働組合運動は、それ自身の中に、また一般社会の中に、なんらかの建設的傾向を確立して行く一大方法である。しかしそのいわゆる建設的傾向が、そのまま社会の基礎そのものになるほどの、十分な発達をとげるといふ、その「十分な発達」の程度いかんは、これまたあらかじめ決定することができない。また恐らくは社会はこのいわゆる「十分な発達」によほど遠い以前に、壊滅されるであろう³⁵。

大杉は、労働組合の役割に関して、予め定めることはできないとし、諸傾向を実現させる蓋然的な可能性を持つ組織であるとみなしていた。ここには、労働組合を労働者自身の威力や将来社会を運営し得る能力を確かめる媒体として認識している大杉栄の考えも覗いていよう。直接行動は労働者を錬成し、日常的利害の共同性から革命に向かつての闘争の共同性を見出す重要な土台であり、社会革命の後の未来社会の土台になるという見解には、大まかに同意していたに違いない。

この協同の機運は、まず労働者側から湧いてきた。1920年5月1日に上野公

園で労働者約2,000人が集まって、日本初のメーデー集会を開き、治安警察法17条の撤廃、失業防止策、最低賃金法制定の要求を決議した。この集会は水沼の提案によって信友会、正進会が提唱し、友愛会などに働きかけによって実現でき、堺利彦が保管していた幸徳秋水の遺著『基督抹殺論』の印税の一部が費用として使われた。そして、この集会を機に、友愛会、信友会、正進会、啓明会、日本交通労働組合など9組合が、共同行動をとる機関として「労働組合同盟会」を組織した。先にも述べたが、全日本鉱夫連合会、東京鉄工組合、機械技工組合も加入して、当時の東京の労働組合の大部分を結束する形になり、争議の応援やシベリア出兵反対の活動を行った。また、関西でも14団体によって「関西労働組合連合会」が結成された。これと同時に労働組合のなかに、次第に革命的労働組合主義の影響が浸透していった。これを象徴的に見せたのは、友愛会の8周年大会で、関東の直接行動派と関西の議会行動派とが鋭く対立する中、前者の優勢のうちに推移して次第に戦闘化したことである。もちろん、これには、上記に確認したように、大杉の宣伝活動が一役買っていた。

第1次世界大戦後の経済恐慌の中に、資本側や政府の弾圧に対抗すべく結成された同盟の機運は、まず労働者たちの協同戦線の結成へと動き、それに刺激された形で、社会主義者の連帯の熱気は立ち上がってきた。同年の8月、山崎今朝弥と山川均が提起で「日本社会主義同盟会」の準備が進められ、大杉も發起人の一人として積極的に加わった。

その折の8月末に、上海の韓国臨時政府の使者・李増林が大杉の家に訪れた。彼はコミンテルンが上海で開催する予定にしていた極東社会主義者会議に、日本の代表として参加することを要請するために来たのである。彼は、まず堺利彦と山川に合ったが、内乱罪を恐れた堺らに断られて「ほとんど絶望の末」、大杉のところへやって来たのである³⁶。大杉はすぐに上海行きを引き受け、10月20日には上海へ密航して会議に出席した。

この経緯には、当時の上海の韓国臨時政府の軍務総長であり、後に高麗共産党・上海派の領袖になる李東輝の働きがあった。李東輝は部下の李春熱（軍務次長）と李増林を日本へ派遣した³⁷。李増林は李春熱を伴って訪問したとも考えられるが、ふたりが行動をともにする危険性を思うと、李春熱の代理という資格で大杉と会ったと思われる。10月25日に行われた「極東社会主義者大会」に、韓国臨時政府の呂運亨、中国の陳独秀、コミンテルンの代表のヴォイチンスキーの他に中国、朝鮮から数名が出席した。この会議は、コミンテルン支部として共産党の設立が主な討議内容であったと推定できる。大杉を除くと、ほとんどが共産党の同調者であったため、運動方針を巡る議論はほとんど大杉とヴォイチンスキーの間に行われた。各国の運動の自主性を主張した大杉の意見に、中国や朝鮮側も同調して会議はまとまったという。大杉は、社会主義者の間の思想的な違いを認めながらも共同できる、ちょうど日本社会主義同盟の極東版のようなものを考えていたという³⁸。会議の後、大杉はヴォイチンスキーから条件なしの運動資金2,000円を受け取って日本に戻った。

12月には、夏から準備してきた社会主義同盟会が発足し、また『労働運動』（第2次、21年1月～6月）をアナ・ボル共同で刊行することで、協同闘争の氣勢は高まっていた。ボル派の参加に反感を抱く一部の同志たちの離反にも拘わらず³⁹、ボル派の近藤栄蔵や高津正道に各号1頁を提供し、1月から発行した。創刊の資金はコミンテルンの運動費で賄ったが、ボル派の参加が条件づけられていたわけではなく、協同の必要と可能性を信じていた大杉自身の判断であった。その第1号で、日本の現状は「シベリアから、朝鮮から、支那から刻一刻分裂を迫られて」いるとし、革命の可能性を信じて、資本主義と軍国主義の行きづまりに気づきつつある日本人の目覚めに向けて発刊すると表明した。そして、次のように続く。

労働者は、いっさいの社会的できことに対して、労働者自身の判断、労働者自身の常識を養え。そしてその常識を具体化する威力を得んがための、十分な団体的組織を持て。労働者の将来は、ただ労働者自身の、この力の程度いかににかかわる⁴⁰。

迫りつつある革命の機運は、しかし、労働者自らが成長し、自分自身の力の確信を持ちえない限りでは成功できない。労働者たちが具体的な威力を備えるためには、労働組合という組織的な力を備え、自ら確信を得る必要があると唱える。

ところが、1920年を通じて盛り上がってきた共同闘争や連帯の機運は、早くも1921年1月に入って内部分裂の危機にぶつかった。友愛会の機関紙『労働』1月号に棚橋小虎が書いた「労働組合へ帰れ！」が波紋を起した。棚橋の論文は、急進化する労働組合運動を労資協調主義の旧組合主義へ逆戻りさせる主張として、戦闘的な労働者たちに受け取られた。棚橋が新人会出身のインテリゲンチヤであったことから、直接行動派の労働者にそれ以前から根強く張っていた「知識階級指導者排撃」の要求が燃え上がった。これは指導方針を巡る「直接行動派」と「現実派」との間に激しい対立に進み、6月4日、友愛会、東京鉄工組合などが「職業的扇動者、高踏的直接行動主義者、暴力革命妄想者とは断然分離」と声明して脱退に至る。

「同盟会」を脱退した友愛会（1921年の10周年大会以後からは総同盟）は、その後1922年頃に、その幹部たちを中心にボルシェヴィズムを指導方針として強めていくが、鈴木文治系の伝統的な労働組合主義も内部には根強く残っていた。やがって、同年9月30日に大阪で開かれた労働組合全国総連合創立大会では、中央集権的な合同論を主張し、反総同盟側の自由連合論と鋭く対立することになる。

また、この前の4月に、再び李増林が来日し、コミンテルン極東部委員会へ

の代表派遣を要請した。大杉は年初に患った肺結核からやっと回復し始めた頃で、コミンテルン側の意向もあり、ボル派の近藤栄蔵を彼の代理として派遣するように調整した。それに際して、ボル派は大杉を排除して共産党結成に踏み切り、近藤栄蔵はこの代表として会議に参加した⁴¹。ところが、近藤栄蔵は帰国途中に下関で失態を犯し、これまでコミンテルンと接触してきたことが当局に暴かれてしまった。その余波で『労働運動』（第2次）は廃刊になった。

この労働組合同盟会の分裂を期に、大杉は労働運動における知識人の役割や労働者との関係、そして前衛に関しての彼の意見を書き記した。とりわけ、友愛会に結合していった新人会出身の幹部に向けて書かれた文章である。

プロレタリアは力と生气とに充ちた新勃興階級なのだ。それをブルジョワジーの屑のへなへなの知識階級が、のらくらの文士が、教化しようの指導しようのとは、ちゃんちゃらおかしい。知識階級から出た労働運動者や労働文学者は、このプロレタリアの中に自分のからだをぶちこんで、そこから力と生气とを掬み取って来なければ駄目なのだ。そしてまた、その中に流れている、プロレタリア自身の感情や理想を学んで来なければ駄目なのだ。

が、プロレタリアのいたるところに、この力と生气とが溢れているのではない。この新しい感情や思想や理想が漲っているのではない。それは、ほんのただ、その前衛の中にだけだ。その他の大部分の中では、単なる憧憬として幽かに現れているか、あるいは潜在力としてごく奥深くに隠されているに過ぎない。そして、むしろ無力そのもの、死そのもののように見える⁴²。

そして、知識人の役割とは、労働者の中の前衛——戦闘的な労働者——との一体感を形成し、他の大部分の民衆の幽かな憧憬として、奥深く隠している潜在力をそとに導き出させる、大きな誘導力としての機能することを注文した。そのためには、ただちに労働組合の最高幹部の一人や指揮者になろうとしないで、平組合員として参加し、労働者との一体的感情を得ることを薦めた。

これは、かねてからの大杉の持論でもあるが、山川の『前衛』派に対抗する意味を持って書かれたものである。大杉は、次第に「無産階級の独裁」や「協同戦線」に対して意識的に対抗する論陣を張って行くわけだが、これは、ロシアにおける革命の進行に伴った出来事の情報を得てのことであった。

4. 「サンジカリズム」の貫徹とその脱却から見るアナ・ボル論争

このように、協同闘争の失敗を経験した後、大杉は『労働運動』（第3次）を通して、ロシア革命のボルシェヴィキ的歪曲に対する批判、バクーニンに依拠したマルクス主義批判、労働組合全国総連合を通しての日本の共産主義者に対する批判を展開して、いわゆるアナ・ボル論争の口火を切った。

大杉はロシア革命の進行状況の情報を、イギリスのアナーキズム紙『フリーダム』に載せられたエマ・ゴールドマン（Emma Goldman、1869～1940）やアレクサンドル・ベルクマン（Alexander Berkman、1870～1936）の記事から主に得ていたが、コミンテルンの海外情報誌『国際通信』にも目を通していた。大杉は最初に、アナーキストやサンジカリストなどの非ボルシェヴィキ左翼に対する弾圧に触れた。それに対して、山川菊栄は「労農ロシアの監獄生活」（『改造』1922年1月）で、ロシアの監獄生活の楽さなどを紹介しながら反論した。

また、大杉栄は、1921年3月のクロンシュタットの兵士ソヴィエト蜂起と、この時期に開かれた第10回ロシア共産党大会に採択された新経済政策（NEP）や、労働組合を巡る論争や労働者反対派についての記事を連続で報道する。まず、クロンシュタット蜂起については、アレクサンドル・ベルクマンの記事を翻訳・転載し、蜂起の背景になったペトログラード労働者の同盟罷工が鎮圧されるに至るまでの経緯、ソヴィエト内の民主化と革命の徹底化といった彼らの

要求を伝えた。

次に、新経済政策（NEP）に関しては、それが「さらに前進せんがための後戻り」というロシア共産党の意見と、「資本主義への降伏」というブルジョア国家の意見に対しては判断を保留する。ただ、注目すべきところは労働者たちの状況にあるとし、現在のロシアは国家資本主義と私的資本主義との競争の中で全般的な労働条件の悪化、労働争議の実質的な禁止や一人管理制の下で、産業に対する労働者の直接的な統制権が消失していることを批判の眼目に置いた。

ロシアはまだ革命の最中なのだ。ようやくまだその第一歩を踏みだしたばかりなのだ。この革命のロシアの労働者に非常な犠牲的精神が要求されるのは当然すぎるほどのことだ。

が、労働者の犠牲が当然すぎるというのは、その革命が労働者自身の革命であって始めてそう言われることなのだ。自分の革命だから自分を犠牲にするのだ。他人の革命に自分を犠牲にする必要はちっともない⁴³。

大杉は、ロシア革命、少なくとも新経済政策の実施以来のボルシェヴィキ革命の進行が、果たして労働者自身の革命なのかと疑問を投げかける。このような革命進行に対する、ロシアの労働者の「感情」に最も接近している共産党内部の存在は「労働者反対派」とであると評価する。「労働者反対派」は1919年から発達し始め、中央党機構が地方の党組織や労働組合を支配すること、党が工場を統制するのに労働者の役割を無視してブルジョア専門家に頼ること、工場における集団統制を一人管理に代えようとする動きに批判的な姿勢を示してきた。そして、1920から翌年にかけて労働組合の国家機関化に反対してロシア共産党内の反対勢力になった。

この問題を巡っては、とりわけ第10回ロシア共産党大会から大論争に入っ

た。当時の表面的な争点は、党と労働組合との関係、労働組合の役割に関するものであった。レーニン、ジノヴィエフは共産主義の学校として労働組合の役割を主張し、トロツキーは労働組合の国家機関化を主張して表面的には違いを見せたが、両者とも労働組合に生産の統制権を与えることを拒否している点では一致していた。一方、労働反対派は、プロレタリア階級を最も直接的に代弁する労働組合が、国家経済や個人企業を統制しなければならないと主張した。労働反対派は、平党员たちからの非常な支持にも拘わらず、党指導部からはまったく呼応を得ることができなかった。レーニンは小ブルジョア的、アナルコ・サンジカリズム的な傾向であると⁴⁴いう最も強い非難を行い、大会で分派の禁止を採択されるとこれ以上の議論は不可能になる。

ボルシェヴィキ政府は、そのマルクス説的国有と集中との間に、もう久しい以前のロシアの労働組合を政府の仕事としてしまった。資本主義が廃止されて、われわれの政府は労働者の政府であるのだから、労働者はその利益を保護する特殊の機関が要るわけがないじゃないか。だれに対して自分を保護するのだ？自分自身に対してか？かくして、一九一七年の革命時代にあれほど重大な役目を勤めた労働組合は、共産主義国家によって、戦闘的労働団体としては絶滅されてしまった。そしていわゆる労働組合は国家の付属物となり、その主なる機能は労働に関する政府の命令の伝達となった⁴⁵。

大杉はこのように、実際の労働階級は生産や産業の管理を奪われ、労働組合は労働を強制する警察力として成り下がってしまったと論じた。彼は、労働者たちが直接的で集合的に産業を管理して改造する、下からの社会主義の可能性を、つまり「プロレタリア理想主義」は廃れたと感じたに違いない。

これに比べると、山川の見解はロシア共産党指導部の路線に沿っていたと言えよう。新経済政策（NEP）は、内戦期に破壊された経済の迅速な修復が急務であるという認識である。労働者がより包括的に組織でき、また大産業別に

整えられ、生産の管理と経営に対する知識と経験が積まれるに従って、ようやく労働組合は生産と分配を管理できると見なした。そのために、現在の労働者反対派の主張は、積極的で具体的な意見や綱領も持たないとし、一種の不平分子に過ぎない⁴⁶と批判的であった。

普通の意味での国家資本主義は、在来ブルジョアジーの国家の手に資本を集中することであるが、ロ国の場合には、無産階級国家の手に資本を集中し、もしくは無産階級国家の手に資本を支配し、これによって工業化と生産力の増進をはかることである。（中略）それによって増加した生産力とは、ただちに社会主義的経済を建設する材料として、無産階級国家によって用いられるからである。

また、内戦期から生産性の向上のために導入された労働規律の強化政策も同じ論理で肯定された⁴⁷。1人管理制に対して山川は、産業上の見地から過渡期における「独裁政治」の必要を論じたレーニンの見解に従う。生産技術上の理由によるこの独裁政治は、産業別による労働者の団体組織の発達に従って、その必要性が減少するとし、また解任や集会民主主義などの多様な下からの統制と調和して行われていると確信し、一時的なもので、「ボルシェヴィズムは明らかに産業上の自治主義を目標としている」⁴⁸と述べる。

このように、第10回ロシア共産党大会における労働組合の地位に関する論議を伝えながら、山川はサンジカリズムに対するこれまでの立場を次第に変えていく。従来の多くの研究では、山川の立場の変化について、高島素之との政治闘争と経済闘争についての論争を経て、フランスの労働総同盟（CGT）の右傾化やイタリアにおける工場占拠運動の失敗から、サンジカリズムの限界性を認識したためと語ってきたが⁴⁹、その変化を決定づけたのは、やはりレーニンの労働反対派に対する評価を起点に、ボルシェヴィズムとサンジカリズムの違いを積極的に取り入れたのではないかと思う。

労働組合が新社会の生産組織として重要な職分を有することについては、旧式組合主義者も共産主義者も、その見解を均しくするものである。ただ旧式組合主義者と共産主義者との異なる所は、労働組合がどのような職分を取り得るまでに完成されるためには、まずこれを妨げて居る障害物を撤廃するの必要はないかどうか、言葉を換えていえば、組合は資本階級支配の下にその発達が完成されるものであるか、それとも無産階級が権力を掌握した上で、初めてその発達が完成せられるものであるかという一点に帰着するのである⁵⁰。

やがて、山川はサンジカリズムの革命的な意義を称えてきた従来の立場を後退させ、「労働組合の進化と職分」（『解放』1922年2月）においては「純経済的 direct action 主義」と規定し、高次の政治闘争を担うボルシェヴィズムと対峙させる。サンジカリズムは、労働組合の闘争を社会民主主義の改良的議会政策から救いだし、産業的革命的の行動に移した功績はある。資本主義から社会主義への社会変形を、労働組合の発達の如何にかかわるものとしてしまった限界を露呈した。ところが、ロシアにおいては、無産階級は労働組合の十分な発達を待たないで、産業的な単位を基礎に政治組織と経済組織が一体化になった過渡期の組織としてソヴィエトが登場したという。組織せられた強制力であり、国家組織であるソヴィエトが、全社会を無産階級に同化吸収させた後、労働組合はサンジカリズムの理論通りに生産と分配に与るだろうと見込んだ。山川は、ロシアにおけるプロレタリアート独裁がこのソヴィエト独裁であり、決して共産党の独裁ではないと見做し、ブルジョア・ジャーナリズムはもとより、カウツキーやクロポトキン、バートランド・ラッセルなどの社会主義陣営からの反論に論駁を繰り返す。

大杉宛に、『労働運動』（第3次7号）に「生死生」（匿名）という読者から、「なぜ進行中の革命を擁護しないのか」という読者質問が届いた。ロシア

革命に関する批判文が目立っていたためか、大杉の立場を反革命的だとして多く受け止めたと察せられる。「全生産力の不十分な現在から」アナキズム社会に到達するためには、「労農ロシアの通りつつある過程」を通過すべきであり、「協同の敵に対抗してロシアの政権を擁護すべき」ではないかと質す。これに対して、大杉は次のように答える。

一足飛びに天国へ行けるかどうかは僕も疑う。しかし無政府主義へ行くにはまず社会主義を通過しなければならぬか、ボルシェヴィズムを通過しなければならぬとかいうことは、僕は無政府主義の敵が考え出した詭弁だと思っている。(中略) 僕は無政府主義の即時実現を信ずるものであるということだけを明らかにしておく⁵¹。

大杉はまず、十分な生産性の上によりやく無政府主義社会が出現できるという等式に疑念を示した。そして「無政府主義の即時実現」を信じるといい、プロレタリアート独裁を否認するように書いてあるが、ここでその対峙概念として取り上げたのは、社会主義⁵²かボルシェヴィズムであって、生産者の独裁や無産階級の独裁ではない。1920年8月頃、山川を訪ねてロシア革命についての談話も注目に値する。山川の証言によると、大杉はクロポトキンが描いたような理想的な社会が、革命の後にすぐ実現できないと語り、「生産者のディクテーターシップという思想」は、バクーニンも唱えたことであるが、ボルシェヴィキは秩序の恢復を急いだせいで、個々のソヴィエトの権力を集中化して、中央政府を作ってしまったと批判したと伝えた⁵³。

このごくぼんやりした意味での無産者の独裁というのは、「ソヴィエトにいっさいの権力を」というロシア革命の最初の合言葉が現わすように、労働者が革命の一切事を決行するというほどの意味だ。が、無産階級の独裁というのはそんなことではないのだ。ただ、そう称する極力中央集権政府の意味だ。そしてソヴィエトはただその「鉄の規

律」の下に隷属する一機関にすぎないのだ⁵⁴。

大杉は当時に流通している「無産階級の独裁」とは、共産党の上からソヴィエトに対する独裁にすぎないとして、革命初期に労働者たちの自発的な「ソヴィエト」に立ち戻ることを要求した。無産階級独裁のロシアにおいて、労働者が自らの手で直接に生産の管理にすらもできないことは、矛盾しているという。大杉のロシア革命批判は、アナーキストやサンジカリストの投獄・処刑に触発された、党派的な観点を含むものではあった。だが、ボルシェヴィキ内の労働者反対派に共鳴を示すなど、革命の初期に掲げた理想、「工場を労働者へ！」「すべての権力をソヴィエトに！」を徹底化することを要求するものであった。

5. 労働運動の「本義」と「理想」の対立がもたらした「決裂」

『労働運動』（第3次）紙上で大きく取り上げたもう一つの問題は、日本労働組合総連合に関連する記事であった。総連合運動は、1922年4月に日本労働総同盟関西同盟会で提唱され、戦後恐慌の中、大きな反響を呼び起こした。さまざまな紆余曲折を経て、1922年9月30日、大阪の天王寺公会堂で「日本労働組合総連合」の創立大会が、60の団体が参加して開かれた。大杉栄、近藤憲二、堺利彦、山川均、荒畑寒村のような社会主義者や鈴木文治、賀川豊彦といった労働運動家のほとんどが出席した。大会は、総連合規約第2条の但書を巡って、自由連合論と中央集権的合同論とに分かれて激しい論争に展開した。論戦の最中、警官によって大会は解散させられ、総連合は挫折した。この創立大会で、結局総連合は決裂になり、総同盟側と反総同盟側の対立はさらに激化し、論戦に止まらず、労働者の間で物理的な衝突も伴う様相を呈した。この両

側の対立に大杉と山川の論争が加わって、アナ・ボル間の対立として語られるが、様相は少し複雑であった。山川はのちに、次のように語る。

無政府主義やサンジカリズムの自由連合主義に反対する分子は、それが社会主義者であろうが共産主義者であろうが、又は単なる組合運動者であろうが、この総連合の問題では均しく総同盟側を支持したのでありますが、彼等を総称して無政府主義者側では『ボル』即ちボルシェヴィキ派と名づけたのでありました。（中略）これと同様に『アナ』の勢力に組入れられていた組合が悉く無政府主義やサンジカリズムの傾向を帯びていたわけではなく、彼等の反総同盟たることが彼等を『アナ』の勢力に投ぜしめていたものでありました⁵⁵。

つまり、総連合を巡る論争は、すでに闘われていたロシア革命に関する論争と重なり合ったために、結果から見ればもっぱらアナとボルの間の理論的な性格が強調される傾向があったことを、山川の証言からも確認できる。大杉はこの問題に、コミンテルンの方針についての情報を提供し、ボルシェヴィキ戦術に注意を促がす。大杉にとって統一戦線論は、労働者たちの連帯の熱望を利用し、共産党がその指導権を掌握しようとする策略であり、歪曲されたロシア革命の世界的な伝播に他ならなかった。

ところが、共産党随一の大馬鹿正直者レオン・トロツキーは、この魂胆をちゃんと白状してくれた。ロシア革命に続いてすぐさま世界革命が成就するだろうという、ロシア共産党の夢は破れた。そこで彼等は、内ではいわゆる資本主義への降伏である新経済政策でもって革命の中休みをしながら、外ではこの協同戦線でもってゆっくりとその夢の実現を謀ろうとしたのだ⁵⁶。

大杉は、総連合の結成に向かって反総同盟側の信友会や正進会の有志が『労働組合全国的総連合について、階級闘争の戦士たる全国組合労働者諸君に

告ぐ』（1922）というパンフレットを刊行すると、これを高く評価し、擁護にした。もちろん、内容においては、大杉が堅持してきた主張と重なり合うものであったが、その内容より、労働者自らの経験や憧憬を以って練り上げた、まだ理論として纏まっては無い、「気分」の表れであると称賛した。いわゆる労働運動の指導者たちが「労働者の間のこうした新しい気分に対してはもっと親切であるべき」⁵⁷だと言って、この自由連合論を擁護した。また、労働者側の過去の経験には、1921年に「労働組合同盟会」から総同盟が突如と脱退した事件があった。

この協同戦線の破壊については、友愛会はすでに前科者なのだ。一昨年の五月一日祭以来、友愛会と東京市内の他の九組合とが、（中略）労働組合同盟を組織した。しかるにその翌年の五月一日祭のすぐ後で、友愛会は突然その脱退を申し出た。その理由は（中略）その東京連合会の幹部等は、組合同盟会の存在によって自然に連合会が無視され、また友愛会の傘下に他のいっさいの組合を包容してみづからその指導的地位に立とうとした野望が空しくなったことを見たのだ。東京における鉄工連合問題に対する友愛会東京鉄工組合の態度、および大阪における労働組合同盟会に対する友愛会大阪連合会の態度も、（中略）みづから進んで協同戦線を破裂させた⁵⁸。

労働組合同盟会は、組合組織の大小にかかわらず、対等平等の組織原則の下で、友愛会（のち総同盟）系の大組合も、他の小組合も、同一の資格と代表権をもつかたちで構成されていた。この組織原則は、サンジカリズム系の組合の自己主張に場を与えるとともに、対立が現われるにつれて、友愛会系の大組合の不満の種になった。直接行動に訴えるサンジカリズムに対して、地道な労働組合主義に立ち帰ることを要求する友愛会の衝突が表面化すると、友愛会本部は傘下の組合の離脱を憂い、内部からの不満を断ち切って同盟会から脱退する⁵⁹。総連合の結成に際して、総同盟側が持ち出した中央集中的な合同論や理

事の数の制限に対し、反総同盟側は前年の経験から疑念を払拭することができなかった⁶⁰。総同盟の内の鈴木文治直系の松岡駒吉や西尾末広ら右派や新興勢力であるボルシェヴィキともに、総同盟によって全国労働組合に対する指揮権を確報しようとする意図は一致し、この両側の間の統一戦線は成立したわけであった⁶¹。反総同盟側が信友会や正進会を中心に自由連合論を主張したのは、中央集権的な合同では小組合である彼等の存在が希薄になり、本部幹部連に対する統制ができない現実的な恐れがあったと考えられる。

この反総同盟側の自由連合主義に対して、山川は資本主義の前時代における職種別労働組合の分立主義に立脚した思想であり、現在における資本主義の発達状態に対応できないと指摘した。そして、中央集権的という言葉は、少数の幹部や指導者が指導権を壟断する官僚主義ではなく、「一般組合員の戦闘の意志と力を敏速に反映することができる、行動の集中」を指すものだと説いた⁶²。そして、合同論と自由連合論を、「産業別の組合＝合同＝階級全体の自主と独立＝階級闘争主義」対「職業別の組合＝連合＝部分部分の自主と独立＝個人主義」として等置する⁶³。資本主義の発達した大工業をそのまま相続する生産機関としても、集中的な組織が必要であると述べる。

これに対して大杉は、労働運動はまず改善、次に破壊、最後に建設という順序で進むものではないとし、改善と破壊と建設を同時に進めるのが正しいという。自分たちが「理想する社会の芽生え」をまず「自身の中に造って行くことがなによりも必要」であり、それが組合の自主自治、自由連合の本当の意味である。自由連合論が指向するのも、産業別組合の編成や、各組合における相対的な自由や自治、行動の一致など、山川が提示したものと変わりがないという。そして、山川がいう集中とは「一般組合員の戦闘意志と力とをもっとも正確にもっとも敏速に反映する」というが、これは自由連合論者の「個人本位団体主義」と少しも変わりはない。山川の言うのは結局、「もっとも正確に」の

一句が抜けて、とにかく「もっとも敏速に」やろうとしているのに他ならない。ここで集中の意味は、敏速を強調するために、「ある問題に力を集中するのではなく、ある人もしくはある人々の手に集中する」ことに代わる。結局、「一般組合員の意志」は問題にせず、その「戦闘力を掌中におきさえすればいい」ことになる。

あくまでも彼等自身の現実の上に立って行こうとするのだ。合同論のある労働者等が誤解するようには、抽象論でも架空論でも夢幻論の空漠な思想中毒でもない。理論としてはまだほとんど成長していない。しかし現実の強い気分の上に、腹の虫の上にしっかりと突っ立て行こうとしているのだ⁶⁴。

この大杉の反論に対し、山川は「盲滅法論—大杉氏に答う」（『改造』1923年2月）で再反論する。自由連合論側の主張に従うと、総連合の執行機構には各組合を直接代表できる理事が必要になり、総連合の活動の機動性は阻害される。現実集中された資本の攻勢に対抗するためには、あえて労働者の「気分」にも背かねばならない。

大杉氏によれば、自由連合は労働者の『気分』である。そして労働階級の戦闘力の集中を目的とする集中的合同主義は、労働者の『気分』に反して居るということである。（中略）労働者の『気分』は、かりに自由連合にあったとしても、組織され集中された資本勢力と抗争する現実の必要と、この必要をありのままに理解する労働階級の堅実な常識とは、必ずこの『気分』に打ち勝つに相違ない。私は労働階級の勝利を確信する⁶⁵。

そして、むしろ大杉が「自由と自治」をドグマとしているのではないかと再反論して、自由連合主義が唱える自由連合論に最も接近した組織は、改良主義的な国際労働組合連合(アムステルダム黄色インターナショナル)であるが、

行動の一単位として機能していないと論駁する。この平行性を走る議論は、大杉がベルリンに開催される予定の国際無政府主義大会に出席するために、すでに1922年12月に日本を脱出してフランスに赴いたため、これで終結してしまった。

総連合の問題で山川と対立して、自由連合論を擁護しながら、大杉が持ち出したのは労働者の「気分」であった。時には「気質」や「感情」や「本能」とも入れ替えることができる、この言葉は、一般的に指す喜怒哀楽や愛憎などといった類のものではなく、自分で自分の生活や運命を決定したいという「自主自治」に集約することができよう。大杉は論争の前年に書いた「社会的理想論」で、労働者が革命の道具にならないで、その主人になるためには、「建設しようとする将来社会についての、はっきりした観念を持たなければならない」というクロボトキンの意見に同意しなかった。労働者が「はっきりした観念」を持っているにしても、受け売りの観念ではその革命を取り仕切ることができず、新社会の建設も人任せにするにすぎないと見込んだ。労働者に重要なのは、自分の生を司ろうとする「しっかりした自主心」であると大杉は説く。

それに労働者は、そんな観念とか理想とかの見本を理屈の上で比較研究する前に、そのせっぱつまった生活の、少々でもの改善を謀らなければならない。それが労働者の目下の急務だ。そして労働者は、この急務に努力しつつある間に、資本家と労働者との関係、政府と資本家もしくは労働者との関係についての、その地位を漸次自覚してきた。今日の社会制度の根本的誤謬にまでも気づき出した。また労働条件改善のためのその努力のなかに、それよりももっと強くその心中に湧いてくる、自由の精神に目覚めてきた⁶⁶。

労働者は日常の階級闘争を繰り広げる間に、法律や権力などの制約にぶつかって、資本や国家、労働者自身との関係を悟り、社会組織の変革に迫ってい

く。このような闘争と努力がないところに、労働者自身を取り戻すことはできない。大杉は、その過程の最初の動機を「自主自治」の感情、疎外を克服しようとする「意志」に求めたのである。だからと言って、社会主義の理論や思想がまったく不要であることではない。だが、あくまでも労働者たち自らが獲得した社会的知識や自由の精神をベースに、諸種の社会的観念や理想を練り上げなければならない。総連合を巡る際に、信友会や正進会の有志の『労働組合全国的総連合について、階級闘争の戦士たる全国組合労働者諸君に告ぐ』——山川はこれを大杉の代筆として疑ったが⁶⁷——を称賛したのも、この理由からわかる。

しかし、この「自主自治」の感情を表して闘争に挑む労働者は、労働者階級の中の少数者である。多数の労働者も内的な憧憬や「自主自治」に対する渴望がないわけではない。そのために、少数者はまず観念および理想の類似、利害関係の縁を以って労働組合を組織して闘争に挑む。同じ労働者である少数者の活動は刺激になり、不活発な多数者を動揺させる。労働組合はこのような刺激と反応の拡散的な連鎖の舞台になる。

労働組合は、それ自身が労働者の自主自治的能力のますます充実して行こうとする表現であるとともに、外に対してその能力のますます拡大して行こうとする機関であり、そして同時にまた、かくして労働者が自ら創り出して行こうとする将来社会の一萌芽でなければならない⁶⁸。

労働組合は、労働者が自らの能力を確信させる場ですなり、直接に関与することで実感を得て労働者自身を変える場所であった。革命は遠いところにあるものではなく、すぐこの場から起こるのであった。このような大杉の見解は、変革運動において被抑圧者である労働者の自律的な参加が何よりも重要であっ

た。ロシア革命批判や総連合の問題に関する一貫する、大杉の観点はこれであった。10月革命以降のロシアの現状は、革命そのものを技術的なものとして扱い、労働者を革命の道具化にしたと考えたに違いない。

6. おわりに

ロシア革命と総連盟を巡って展開した、大杉と山川の論争によって両者は和解不可能な平行線を辿ったと見える。この論争をアナキズムやマルクス主義のイデオロギー論争という枠から考えるなら、どの理論がその正しさを証明しているのかという価値判断に走り、その評価もやはり歩み寄ることが不可能な平行線を走ることになってしまう。また、彼等をイデオロギーの具現体として接近すると、彼等に対する評価基準もそれぞれのイデオロギーにどれほど充実であったかという貧困な結論に辿ってしまう。

1920年代初め、日本の労働運動の主流をなしていた労資協調的な労働組合を急進的な方向へ導いたのは、経済構造の変化やロシア革命といった国際的環境と共に、大杉栄を中心とするグループの実践的な宣伝活動が功をなした。このような大杉の実践的な宣伝活動は同時代の人々の証言によってわかるように、大杉栄の思想的核心が労働運動、とりわけ労働者を直接的に社会変革の「主体」化させることであった。

ところが、労働組合に基づく急進的な社会変革の活動を構想した人は、大杉栄だけではなかった。明治以来の革命的社会主義という立場を堅持してきた他の社会主義者たちも、その思想的根拠はそれぞれ違いがあるとしても、やはり革命的な伝統を労働者たちの直接行動においていた。このような同一な運動の方向性は協同闘争の機運を高めるメカニズムとして作用したとみられる。しかし、このような運動の方向性は協同闘争のさほど長く続かず、決裂を向か

う。その契機はロシア革命に対する観点の違いであつたと言えよう。山川と大杉の間に行ったロシア革命に対する論争は、ロシア共産党のアナーキストやサンジカリストに対する迫害から出発し、クロンシュタット蜂起や労働者反対派を巡る問題提議から導き出された革命の「本義」、革命が向かうべき「理想」との間の葛藤ともいえよう。

このような認識の違いは「労働組合全国総連合」の結成にも悪影響を直接もたらす契機になったと思われる。1922年にあつた総連盟の創立大会における決裂は、表面的には「自由連合論」対「合同論」といった組織論の対立に起因しているとみられる。そして、この「決裂」が以後、理想主義的な立場のアナーキスト大杉栄という評価につながっていく。ところが、総連合問題に対する大杉の態度は、かえって現実主義ではなかったのだろうか。執拗にまで労働者の自発的な参加を主張した大杉栄の自由連合論は、労働運動の「本義」を始終一貫し、労働という現実の中で労働者が主体になって革命を成し遂げようとした大杉の思想的な実践をそのままに反映している。それに反して、中央集権的な合同論を唱えた山川の方は、確実な革命のプロセスに辿ってその「理想」に辿りつこうとしたともいえよう。

大杉が、労働者に大きな関心を寄せたのは、近代資本主義社会における矛盾に最も露出された存在であつたためである。ただ、それだけではなく、その矛盾に対して立ち向かって、自ら組織し闘争する姿を見せていたためであつた。しかし、大杉にとって労働組合が絶対的な存在ではなかつた⁶⁹。被抑圧者自らがその生活を開拓して行こうとし、組織して闘争にでるのであれば、これを支持する準備ができていた。革命初期のソヴィエトに対する大杉の支持もこれを反証する。

大杉が「自由連合論」を支持したのも、これが労働者の経験や憧憬に基づいて、彼等の言語を以って表現された点であつた。ここから垣間見ることがで

きるのは、大杉栄のインテリゲンチヤ像である。彼自身を含むインテリゲンチヤは、このような労働者の中、先進的な分子を励まし、その「気分」を理論にまで誘導して行くことであった。これは、実践の中で彼が見せた、労働者たちや他の同志に対する態度と全く一致する方法でもあった。知識人や職業的革命家による他律的で、代理的な闘争によって勝ち取った革命は、その終わりが決して革命の完成ではなく破滅になることを予言したと思われる。同志の一部が「アナーキスト」だけの組織で闘争を主張した時⁷⁰に、決してこれに同意しなかったことはこのためであった。

「破壊と建設の同時進行」というのは、ただ体制についてのことではなかった。労働者が古い慣習や制度の中、闘争の内に自分の能力に確信を得ていくこともやはり「破壊と建設の同時進行」と言えよう。大杉が「労働運動は労働者の自己獲得運動、自主自治的生活獲得運動である」といったのはまさしくこのことを指すと思う。

(注 釈)

- ¹ 荒畑寒村『寒村自伝』上巻、岩波書店、1975、380～381頁。
- ² たとえ「米騒動」後、1919年4月に創刊された雑誌『改造』が当初の芳しくなかった売れ行きを、同年7月号「労働問題社会主義批判号」で一気に評判を得て軌道に乗り、「資本主義征服号」（1919年8月）、「労働組合同盟罷工研究号」（9月、発売禁止）、「階級闘争号」（12月）を引き続けて世に出すほど、世間は社会主義や社会改造に関心を集めていた。成田龍一『大正デモクラシー』岩波新書、2007、74頁。
- ³ 1924年(469組合)から1925年(457組合)にかけて少し減少が見られるが、組合員数は前年度の228,278名から254,262名へとむしろ増加した。労働省大臣官房労働統計調査部編『統計からみたわが国の労働争議』労働省大臣官房労働統計調査部、1951、61頁参照。
- ⁴ 絲屋寿夫『日本の社会主義運動史』、法政大学出版局、1979、263頁
- ⁵ 荒畑寒村、前掲書、376頁
- ⁶ 会の名称は、刊行会版全集（第3巻）の「大杉栄年表」が「労働運動座談会」としているのに従って、従来この名が用いられてきた。しかし、官憲の記録（特別要視察人情勢第一班第八）には1918年2月から「労働運動研究会」を開いたとの記載があり、他方、和田久太郎、久板卯之助発行の『労働新聞』第2号の告知にも記載が確認されるため、これに従う。大杉豊『日録・大杉栄伝』社会評論社、2009、224～225頁参照。
- ⁷ 大杉栄「日本における最近の労働者と社会主義運動」『大杉栄全集』第6巻、現代思潮社、1964、72～73頁。（草稿、1920年末、『自由の先駆』1924年に所収）
- ⁸ 秋山清『日本の反逆思想』現代思潮社、1960、76頁
- ⁹ 岡本宏『日本社会主義政党論史序説』、法律文化社、1968、106～107頁
- ¹⁰ 秋山清「大震災と大杉栄の回想」『労働運動史研究』第37号、日本評論新社、1963
- ¹¹ 大杉栄「僕等の自負」『大杉栄全集』第2巻、115～116頁（『文明批評』第2巻、1918年1月）
- ¹² 大杉栄「盲の手引する盲—吉野博士の民主主義墮落論」『大杉栄全集』第2巻、224頁、『文明批評』1918年2月）

-
- ¹³ 松田道雄「解説」『現代日本思想大系16 アナーキズム』筑摩書房、1963、47～48頁
- ¹⁴ 辻井民之助「過去一年間に於ける京都労働運動の進化」『日本労働新聞』1921年1月16日
- ¹⁵ 大杉栄「徹底社会政策」『大杉栄全集』第6巻、現代思潮社、1964、20頁
- ¹⁶ 水沼辰夫「大杉と日本の労働運動」『労働運動』第4次第2号、1924年3月
- ¹⁷ 和田久太郎「騒擾中の足尾」(二)『労働運動』第1次第3号1920年1月
- ¹⁸ 浅原健三『溶鉱炉の火は消えたり』新建社、1930、159～164頁
- ¹⁹ 大杉栄「新獄中記」『大杉栄全集』第14巻、98頁（『漫文漫画』、アルス、1922）
- ²⁰ 和田久太郎「集会の記」『労働運動』第2次第4号、1921年2月10日
- ²¹ 大杉栄「新秩序の創造 ―評論の評論―」『大杉栄全集』第6巻、48～54頁（『労働運動』1920年6月）
- ²² 賀川豊彦「可愛い男大杉栄」『改造』1923年10月。これは 森戸事件に際して、言論の自由擁護の演説会の途中、賀川は演説もらいに入った大杉に、自分の演説途中に譲った。演壇に立った大杉が、聴衆と会話や討論による演説会を試みる様子を横で見た賀川の反応である。
- ²³ 鈴木文治『労働運動二十年』、一元社、1931、284頁
- ²⁴ 岡本潤『詩人の運命』、立風書房、1975、234頁
- ²⁵ 高津正道『旗を守りて』、笠原書店、1986、271頁
- ²⁶ 近藤憲二『私の見た日本アナキズム運動史』、麦社、1972、78頁
- ²⁷ 大杉栄「労働運動の精神」『大杉栄全集』第6巻、3～4頁（『労働運動』1919年10月）
- ²⁸ 大杉栄「知識階級に与う」『大杉栄全集』第6巻、27頁（『労働運動』1920年1月）
- ²⁹ 山川均「マルクスとマルクス主義」『山川均全集』第2巻、勁草書房、1968、224頁（『中央公論』1919年7月4日）
- ³⁰ 山川均「議会運動とパーリヤメンタリズム」『山川均全集』第3巻、141頁（『社会主義』1921年3月）
- ³¹ 山川均「フランス労働組合運動の転機——右傾か左傾か」『山川均全集』第3巻、54頁（『解放』1920年8月）

-
- ³² とりわけ、山川はカナダの経済学者J. A. Esteyの「Revolutionary Syndicalism」を『社会主義研究』（1920年5月）に翻訳し、このような立場を詳しく紹介した。
- ³³ 山川均「革命家としてのレーニンとトロツキー」『山川均全集』第3巻、56頁（『改造』1920年9月）
- ³⁴ もちろん、山川を含むボル派は、日本共産党の創立を前後し、労働組合と政党の役割を区分するようになるが、「無産階級の方角転換」からも見られるように、無産政党の戦術上の役割はこの時期にはまだあいまいで、労働組合を「準政党」と扱う傾向が強かった。
- ³⁵ 大杉栄「組合運動と革命運動」『大杉栄全集』第6巻、99～100頁（『労働運動』1920年6月）
- ³⁶ 大杉栄「日本脱出記」『大杉栄全集』第12巻、18～19頁（『改造』1923年7月～9月）
- ³⁷ 「朝鮮人近況概要」大正11年1月参照。（朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』第1巻、三一書房、1975）
- ³⁸ 大杉栄「日本脱出記」『大杉栄全集』第12巻、23～28頁
- ³⁹ 吉田一、高尾平兵衛、宮島資夫、和田軌一郎、久板卯之助らは、月刊『労働者』を発行して別に陳を張る。
- ⁴⁰ 大杉栄「日本の運命」『大杉栄全集』第6巻、104頁（『労働運動』2次1号、1921年1月）
- ⁴¹ 近藤栄蔵「コミンテルンの密使」『世界評論』4(4)、世界評論社、1949年4月
- ⁴² 大杉栄「労働運動と労働文学」『大杉栄全集』第5巻、70～71頁（『新潮』1921年10月）
- ⁴³ 大杉栄「ロシア革命論」『大杉栄全集』第7巻、85～86頁（『労働運動』3次7号～10号、1922年10月～1923年1月）
- ⁴⁴ 大杉栄「ロシアにおける無政府主義者」『大杉栄全集』第7巻、19頁（『労働運動』3次2号、1922年2月）
- ⁴⁵ 同上、86頁
- ⁴⁶ 山川均「『労働反対』の話」『山川均全集』第5巻、44～45頁（『労働新聞』1922年12月20日）
- ⁴⁷ 山川均「社会主義と労働」『山川均全集』第4巻、33～36頁（『社会主義研究』

1921年10月)

- ⁴⁸ 山川均「ソヴィエト政治の特質とその批判——プロレタリアン・ディクテイターシップとデモクラシー」『山川均全集』第2巻、398（『社会主義研究』1920年6月）
- ⁴⁹ 山川は、フランス労働総同盟（CGT）に関しては第1次世界大戦後に労資協調主義的立場をとった総同盟幹部連の主張が「政治否定論」によるものとして批判した（「フランス労働組合運動の転機——右傾か左傾か」（『解放』1920年8月）や「労働組合の進化と職分」（『解放』1922年2月 を参照）。また、イタリアの工場占拠運動の失敗をイタリア労働総同盟（CGL）の経済主義とイタリア社会党の議会主義の隔離からきたものとして紹介し（「イタリアの工場占領事件——マゾニス事件」『全集』3巻、129～140頁参照）、
- ⁵⁰ 山川均「1921年の労農ロシア」『山川均全集』第4巻、73頁（『解放』1921年11月）
- ⁵¹ 大杉栄「なぜ進行中の革命を擁護しないのか」『大杉栄全集』第7巻、72頁（『労働運動』3次7号、1922年9月）
- ⁵² 大杉はアナーキズムやサンジカリズムを含む広義の社会主義を、狭義の意味での第2インターナショナルのマルクス主義と区別する。大杉栄「欧州の大乱と社会主義者の態度」（『第三帝国』7号、1914年8月）を参照。
- ⁵³ 山川均「大杉君と最後に会った時」『山川均全集』第5巻、276頁
- ⁵⁴ 大杉栄「独裁と革命 無政府主義革命に就いての一問答」『大杉栄全集』第7巻、65頁（『労働運動』3次8号、1922年10月）
- ⁵⁵ 山川均「東調布手記」『山川均全集』第4巻、458～459頁
- ⁵⁶ 大杉栄「組合帝国主義 総連合問題批判」『大杉栄全集』第6巻、128頁（『労働運動』3次9号、1922年11月）
- ⁵⁷ 大杉栄「労働運動の理想主義的現実主義」『大杉栄全集』第6巻、144頁（『改造』1922年12月）
- ⁵⁸ 大杉栄「組合帝国主義 総連合問題批判」、前掲書、132頁
- ⁵⁹ 山川も、友愛会内部の様子や、友愛会の労働組合同盟会の脱退のために、同盟会に残った組合が更に急進化を進めたことを書き残している。（山川均「『量』から『質』に転じた組合運動」『太陽』1921年7月）なお、脱退後の1921年7月5日の大会で、友愛会内部から「知識階級的指導の排斥」の声が立ち上

がる。（山川均「日本の組合運動史の一頁——友愛会東京連合会大会所見——」『改造』1921年7月）

- ⁶⁰ 水沼辰夫「『総連合』の決裂とその前後」『社会科学』第4巻1号、1928年2月
- ⁶¹ 大沢正道『大杉栄研究』法政大学出版局、1971、321～322頁
- ⁶² 山川均「総連合の決裂」『山川均全集』第4巻、406頁（『労働組合組織論』収録、1924年）
- ⁶³ 山川均「集中的組織と分散的組織」『山川均全集』第4巻、415～416頁（『前衛』1922年11月）
- ⁶⁴ 大杉栄「労働運動の理想主義的現実主義」『大杉栄全集』第6巻、150頁（『改造』1922年12月）
- ⁶⁵ 山川均「盲滅法論—大杉氏に答う」『山川均全集』第5巻、103頁（『改造』1923年2月）
- ⁶⁶ 大杉栄「社会的理想論」『大杉栄全集』第6巻、45頁（『労働運動』1次6号、1920年6月）
- ⁶⁷ 山川均「盲滅法論—大杉氏に答う」前掲書、102頁
- ⁶⁸ 大杉栄「労働運動の精神」『大杉栄全集』第6巻、6頁（『労働運動』1次1号、1919年10月）
- ⁶⁹ 大杉が「組合運動と革命運動」（『労働運動』1920年6月）で、労働組合の組織論に傾いている荒畑寒村を批判している個所でも確認できる。労働組合という組織もあくまでも蓋然的なものであると語っている。
- ⁷⁰ 伊藤野枝宛の1923年3月28日の手紙や（大杉栄研究編『大杉栄書簡集』海燕書房、1974、262頁）と、同年8月20日に開かれた「自由連合同盟」の準備会の様子からもこれを察することができる。（大杉豊『日録・大杉栄伝』社会評論社、2009、472～473頁）

【第四章、参考文献】

浅原健三『溶鉱炉の火は消えたり』新建社、1930

秋山清『日本の反逆思想』現代思潮社、1960

——「大震災と大杉栄の回想」『労働運動史研究』第37号、日本評論新社、1963

-
- 荒畑寒村『寒村自伝』上巻、岩波書店、1975
- 絲屋寿夫『日本の社会主義運動史』、法政大学出版局、1979
- 大沢正道『大杉栄研究』法政大学出版局、1971
- 大杉豊『日録・大杉栄伝』社会評論社、2009
- 大杉栄研究編『大杉栄書簡集』海燕書房、1974
- 大杉栄「労働運動の理想主義的現実主義」『大杉栄全集』第6巻（『改造』1922年12月）
- _____「労働運動の精神」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』1次1号、1919年10月）
- _____「労働運動と労働文学」『大杉栄全集』第5巻、70～71頁（『新潮』1921年10月）
- _____「盲の手引する盲一吉野博士の民主主義墮落論」『大杉栄全集』第2巻（『文明批評』1918年2月）
- _____「僕等の自負」『大杉栄全集』第2巻（『文明批評』第2巻、1918年1月）
- _____「日本脱出記」『大杉栄全集』第12巻（『改造』1923年7月～9）
- _____「日本の運命」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』2次1号、1921年1）
- _____「日本における最近の労働者と社会主義運動」『大杉栄全集』第6巻、現代思潮社、1964（草稿、1920年末、『自由の先駆』1924年に所収）
- _____「独裁と革命 無政府主義革命に就いての一問答」『大杉栄全集』第7巻（『労働運動』3次8号、1922年10月）
- _____「徹底社会政策」『大杉栄全集』第6巻、現代思潮社、1964
- _____「知識階級に与う」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』1920年1月）
- _____「組合帝国主義 総連合問題批判」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』3次9号、1922年11月）
- _____「組合運動と革命運動」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』1920年6月）
- _____「新秩序の創造 一評論の評論一」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』1920年6月）
- _____「新獄中記」『大杉栄全集』第14巻（『漫文漫画』、アルス、1922）
- _____「社会的理想論」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』1次6号、1920年6月）
- _____「欧州の大乱と社会主義者の態度」（『第三帝国』7号、1914年8月）
- _____「ロシア革命論」『大杉栄全集』第7巻（『労働運動』3次7号～10号、1922年10月～1923年1月）
- _____「ロシアにおける無政府主義者」『大杉栄全集』第7巻（『労働運動』3次2号、1922年2月）

-
- _____ 「なぜ進行中の革命を擁護しないのか」 『大杉栄全集』第7巻（『労働運動』3次7号、1922年9月）
- _____ 「組合運動と革命運動」（『労働運動』1920年6月）
- 岡本潤『詩人の運命』、立風書房、1975
- 岡本宏『日本社会主義政党論史序説』、法律文化社、1968
- 鈴木文治『労働運動二十年』、一元社
- 賀川豊彦「可愛い男大杉栄」『改造』1923年10月
- 近藤憲二『私の見た日本アナキズム運動史』、麦社、1972
- 近藤栄蔵「コミンテルンの密使」『世界評論』4(4)、世界評論社、1949年4月
- 高津正道『旗を守りて』、笠原書店、1986
- 辻井民之助「過去一年間に於ける京都労働運動の進化」『日本労働新聞』1921年1月16日
- 成田龍一『大正デモクラシー』岩波新書、2007
- 朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』第1巻、三一書房、1975
- 松田道雄「解説」『現代日本思想大系16 アナーキズム』筑摩書房、1963
- 水沼辰夫「大杉と日本の労働運動」『労働運動』第4次第2号、1924年3月
- _____ 「『総連合』の決裂とその前後」『社会科学』第4巻1号、1928年2月
- 労働省大臣官房労働統計調査部編『統計からみたわが国の労働争議』労働省大臣官房労働統計調査部、1951
- 山川均「盲滅法論—大杉氏に答う」『山川均全集』第5巻（『改造』1923年2月）
- _____ 「日本の組合運動史の一頁——友愛会東京連合会大会所見——」『改造』1921年7月
- _____ 「東調布手記」『山川均全集』第4巻
- _____ 「大杉君と最後に会った時」『山川均全集』第5巻
- _____ 「総連合の決裂」『山川均全集』第4巻（『労働組合組織論』収録、1924年）
- _____ 「集中的組織と分散的組織」『山川均全集』第4巻（『前衛』1922年11月）
- _____ 「社会主義と労働」『山川均全集』第4巻（『社会主義研究』1921年10月）
- _____ 「議会運動とパーリャメンタリズム」『山川均全集』第3巻（『社会主義』1921年3月）
- _____ 「革命家としてのレーニンとトロツキー」『山川均全集』第3巻（『改造』1920年9月）
- _____ 「マルクスとマルクス主義」『山川均全集』第2巻、勁草書房、1968（『中央公論』1919年7月4日）

-
- _____ 「フランス労働組合運動の転機——右傾か左傾か」 『山川均全集』 第3巻
（『解放』 1920年8月）
- _____ 「ソヴィエト政治の特質とその批判——プロレタリアン・ディクテーターシ
ップとデモクラシー」 『山川均全集』 第2巻（『社会主義研究』 1920年6
月）
- _____ 「『労働反対』の話」 『山川均全集』 第5巻（『労働新聞』 1922年12月20
日）
- _____ 「『量』から『質』に転じた組合運動」 『太陽』 1921年7月
- _____ 「1921年の労農ロシア」 『山川均全集』 第4巻（『解放』 1921年11月）
- _____ 「労働組合の進化と職分」 『解放』 1922年2月
- _____ 「イタリアの工場占領事件——マゾニス事件」 『全集』 3巻
- 和田久太郎 「騒擾中の足尾」（二）『労働運動』 第1次第3号1920年1月
- _____ 「集会の記」 『労働運動』 第2次第4号、1921年2月10日

結 論

I. 本論文のまとめ

本論文は、大杉栄を革命的サンジカリストとして考察しようと試みた。とりわけ、大杉栄が求めた革命戦略を分析し、その革新的な理念として「生の創造」という思想および、その背景となる世界観を照らし出した。

以下、各章で論じた内容をまとめて結論とし、今後の研究課題について述べることにする。

第一章では、幸徳秋水の代表作である『社会主義神髓』や週刊『平民新聞』を中心に展開された社会主義に関する言説を再検討し、幸徳秋水が唱えた社会主義は、社会進化論的な性格が強いことは確かだが、その内実は従来考えられていたものとはちがうことを考察した。

明治社会主義の評価の主流を占めているのは、大正後期のマルクス主義の圧倒的な奔流の前史としての評価である。だが、当時はマルクス主義の原典は『共産党宣言』『空想から科学へ』など数種しか紹介されず、主な理論的学習も英米の解説書に頼って行われるなど、欠点の多い前史と扱われてき

ゼネラルストライキ

た。さらに、政治運動を排撃して総同盟罷工を戦略とする直接行動論などのアナーキズムの香りが濃厚になる明治後期からの社会主義運動については、急進分子の小児病でしかないとされた。そのような視角は、大杉栄が強

く影響を受けた幸徳秋水の評価にも及んだ。

先行研究では、幸徳が唯物史観を社会進化論と混同したため、マルクス主義の歴史的意義を十分に感得できず、やがてアナキズムに運動の突破口を求めたという評価がなされてきた。その原因は、英米の概説書を主な参考資料として社会主義を理解したことに求められてきた。

当時の社会主義に対する認識は、社会進化の原動力である「競争」を取り除く「平等」の思想であり、そのため社会進化論を自然法則に反する理論として論じる傾向が存在していた。幸徳はそれに対して、「競争」という概念の再考を促して、人類は「腕力の競争」→「智謀や技術の競争」→「名誉の競争」→「道德の競争」というような「競争」の様子を変えてきたと述べ、真の「競争」である「道德の競争」ができる舞台を提供できるのは社会主義社会であると論じ、社会主義社会になっても社会は停滞するどころか、永久の進歩が約束されると説いた。この倫理性に富んだ説明は、彼の儒学的素養が導いたものとは思いますが、社会主義社会における進歩の原動力を「競争」に求める点など、アメリカの社会主義者、リチャード・イリーに大きな影響を受けたことが分かる。

また、幸徳秋水は進化の原動力として「競争」だけではなく、「協同」もとりあげた。進化と関連して「協同」を説いたのはイギリスの生物学者、トマス・ハクスリーであったが、彼は動物にも愛と恐れがあるといい、「協同」の本能に認め、人間はそれによって、「競争」に対峙するよう努力すべきと説いた。幸徳の場合は、やや異なり、「協同」をあくまでも自然法則、進化の原理の中で把握している。それにはエンゲルスを経由したマルクス主義の理解が裏付けになった。剰余価値論やプロレタリア階級の歴史的役割に対する理解不足など、幸徳にも欠陥はあろうが、幸徳が史的唯物論を社会進化論として理解する主な原因は、当時における第二インターナショナルの社会主義解

積に影響を受けたためである。つまり、それは当時の国際的な社会主義の流れにそったものだったのである。

確かに、幸徳の社会主義は連続的な漸進主義の性格を持ち、自然進化と社会進化を同一線上で考えるなど、社会進化論的な性格がつよいが、その原因は、儒学の「天理」による受け止めとともに、イリーからの影響、そして当時の第二インターの影響を受けたものであった。そのようにして、「革命」も「進化的過程」の中でとらえるなど、自然進化と社会の進化を一元的に考える「科学的社会主義」が出来上がった。この立場は、1906年以後、彼がアナキズムに傾倒したといわれる後にも堅持されたことを確認した。

第二章では、大杉栄の進化論に基づいた社会主義の解釈と、その変化過程を検討し、大杉栄の思想の特徴を確かめ、大杉が大正期を通して展開して行く彼独自の革命的サンジカリズムの根拠を明らかにした。

「大逆事件」の傷跡がいまだ鮮明であった1912年10月、雑誌『近代思想』の創刊は早くも「冬の時代」の終わりを告げるラッパであり、大杉栄という新人評論家の誕生を知らせでもあった。そして、大杉栄における社会主義も進化論と密接に結びついて展開されたことが分かる。幸徳秋水の影響の下で社会主義者として成長し始めた大杉栄であったが、ワイスマンやド・フリースの新たな進化論の発見に着目し、幸徳の漸進的な革命論を越えて急進的革命論に移行していたのだ。とくに、大杉栄はワイスマンの生殖質連続説とクロボトキンの相互扶助論とを混合し、「相互扶助の大感情」が生殖質に備わり、進化の動因として作用すると説いた。これによって大杉栄は、個体を超えて滔々と流れる「生命」の流れのイメージをつかみ、ド・フリースの突然変異説とともにベルクソンに接近しやすくなったのである。それは、大正年間に「生」のそのものの活動に重点を置く大杉栄の思想的歩みを早くも予告

するものであった。

新たな進化論の知識は、大杉栄をベルクソンの『創造的進化』に着目した「生」と「本能」に基調をおく論議に向かわせた。大杉栄は「生」そのものを動作する力として活動に直結させている。その「生」はひとつの固定された空間に居座らず、「拡充」を開始する。個人の生は、それを束縛する一切の規範——国家をはじめ、抽象的な権威になった既存の道德、宗教、芸術、そして人間性などの普遍概念——を超えて己を「拡充」し、「充実」を求める。このことばはフランスの生の哲学の先駆者、ジャン=マリー・ギュイヨーが『社会学より見たる芸術』(1889)で「芸術的感情はもともとその本質において社会的なものであり、個人的生命を更に大いなる普遍的生命と結合せしめて、之を拡大する」と説いていたのを借りたものである。大杉は「生の道德」（『近代思想』1913年10月）で、ベルクソンはギュイヨーの影響を受けていると語っている。

そして、その個々人の「生の拡充」をするために大杉栄が注目したのは、「衝動的行為」、すなわち自分の内部にある「本能」の命ずるに従う行動こそが大なる創造を生むという公式である。つまり、多様な経験を積んだり、勤勉に知識を増やしたり、知性と理性を磨き上げたりすることは問題ではない。まず、本能的・衝動的な行為が重要だというのである。しかし、大杉栄がいう「本能」は、逸脱的な、快楽に耽る、統制不可能な本能でなく、このように真の「生」の意味をつかみ得るという意味での「本能」であった。また、現代人においては動物の本能がそうであるように赴くままの本能ではなく、「理性の洗練」を受けた本能であった。

そのような「生」や「本能」に基調をおく大杉の評論活動は、文学論、芸術論をはじめ、近代思想史、労働運動史、哲学、倫理学、社会学、人類学、

生物学などの多方面に及んで展開されていく。また、日本の労働運動における革命的サンジカリズムの主唱者として大杉は、労働運動論に「生」や「本能」という概念を取り入れ、従来の社会主義論とは異なる展開を見せる。それには、ワイスマンやド・フリースの新たな進化論、ベルクソンの『創造的進化』が大いに影響があった。

大杉栄にとって労働運動は「生」が拡張を求め、充実を求め、力として発現するものであった。特定の目標を想定しない、さまざまな偶然性を含んだ道のりであり、その道のり自体が人格向上であった。しかし、関東大震災の混乱に乗じて軍部が大杉栄を殺害したとき、その影響力は決定的に失われ、労働運動は「生」を基調とする構想から「歴史法則」や「組織」の方へ移っていくこととなる。とはいえ、未来ではなく「現在」から、法則ではなく「生」から可能性を汲み上げようとする大杉栄の、このような構想は、大正生命主義の渦のなかで、そして様々な組合主義が模索されていた時期に、もっともラディカルな思想として色彩を放ったと言えよう。

この過程で、大杉栄は、幸徳が戦術として導入した「直接行動論」に、その理論的な根拠を確立することができた。また、歴史唯物論に立脚するマルクス主義に対する批判とともに、学者の理論としてのアナーキズムとも一定の距離を置くようになる。このようにして、大杉は、労働者たちの自律的な労働運動の参加に多大な意味を与える、異彩を放つ社会主義思想を展開するようになったのである。

第三章は、大杉栄が唱えた革命戦略を労働運動や革命戦略にかかわる文章を用いて検討し、大杉栄が抱いた社会主義社会への展望を、その「政治的な理想」論から考察した。さらに、彼が取った姿勢を当時における社会主義運動の主流との関係において考察し、無政府主義という党派性を越えた分析を

試みた。その結果、大杉栄の議会制民主主義や「科学的社会主義」に対する批判の論拠を確かめることができた。さらに、「自治の連合制度」の新たな政治的領域の可能性をはらむ、そして自己獲得運動の実践に基づく「新社会主義」としてのサンジカリズム革命運動の展望を確認できた。

先行研究で、大杉栄を「反政治」を唱えた人物として裁断する傾向に対して、その根底になっている「政治」の概念を検討することにより、反論を試みた。既存の研究では「政治」を議会や行政府の権力をめぐる闘争に限定づけた視角をとるために、大杉栄の論理はその枠組におさまらない異質な論理とされてきたと思われる。しかし、今日では権力のネットワークは社会の全構造の中に張り巡らされているという視点が提出され、権力現象をもはや国家権力をめぐるものだけに限定して考える人はいない。大杉が唱えるサンジカリズムはその権力の発生機関として最も有力な産業現場における「権力闘争」をその基底に据えていた。この点において彼の視座は一定の「政治的」な立場を取っていた。ここでいう「政治的」とは、彼が資本家権力に挑戦したという意味のみならず、彼が抱いた闘争の本質的な部分が権力闘争であったという点である。彼が行った権力闘争は議会を中心とする、いわゆる「政治の場」ではなく、「労働者の作業場」という空間で展開されたのである。議会や行政を中心とする権力よりもっと重要な権力に着目した人々に対して、前者の権力を等閑視したとし、反政治的というレテルを張るのはいささか問題があると思われる。大杉が「自己獲得運動」や「人格運動」と呼んだこの方法を制度的な面で積極的に評価するなら「産業自治論」や「労働者自主管理」といった形が想定される。大杉を、それらの先駆者として認めてよいのではないか。

また、大杉栄は議会制民主主義における「代議制」に問題点を見出して、

被選挙権者と選挙権者との間隔がより密着できる「代議制」を提案した。彼は現在までも続いている、地域に基づく包括的な代議制の効用に疑いを持ち、当代の制限選挙のみならず普通選挙が実施されたのちに構成される議会でさえも、はたして民主的で国民の意志を代弁できる機構たり得るのか、と議会制の政治民主主義に対して不信感をもっていた。その代案として特定の目的に関連して自分たちの見解を代表しうる代表が選出される機能的な参加民主主義を志向したと見られる。なお、様々な目的による多様な会議や協会が網状に結び付いた構造は中央集権的な権力機構とは相容れないものであった。

このような様々な機能的な機構を考える中で、大杉栄は新たな社会組織の根幹を生産機構に関わる労働組合に求めたのである。労働組合は労働者たちが自らの能力を伸長させる場として期待された。また労働組合を生産における有機的な単位、未来の産業組織の核心として見込んだ。労働組合に闘争機構のみならず、新しい体制内で機能できる新制度としての意味を持たせていた。

大杉栄はこのように経済的領域である労働組合を重視したが、経済決定論的な立場ではなかった。むしろ、その決定論的な側面ゆえに既存の「科学的社会主義」に反発を抱いたのである。社会主義への移行は外部に存在する自然の法則の作動に任せた歴史の単純な結果としては期待しなかった。彼にとって社会主義への移行は、労働者は実行の中で社会の全構造を理解し、諸種の社会的傾向と内的な憧憬を合致させる自発的な意志による運動によるものでなければならなかった。その意味で、サンジカリズム運動は新時代の建設とともに「自己獲得運動」であった。

最後に、第四章では、労働運動高揚期に、革命的サンジカリズムが実際に

労働運動を結合して行く様相を、大杉栄の実践活動に探った。その過程で、大杉栄が堅持していた思想的な特徴を再照明できた。

1920年代初め、日本の労働運動の主流は労資協調的な労働組合であった。だが、経済構造の変化やロシア革命の消息、大杉栄グループの宣伝活動は、これらの組合を大きく揺さぶった。「労働運動研究会」の開催、『労働新聞』(第1次)の配布、各種宣伝活動が次第にその効果を表わしたのであった。

だが、労働組合に基づく急進的な社会変革の活動を構想した人は、大杉栄だけではなかった。明治以来の革命的社会主義という立場を堅持してきた他の社会主義者たちは、思想的違いがあるとしても、やはり革命的な伝統を労働者たちの直接行動に求めた。この類似的な運動の方向性は協同闘争の機運を高めるメカニズムとして作用したとみられる。

しかし、ロシア革命に対する観点の違いから亀裂が生じ、「労働組合全国総連合」は決裂し、協同闘争の破たんを確実なものにした。表面的には「自由連合論」対「合同論」という組織論の対立がその理由だったが、労働運動における「主体」と、「目標」の問題が絡んでいた。

大杉が「自由連合論」を支持したのも、これが労働者の経験や憧憬に基づいて、彼等の言語を以って表現された点であった。彼は自身を含むインテリゲンチヤの役割を、労働者の中から現われる先進分子を励まし、その「気分」を理論にまで誘導するものとした。大杉は実践の中でこれを行っていた。知識人や職業的革命家による他律的、代理的な闘争による革命に、常に疑いを払わなかった。同志の一部が「アナーキスト」だけの組織で闘争を主張した時に、決してこれに同意しなかったのもこの理由からであった。

「破壊と建設の同時進行」というのは、ただ体制についてのことばかりではなかった。労働者が古い慣習や制度の中、闘争の内に自分の能力に確信を

得ていくこともやはり「破壊と建設の同時進行」と言えよう。大杉が「労働運動は労働者の自己獲得運動、自主自治的生活獲得運動である」といったのはまさしくこのことを指すと思う。

以上、本論文においては、大杉栄が唱えた「生の創造」としての革命的サンジカリズムの革命展望を確認した。幸徳秋水が説いた自然科学、とりわけ進化論と社会主義とを結合する理論は、大杉栄の論理構造にも影響を与えた。しかし、二〇世紀初頭の新たな進化論の登場や、それに触発されたベルクソンの『創造的進化』にヒントを得た大杉栄は、決定論的「科学的社会主義」と決別にいたったことを新たに証明することができた。

これによって大杉栄の研究および日本の初期社会主義研究に新たな視座を提供し、より多様な研究の広がりを触発することを願う。

Ⅱ．今後の課題

本研究では、社会主義者、労働運動家としての大杉栄の特徴を、「革命的サンジカリスト」という観点から十分に検討できたと思う。ところが、それに力を注いだため、思想家としての大杉栄の全貌を明らかにするという当初の課題を実現するところまではいたらなかった。この点は、本研究が持つ限界として認めなければならない。

大杉が活動を始めた頃の日本は、日露戦争の体験、重化学工業の急速な発展のなかで「生命」の危機感が蔓延し、「生命」の用語が溢れ出た。生産力第一主義の物質文明批判、生存競争原理に基づく利益追求の自由が強調される「近代」を克服し、普遍性を求めようとする方法を探った時期であった。

この流れの中で、大杉栄は、本来の「生」や「自我」のあり方を追求し、内向して求道的になることなく、社会や文芸界など外部の変革に向けた。したがって、思想家・大杉という全体像を造るためには、西洋哲学や文芸理論など彼を特徴づける要素の起原や相互関係を明確にし、再構成する必要があると思う。このような研究を第一に今後の課題として取り扱いたい。

第二は、国際的な共感が大杉栄の理論と活動に寄せられていたことを具体的に明らかにすることである。大杉栄の影響は日本国内に止まったのではなかった。大杉が如何に国際的な社会主義運動の連帯を求めたかは良く知られていないが、中国や朝鮮半島の人々が日本人である大杉栄の早すぎた死を悼んだことは他に類を見ないほどである。「亜州和親会」の経験以来、絶えずアジア連帯の模索を繰り返したことによって、彼はアジアのアナーキズム運動の象徴になったと考えることができる。だが、その評価は大杉の行動によるものだけではない。各国の政治や経済的状況の違いを超え、また国民国家主義の枠を超えて、彼の思想に中国や朝鮮の人々が共鳴する要素を含んでいたからのことである。彼らをそれぞれの国状の差異を超えて大杉の思想に接近させた知的背景を明らかにし、20世紀の初期における東アジアの知的空間を再検討する作業は、筆者のライフ・ワークとして取り組んでいきたい。

【補 論】

朝鮮の社会主義者における大杉栄

— 1920年代初期の朝鮮社会主義の知的受容 —

1. はじめに

本稿は、1920年代初期における朝鮮社会主義の知的な受容様態を、大杉栄というフィルターを通して、究明することをその目的とする。朝鮮社会主義における、アナーキズムやサンジカリズムの影響については多く語られてきた。しかし、具体的な内容においては、クロボトキンやシュティルナーのような西洋アナーキストの著書の紹介や言及が確認できるという程度にとどまっている。本稿では、大杉栄の西洋アナーキズムの媒体としての役割のみならず、彼の思想が朝鮮社会主義者たちの世界認識にもその影響を与えたことを証明したい。これは、今まで朝鮮社会主義の思想、組織の地形図から空白のままになってきた「革命的サンジカリスト・大杉栄」という地点を確かめる作業でもある。

時期的には、朝鮮社会主義運動の転換期ともいえる1920年代初期をその対象とする。1919年に3・1運動が立ち上がると、海外で活動してきた社会主義たちの多くが朝鮮に戻り、朝鮮社会主義は大きな転換期に迎える。海外から戻った社会主義者たちは日本や中国から学んできた社会主義思想を、新聞や雑誌などの大衆メディアを通して、多様な形で精力的に流布させた。

これらの新聞・雑誌のうち、本稿では、朝鮮労働共済会の機関誌『共済』と、社会主義者の手による最初の大衆向けの時事総合雑誌『新生活』を分析材料とする。

1920年に、朝鮮では初めて労働問題を研究し、労働運動を指向する全国的な労働団体である朝鮮労働共済会が結成された。『共済』はこの朝鮮労働共済会の機関誌である。『共済』に現われる論調は、著者によって多様であったが、労働に対して新しい意味を与えることで、当時における他の社会グループに大きな刺激を与えたと言われる¹。

また、『新生活』は「新生活を提唱し、自由思想の鼓吹や平民文化の建設を主眼とし、新思想を紹介して民衆文芸を研究して、一般社会現状を批評し、吾人の所感を披露すると同時に要求と熱望と憧憬に反響板になる」ことを趣旨に、1922年3月11日に創刊された雑誌で、1号から5号までは旬刊、第6号からは月刊で刊行された²。朝鮮における最初の旬刊雑誌で、新生活運動を啓蒙して宣伝することを目的にしていた。内容においては、家庭生活や、女性問題や礼節問題、それに政治や思想などの多方面に及んでいる。ところが、ロシア革命5周年を記念して発行した記念号に載せられた記事が問題になり、1923年11月22日に発行禁止の処分を受けてしまう³。これにより、朝鮮における最初の社会主義雑誌『新生活』は廃刊になった。

だが、この事件がきっかけになって、社会主義者たちがむしろ多岐にわたる左派雑誌を発行するようになる。『朝鮮之光』をはじめとして『新階段』、『批判』、『思想運動』、『理論闘争』、『労働運動』などが、その代表的なものである。当時、社会主義者たちが発行していた左派雑誌は、その時代において知識人たちに社会主義思想を広める核心的な知識源だったと思われる。

ここでは、左派雑誌の起源ともいえる、『共済』や『新生活』に見られる、大杉栄の受容関係を具体的に探ることにする。

2. 1920年前後、朝鮮における日本社会主義の収容様相

まず、1920年を前後に、植民地朝鮮で展開された日本社会主義思想の受容を組織の面から探って、どのような流れで『共済』や『新生活』が刊行されるようになったのか確認してみよう。

1915年の春、金綴株、張徳株、尹顯振などの在日留学生の7人は「裂指同盟」を行って独立運動に従事することを決意した。以来、中国人留学生と接触し、反帝民族解放運動を共にすることに合意して、翌年の春に新亜同盟党を組織した。新亜同盟党は秘密結社で朝鮮人、中国人、台湾人などの植民地や半植民地の弱小民族出身の留学生たちがメインになった反帝国主義民族解放運動の団体であった。朝鮮人留学生たちの理念的な指向は多様であったが、その構成員の内、金綴株や張徳株などの「金綴株グループ」はすでに自分たちの思想的ベースを社会主義に置いていた。

「金綴株グループ」は幸徳秋水の著作を通して社会主義思想を受容した。幸徳秋水の『社会主義神髓』は同時代の日本の読者に止まらず、彼等にも大きな影響を与えたのである。本論第1章で確認したように、幸徳の『社会主義神髓』は、マルクス・エンゲルスの著作に英米の多様な社会主義的潮流が合作したともいえる著作であり、革命的な傾向と労資協調的な傾向を併せ持っていると言えよう。「金綴株グループ」もこの傾向を持っていたと思われる。

金綴株は友愛会の機関誌『労働及産業』を通して、同時期に他の在日留学生たちが注目しなかった労働問題について関心を持つようになった。『労働及産業』は相互扶助や労資協調的な立場に基づいて労働問題に接近していた。金綴株にもこの影響が及んでいたが、労働問題を労働者の個人の問題ではなく、構造的な問題として認識したことや、植民地朝鮮における具体的な労働者の現実

に関心を示すなど、労働問題そのものに無関心であった他の在日留学生たちとは異なっていた。

張徳株は、現代の資本主義社会は個人至上主義や放任主義に基づいていると見做し、現代社会組織と経済制度は不合理で克服の対象であると考えた。このような論理は、社会主義思想を受容する基盤になった。

金綴株グループが受容した社会主義思想は、その内容において多様な社会主義思想が錯綜した状態であった。そして社会主義を実現する方法として社会革命よりは、社会改良に近い思想であった。だが、彼らは自分たちを社会主義者と規定し、資本主義社会や労働問題に対する初歩的な批判も持っていた。これが金綴株グループの1910年代の中頃に日本で学んだ社会主義思想の特徴である。

3・1運動を契機に、社会主義運動は一大変動を遂げる。日本の朝鮮における統治基調が武断統治から文化政治に代わり、この変化に乗じて新たに登場した各種メディアに、社会主義知識が本格的に紹介され出した。1910年代を通して、中国や日本で活動していた社会主義者たちは、この雰囲気の中で朝鮮内にその活動の場を移した。合法的な労働団体や青年団体が結成され、その団体は内部に秘密結社を置く場合も多く、1920年代の初期における社会主義運動をリードして行く。イム・キョンシクの研究によると、この頃の朝鮮内部には五つの秘密組織があった。京城では、ソウル共産団体（1919年10月成立）、朝鮮共産党（1920年3月15日成立）、社会革命党（1920年6月改称）、朝鮮労働共済会内部のマルクス主義小組（1920年5月）、1920年6月に青年会連合会期成会を發起した小グループがそれである⁴。

まず、朝鮮労働共済会の内部で構成した「マルクス主義小組」には、鄭泰信の主導下で金若水、南相協、趙誠惇、鄭雲海などが参加し、このグループが機関紙『共済』1、2号の編集人として活動しながら、マルクス主義と現実認識を

共有した。とりわけ鄭泰信は、1914年7月中旬に大阪に移して、大杉栄とも交流していた横田宗次郎などのアナーキストと交際した。10月3日からは横田と同居しながら、アナーキズムに関する新聞や雑誌を耽読したという⁵。金若水は日本や満洲を経て1918年に中国の南京にいたが、3.1運動の後に帰国して朝鮮労働共済会に参加し、鄭泰信と知り合った。一方、「小組」には所属しなかったが、彼等と緊密に交流し、『共済』に寄稿した社会主義者には、卞熙琿と金明植がいる。卞熙琿は慶応大学で学び、1918年2月に朝鮮人留学生学友会の幹部になり、吉野作造や福田狂二が率いた黎明会にも加盟した。金明植は1915年、早稲田大学に入学し、同じく朝鮮人留学生学友会の幹部になって『學之光』に寄稿し、1916年春には金鑠洙らの新亜同盟党に参加した。この頃、新亜同盟党は大杉栄や吉野作造などと交流し⁶、思想的影響を受けたという。

この新亜同盟党は拠点を京城に移し、社会革命党と改称し、金明植、張徳秀、金鑠洙などが活動した。また、彼らは1921年5月に上海の高麗共産党と交流し、上海派高麗共産党の国内組織員として活動した。とりわけ、金明植は1921年から『我聲』、『新生活』を中心に活動を展開した。また、青年連合会や『東亜日報』および新生活社の一部を結んで、上海派の国内拠点を形成した。

一方、1921年の春、朝鮮労働共済会で活動していた鄭泰信、金若水は再び日本に渡った。二人は、日本で堺利彦、大杉栄らと交わって思想団体の建設を図った。そうして、1921年11月29日に在日韓国人の最初の思想団体である「黒燾会」が結成される。黒燾会の会員の中には金若水、朴烈など苦学生同友会（1920年に東京で創立）の会員が多く含まれた。金山(本名・張志樂)は、当時東京にいた8百名の苦学生が全朝鮮留学生たちを支配していたし、その主なる急進勢力は無政府主義であったと回顧している⁷。曹奉岩も留学生の時、1921年からの大杉栄を中心としたアナーキズムの全盛期に出あい、自身も最も興味を持っていた理論であったと述懐している⁸。大正11年の内務省の「朝鮮人近況概要」

も、留学生ないし労働者の思想的な傾向が左傾化していると把握し、しかも、その社会主義がいわゆる「無政府主義」「アナーキズム」に接近していることを極左冒険主義的傾向として取り上げたり、もっぱら中国上海での義烈団の活動の影響として説明したりする傾向が見える⁹。その中で「黒燾会」は1922年に起きた日本のアナ・ボル対立を受けて、朴烈を中心とするいわゆるアナーキズム派と金若水を中心とするマルクス派に亀裂を生じ、1922年9月末には完全に分裂した。以後、朴烈グループは、『太い鮮人』や『現社会』を創刊して宣伝活動に携わるが、関東大震災の際に起きたいわゆる「朴烈事件」によって、しばらくの間に休眠状態になる。一方、金若水グループは『大衆時報』を創刊して宣伝活動に努めた。

ソウル共産団体は朝鮮労働共済会の編集部を通して『共済』の発行に関与した。その後、イルクーツク派高麗共産党の国内ビューローとして活動する。

朝鮮共産党は主に出版活動を通じた新思想の宣伝に力を入れた。『共済』や『我聲』のような合法メディアに自分たちの意見を積極的に掲載し、また秘密裏に檄文やパンフレットを発行して配布した。とりわけ1921年9月には、国内で最初に『共産党宣言』を翻訳して秘密に発行したのも、朝鮮共産党であった。マルクス主義小組は、朝鮮労働共済会の内に7人が結成したマルクス主義のサークルであった。『共済』の編輯部委を拠点に『共済』1号や2号の編輯と発行を主導したが、1921年春、本拠地を日本に移し、以後は日本で活動した。

新亜同盟党は社会革命党に改称して、階級打破や私有制度打破、そして無産階級専制政治を書いた「宣言書」を発表した。社会革命党の理論家たちは『共済』や『我聲』に、マルクス主義に関する理論や現実問題についての見解を掲載した。この時期に、活発に活動したのは俞鎮熙や尹滋庚、そして金明植であった。その後、社会革命党は上海派高麗共産党の国内拠点としてその位相を変える。

以上、1920年代初期に至るまでの朝鮮の社会主義者たちの動向を、組織的な面から簡略に整理してみた。

3. 朝鮮における最初の労働雑誌と社会主義雑誌と大杉栄

(1) 『共済』

朝鮮における労働団体の出発は、1920年2月に朝鮮労働問題研究会であった。この研究会に参加した人々は知識人であって、労働者ではなかった。そのため、彼らは労働組合を造ろうとは思わず、まだ時期早々だと考えていた。ところが、3月になると、社会改造の機運が朝鮮を覆い始めると、雰囲気は一変して労働運動の組織化に踏み出した。それで、朝鮮労働共済会は誕生したが、近代的な意味での労働者たちの相互扶助団体でありながら、労働運動や労働組合が存在しないところに、組織されたという特異性を持つ。また、その方向性を巡って異なる意見が存在し、『共済』にもそれが反映された。朝鮮労働共済会の幹部たちや『共済』編集陣は、主に労資協調主義的な立場であったが、寄稿家たちの中には階級闘争主義を唱える者も多かった。両者は対立的な立場ではあったが、しかし、同じく労働の神聖さを強調する内容のものであった。『共済』の言説分析は様々な角度からできるが、この論文では大杉栄というフィルターを用いて検討してみる。

まず、鄭泰信（又影）の「活眼」（『共済』第2号）に注目しよう。

衝動的行為即ち本能的行為には重大な価値があるが、本能に偉大な創造力を意味することである。私は思う、衝動的行為・本能的行為に近日において聡明であるほど、優柔不断な青年たちには一種の解毒剤になるであろう。これはいわゆるベルクソンの創造的進化の原動力になり、現代社会に沈滞腐敗した、一切の頹廢的気風を清新させる重要な

要素になるだろう¹⁰。

引用した「活眼」（『共済』2号、1920年10月）は鄭泰信が、大杉の「本能と創造」（『近代思想』1巻2号、1912年10月）の内容をほとんど踏襲したものである。ただし、大杉の議論はイプセン『人形の家』について坪内逍遙が書いた「所謂新しい女」に対する批評であったが、鄭泰信はそれを一般論として書いている。また、鄭泰信は「民衆文化の提唱」（『共済』7号）において、文化を「生命」の「内的衝動」が要求する「外的表現」として説明する。そして現社会の文化が支配階級の空虚な信念によって歪められた文化で「人間生命の自由衝動を黙殺」しているため、その克服を民衆文化の提唱に求める。鄭泰信は自説の根拠を進化哲学に求め、見事に自説を述べた。彼は、1914年から日本のアナーキストと交流し、読書・討論を重ねていたので、大杉の文脈も熟知していたと思う。

申伯雨は「階級的社会の史的考察」（『共済』8号）で、階級制度の発生について論じている。現在の階級制度も歴史的なもので、過渡的な現象にすぎないが、ある一貫性を持つと説明する。前号にも「唯物史観概要」を載せ、「『政治経済学批判』序言」の一部を紹介しながら、マルクス主義の説明を試みた。ところが、「階級的社会の史的考察」において彼が用いたのは、歴史的唯物論ではなく、大杉の「征服の事実」（『労働運動』1次4号、1920年2月）であった。人類の歴史を衝突する二つの階級があるとし、その決め方は「武力や智力」つまり「力」によって説明する。また、時代の推移と共に、統治技術も発達する。最初をあくまでも、武力の統治から、中間階級の成長や、法律による統治へと変遷する構造は、総督府の武断政治から文化政治に代わったばかりの、植民地の情勢からは読者に訴えやすかったかも知れない。

兪鎮熙（無我）はクロポトキンの「青年に訴ふ」を7・8号（1921年4月、6

月)に載せたが、底本は確かに大杉栄の訳本であろう。「青年に訴ふ」は1920年代前後にアナ・ボルを問わず、日本の左翼的な知識人の間では広く読まれていた¹¹。上海派高麗共産党の国内オルグの俞鎮熙がこれを翻訳したのも、日本での現象と類似であったと思われる。大杉は『労働運動』(2次1号～13号、1921年1月～6月)に「青年に訴ふ」を再掲載していた。なお、『共済』(7号)には「C・G・Tと労働運動の終局」など、『労働運動』(1次、2次)との関連性を思わせる記事も数個あるので、『共済』の一部の寄稿家たちはこれを読んでいたのではないかと推測できよう。

以上、大杉と直接関係のある記事を取り上げて分析を試みた。

(2) 『新生活』

『新生活』は、1号から9号に至るまで資本主義を批判し、社会主義思想を扱ひ、植民地的な状況下で階級闘争の役割のみならず、植民地的な状況における社会的・経済的構造との関連性を明らかにしようとした。朝鮮社会主義における思想の受容関係を究明するのに、重要なメディアである。その中に、大杉栄との関連性を具体的に探ってみよう。

李星泰は、山川均訳『動物界の道徳』(1908)と大杉栄訳「青年に訴ふ」を重訳¹²し、また大杉著「クロポトキン総序」(『改造』1920年5月～7月)を抜粋する形で、クロポトキンの紹介に力をいれた¹³。そして、「現代文化の方向」(『新生活』9号、1922年9月)では、「征服の事実」に現われる歴史観を援用しながら、次のように書いた。

文化が多数な人類を除外してしまう時、その多数者が生命のない死骸のような生活で無意識に服従するならば、いっほどでもないが、人間が人間である以上、当然な人間的要求が起こることを如何なる力でも

防げない。それも一二個人の個性的領域に止まるのなら、さほど偉大で強烈な力にはなれないだろうけど、個性の自覚は個性の自我性の自覚と同時に、その社会の自覚になることは当然な発露である¹⁴。

「征服の事実」から発達してきた、現下の文化は自然に、多くの人々を疎外化する仕組みを整えてきた。しかし、人間である以上、その多数者の内から自分を取り戻そうとする人間的要求は湧き上るはずである。また、その要求は団結によって、個人の自覚が社会的な自覚に繋がる方向性を見せるという。

クロボトキンとかかわる記事としては、飢雁の「知識階級の失敗」（『新生活』7号、1922年7月）がある。アレクサンドル・ベルクマンが、モスクワ近郊にいたクロボトキンを訪問した際に書いた記事で、ロシア革命の失敗の要因を民衆の力を信頼できなかったロシア共産党に求めている。飢雁は両者の会話の一部を、大杉栄「クロボトキンを想う」（『改造』7月号、1922年7月）から抜粋・翻訳している。

『新生活』8号の巻頭論文である、鄭栢「人間所有と叛逆」（『新生活』8号、1922年8月）では、大杉の「征服の事実」を簡略にまとめて次のように書いた。

歴史は複雑だ。しかし、単純にその複雑さを一貫するのは、征服と被征服の事実がこれである。古今を通して、一切の社会の歴史は実に征服の内容になり、その服色だけ変幻したものに過ぎない。（中略）生は叛逆に因って新芽を発するのである¹⁵。

そして『新生活』9号で、鄭栢は「唯一者とその中心思想」という記事を載せ、マックス・シュティルナーの「唯一者とその所有」について、紹介している。この底本になったのは、大杉栄「唯一者 マクス・スティルナー論」（『近代思想』1巻3号、1912年12月）である。パク・ゾンリン氏は、このシュ

ティルナーの紹介を、「不合理で権威主義的な現存の資本主義体制を根本的に批判できる機制」として認識していたと語るが、シュティルナーは下述する廉尚燮の場合のように、社会との没交渉の徹底した個人主義としても解釈可能である。

筆名のRSTは同じ『新生活』9号で「鎖工場」を載せている。大杉栄「鎖工場」（『近代思想』1巻12号、1913年9月）の翻訳であるが、やはり原著者は記名されていない。「鎖工場」は資本主義下の当代を描いた寓話小説で、資本主義批判のみならず、いわゆる「科学的社会主義」と言われる第2インターナショナルのマルクス主義批判も込められていた。

大杉との影響関係は不確かではあるが、廉尚燮の「至上善の為に」も大杉の持論を思わせる個所がある。廉尚燮は1912から1920年までに日本で過ごした。

没我的奴隸思想、機械的因襲道德の牢乎な愠内から、旧い觀念の鉄鎖をうまく断ち切って、赤裸々な人間界に向かい、一大飛躍を成したのが、この時のノーラであり、解放の戦野に邁進する正義の叛逆者が、この時のノーラであった。

果然不絶に伸張して行く靈魂、弾力と活力と生氣が膨溢な靈魂の生命は「叛逆」にあった。一切の旧に対し、叛旗を翻し、一切の新に向かって、邁進するところに、靈魂の美しい光彩が輝き、生命の永遠に新しい洗礼があるのだ。

自己革命というのは、陳腐な自己に対して叛逆し、新たな自我を、拡充し、完成することで、このような意味における叛逆は、すなわち至上善である¹⁶。（引用者一訳）

イプセンの『人形の家』を用いた廉尚燮の論稿は、10年前の大杉栄の論を読むような印象を与える。「近代文明の精神的な一大収穫は自我の発見」であるとし、自己犠牲も恐れず、非妥協の勇気を以って、自己革命の大事業を完成することを注文する。ところが、その矛先はもっぱら、家族制度に向けられ、その

因習や慣例を罵る。また、「自我の完成、自我の実現」が「至上善」であり、自分の「靈魂の生長欲と拡充欲」を満たしうるなら、「それが善」であるとする。ここに現われる廉尚燮の主張は、鮮やかなレトリックの裏腹に、社会と没交渉的な面が強い。シュティルナー流の個人主義の謳歌とも言えよう¹⁷。

4. おわりに

以上、『共済』と『新生活』に見られる、大杉栄の痕跡を探り、その意義を考察した。それでは、本論のまとめを日本の労働運動や社会主義運動の状況を照らし合わせて考えてみよう。

『共済』が刊行された時期の日本の労働運動界の状況を簡略に触れると、まず、1920年5月の原内閣の総辞職を前後して高まった普通選挙運動は、労働者たちにも反響を呼んだ。ところが、衆議院総選挙で失敗、挫折すると、普通選挙運動は急速に退潮した。その代わりに、革命的サンジカリズムが急速に台頭した。なお、1921年1月、友愛会の幹事・棚橋小虎の「労働組合へ帰れ！」（『労働』1月）は、戦闘的だった労働者たちに大きな反発を呼び起こし、「知識人指導者排撃」運動が立ち上がった。『共済』紙上でみられる、急進的でサンジカリズム的な傾向や、知識人問題が取り上げられている理由もここから察することができよう。

そして、1920年5月から翌年の6月にかけては、日本では協同闘争の機運が高まった時期である。関東では「労働組合同盟会」が、関西では「関西労働組合連合会」が結成され、また社会主義同盟が1920年12月に発足され、アナ・ボル協同戦線も順調に進むかのように見えた。『共済』紙上にもその痕跡を窺うことができ、大杉栄の文章を用いた理由も、党派的な性格よりは、広い意味における社会主義理解や、労働運動関連の記事として扱われたに違いない。

『共済』に見られる大杉の影響は、クロボトキンの紹介者という位相に止まっていなかった。大杉が進化論や哲学や文芸理論を用いて練り上げた、彼独自の革命的サンジカリズムの痕跡を確認することができた。なお、「征服の事実」という歴史や現状認識は、マルクスの唯物史観より、広く流布していることを、『共済』だけではなく『新生会』紙上でも確認することができた。これは、大杉の論旨の分かりやすさによるところもあるが、植民地朝鮮といった特殊性が働いたのではないかと推測する。

これまで、初期社会主義における日朝交流関係は、人的な交流の場に限られるか、アナーキズムやマルクス主義といった、思想系列ごとに受容関係を考察するに止まってきたと思われる。ところが、実際の交流の場は、もっと複雑で、これらのフレームに当てはまらないことを本研究では確認できた。

大杉栄が朝鮮社会主義に与えた影響は、西洋の理論の紹介に止まらなかった。彼が日本といった空間の中で練り上げた思想や革命戦略が、党派にかかわらず、ある場合は踏襲を、またある場合は変形を遂げて、植民地朝鮮といった空間に展開して行ったことを明らかにしえたと思う。

(注 釈)

¹ 권희영, 「조선노동공제회와 「共済」」 『정신문화연구』 16권2호(통권51호), 정신문화연구원, 1993

² 김정권, 「〈신생활〉에 대한 검토」 『한국기독교 역사연구소 소식』 25호, 한국

기독교 역사연구소, 1996

- ³ 김준엽·김창순, 『한국공산주의 운동사』 2, 청계연구소, 1989. 36~37頁
- ⁴ 임경석, 「서울과 공산주의 그룹의 형성」 『역사와 현실』 28号, 1998. 32~33頁
- ⁵ 이호룡, 『한국의 아나키즘』, 지식산업사, 2001. 115頁
- ⁶ 최병구, 『1920년대 프로문학의 형성과정과 ‘미적공통성’에 관한 연구』, 성균관대학교대학원 박사학위논문, 2013. 30頁.
- また、吉野作造と朝鮮留学生たちの交流については、이경훈 「『學之光』의 매체적 특성과 日本의 영향1」 (『대동문화연구』, 2004) が詳しい。
- ⁷ 김산, 님 웨일즈, 『아리랑』, 동녘, 1984, 3~77頁
- ⁸ 조봉암 「내가 걸어온 길」 『조봉암과 진보당』, 한길사, 1991. 336~338頁
- ⁹ 岩村登志雄 「在日朝鮮人と日本労働者階級」 『アジア・アフリカ講座』 第三卷、勁草書房、1965、50頁
- ¹⁰ 鄭泰信 「活眼」 『共濟』 第2号、1920年2月
- ¹¹ 梅田俊英 「社会思想社の一側面（上）—田中九一と東大新人会OBの動向」 大原社会問題研究所雑誌No. 479、1998年10月
- ¹² 李星泰 「社会生活の進化」 (『新生活』 2号、1922年3月) と 「適者の生存」 (『新生活』 3号、1922年3月) の二つの記事がある。
- ¹³ 李星泰 「クロボトキン学説研究」 『新生活』 7号、1922年7月
- ¹⁴ 李星泰 「現代文化の方向」 『新生活』 9号、1922年3月
- ¹⁵ 鄭栢 「人間所有と叛逆」 『新生活』 8号、1922年8月
- ¹⁶ 廉尚燮 「至上善の為に」 『新生活』 7号、1922年7月
- ¹⁷ この時期に、廉尚燮の個人主義的アナーキズムへの傾倒については、최인숙 「엄상섭 문학에 나타난 ‘노라’ 와 그 의미」 (『한국학연구』 제25집, 인하대학교 한국학 연구소, 2011) が詳しい。

【補論、参考文献】

권희영, 「조선노동공제회와 「共濟」」 『정신문화연구』 16권2호(통권51호), 정

-
- 신문화연구원, 1993
- 김민환, 「일제하 좌파 잡지의 사회주의 논설 내용 분석」 『한국언론학보』 49권 1호, 2005
- 김산 역, 님 웨일즈, 『아리랑』, 동녘, 1984
- 김준엽·김창순, 『한국공산주의 운동사』 2, 청계연구소, 1989
- 박용규, 「일제하 좌파 언론인에 관한 연구」, 한국언론학회 가을 정기 학술발표회 논문집, 1994
- 박종린, 「김윤식社會葬 찬반논의와 사회주의 세력의 재편」 『역사와 현실』, 2003
- _____, 『일제하 사회주의 사상의 수용에 관한 연구』, 연세대학교 박사학위논문, 2006
- 이경훈, 「『學之光』의 매체적 특성과 日本의 영향1」 『대동문화연구』, 2004
- 李星泰, 「クロボトキン學說研究」 『新生活』 7호, 1922년 7월
- _____, 「社会生活の進化」 『新生活』 2호, 1922년 3월
- _____, 「適者の生存」 『新生活』 3호, 1922년 3월
- _____, 「現代文化の方向」 『新生活』 9호, 1922년 3월
- 이태훈, 「1920년대 초 신지식인층의 민주주의론과 그 성격」 『역사와 현실』 67호, 2008
- 이호룡, 『한국의 아나키즘』, 지식산업사, 2001
- 임경석, 「서울과 공산주의 그룹의 형성」 『역사와 현실』 28호, 1998
- 廉尚燮, 「至上善の為に」 『新生活』 7호, 1922년 7월
- 장복성, 『조선공산당 파쟁사』, 돌베개, 1983
- 장신, 「1924년 동아일보 개혁운동과 언론계의 재편」 『역사비평』, 2006
- 전명혁, 『1920년대 한국사회주의 운동연구』, 선인, 2006
- 전상숙, 「박열의 무정부주의와 민족의식」 『동양정치사상사』, 2007
- 鄭栢, 「人間所有と叛逆」 『新生活』 8호, 1922년 8월
- 鄭泰信, 「活眼」 『共濟』 第2号, 1920년 2월
- 조봉암, 「내가 걸어온 길」 『조봉암과 진보당』, 한길사, 1991
- 조세현, 「동아시아 3국에서 크로포트킨 사상의 수용」 『중국사연구』, 중국사학회, 2005
- 최병구, 『1920년대 프로문학의 형성과정과 ‘미적공통성’에 관한 연구』, 성균관대학교대학원 박사학위논문, 2013
- 최인숙, 「염상섭 문학에 나타난 ‘노라’와 그 의미」 『한국학연구』 제25집,

인하대학교 한국학 연구소, 2011

梅田俊英、「社会思想社の一側面（上）―田中九一と東大新人会OBの動向」大原
社会問題研究所雑誌No. 479、1998年10月

岩村登志雄、「在日朝鮮人と日本労働者階級」『アジア・アフリカ講座』第三卷、
勁草書房、1965

【初出一覧】

本論文は、下記のような学術発表を踏まえて作成した論文を纏めて成ったものである。ただし、本論文の構成によりそれぞれ修正し、加筆を行った。

・論文初出一覧（＊は韓国学術登載誌）

序 論 書下ろし

第一章 「幸徳秋水の社会主義に関する考察—進化論との関係を中心に」

＊『日本語文学』Vol. 44No. 2009。日本語文学会刊行。

第二章 「大杉栄における「生」と「本能」」

＊『日本語文学』Vol. 40No. 2009。韓国日本語文学会刊行。

第三章 a 「「方向転換論」は何だったのか：一九二〇年代の日本社会主義に於ける試論」2011年度韓国日本語文学会国際連合学術発表大会
論文集。韓国日本語文学会刊行。

b 「大杉栄の「政治的な理想」論」

＊『日本学報』Vol. 97No. 2013。韓国日本学会刊行。

第四章 「大正期のアナ・ボル論争に対する再考：ロシア革命と日本労働組合総連
合建設に関する観点を中心に」2013年上半期、韓国日本思想学会定期
学術研究会論文集。韓国日本思想学会刊行。

【参考文献】

＊発表順による配列を原則とする。但し、同一な筆者による書物は、筆者別に集めて発表順に配列する。

【大杉栄・資料】

- 「欧州社会党運動の大勢」『大杉栄全集』第1巻（『日刊平民新聞』17～22号、1907年2月6日～2月12日）
- 「本能と創造」『近代思想』、1912年10月号
- 「生の拡充」『近代思想』、1913年7月号
- 「鎖工場」『大杉栄全集』第2巻（『近代思想』1巻12号、1913年9月）
- 「生の創造」『大杉栄全集』第2巻（『近代思想』2巻4号、1914年1月）
- 「主観的歴史論 ピョートル・ラヴロフ論」『大杉栄全集』第3巻（『近代思想』2巻7号、1914年4月）
- 「労働者の自覚」『大杉栄全集』第6巻（月刊『平民新聞』1号、1914年10月）
- 「賭博本能論」『近代思想』、1914年7月号
- 「正気の狂人」『近代思想』1914年5月
- 「欧州の大乱と社会主義者の態度」（『第三帝国』7号、1914年8月）
- 「生の創造」『近代思想』、1915年5月
- 「茅原華山を笑う」『時事新報』1915年3月
- 「新事実の獲得」『大杉栄全集』第2巻（『新潮』1915年1月）
- 「個人主義者と政治運動」『大杉栄全集』第6巻（『早稲田文学』1915年4月）
- 「現代社会観 中村孤月君に答える」『大杉栄全集』第3巻（『第三帝国』1915年8月）
- 「2種の個人的自由 福田博士の新社会論を読む」『近代思想』1915年10月
- 「労働運動と個人主義—労働者の個人的社会的創造力—」『大杉栄全集』第6巻（『近代思想』3巻3号、1915年12月）

- 「僕等の自負」『大杉栄全集』第2巻（『文明批評』第2巻、1918年1月）
- 「盲の手引する盲—吉野博士の民主主義墮落論」『大杉栄全集』第2巻（『文明批評』1918年2月）
- 「労働運動の精神」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』1919年10月）
- 「労働運動理想家 賀川豊彦論（続）」（『労働運動』1920年1月）
- 「知識階級に与う」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』1920年1月）
- 「いわゆる評論家に対する僕等の態度 —評論の評論—」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』1920年4月）
- 「社会的理想論」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』1920年6月）
- 「組合運動と革命運動」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』1920年6月）
- 「新秩序の創造 —評論の評論—」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』1920年6月）
- 「日本の運命」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』2次1号、1921年1月）
- 「労働運動と労働文学」『大杉栄全集』第5巻（『新潮』1921年10月）
- 「新獄中記」『大杉栄全集』第14巻（『漫文漫画』、アルス、1922）
- 「ロシアにおける無政府主義者」『大杉栄全集』第7巻（『労働運動』3次2号、1922年2月）
- 「なぜ進行中の革命を擁護しないのか」『大杉栄全集』第7巻（『労働運動』3次7号、1922年9月）
- 「独裁と革命 無政府主義革命に就いての一問答」『大杉栄全集』第7巻（『労働運動』3次8号、1922年10月）
- 「ロシア革命論」『大杉栄全集』第7巻（『労働運動』3次7号～10号、1922年10月～1923年1月）
- 「組合帝国主義 総連合問題批判」『大杉栄全集』第6巻（『労働運動』3次9号、1922年11月）
- 「労働運動の理想主義的現実主義」『大杉栄全集』第6巻（『改造』1922年12月）
- 「日本脱出記」『大杉栄全集』第12巻（『改造』1923年7月～9月）
- 「日本における最近の労働者と社会主義運動」『大杉栄全集』第6巻、現代思潮社、1964（草稿、1920年末、『自由の先駆』1924年に所収）
- 「ベルグソンとソレル ベ氏の心理学とソ氏の社会学」『大杉栄全集』第6巻（『早稲田文学』1926年1月）
- 「無政府主義の手段は果たして非科学的乎」『思想善導の唯1手段は何か？』、文明協会、1931

「個人主義者と政治運動」『大杉栄全集』第1巻、現代思潮社、1963

「自叙伝」『大杉栄全集』第3巻、世界文庫、1963

「クロボトキン総序」『大杉栄全集』第4巻、現代思潮社、1964

「続獄中記」『大杉栄全集』第13巻、現代思潮社、1964

「徹底社会政策」『大杉栄全集』第6巻、現代思潮社、1964

【幸徳秋水・資料】

「宣言」週刊『平民新聞』創刊号、1903、11月15日（明治文献資料刊行会発行
『明治社会主義資料集（別巻3・4）』）

「読者と記者」週刊『平民新聞』7号、1903、12月21日

「予は如何にして社会主義者となりし乎」週刊『平民新聞』10号、1904、1月17
日

「孟子の国際観」週刊『平民新聞』11号、1904、1月24日

「読者と記者」週刊『平民新聞』13号、1904、2月7日

「読者と記者」週刊『平民新聞』217号、1904、5月15日

「ダーキンとマルクス」週刊『平民新聞』47号、1904、10月2日

「人類と生存競争」週刊『平民新聞』12号、1904、11月31日

「日本社会党大会に於ける幸徳秋水氏の演説」『幸徳秋水全集』第6巻、日本図
書センター、1968

「余が思想の変化」『幸徳秋水全集』第6巻、日本図書センター、1968

「日本社会党大会における幸徳秋水氏の演説」『幸徳秋水全集』第6巻、日本図
書センター、1968

「社会主義神髄」『幸徳秋水全集』第4巻、日本図書センター、1972

「進化説と社会主義」『幸徳秋水全集』第4巻、日本図書センター、1972

「世界革命運動の潮流」『幸徳秋水全集』第6巻、日本図書センター、1968

【単行本】

浅原健三『溶鉱炉の火は消えたり』新建社、1930

鈴木文治『労働運動二十年』、一元社、1931

近藤栄蔵「コミンテルンの密使」『世界評論』4(4)、世界評論社、1949年4月

- 労働省大臣官房労働統計調査部編『統計から見たわが国の労働争議』労働省大臣官房労働統計調査部、1951
- 大沢正道『大杉栄研究』同成社、1968（のち法政大学出版社、1971）
- 荒畑寒村『寒村自伝』上巻、岩波書店、1975
- 秋山清『大杉栄評伝』思想の科学社、1976（のち『秋山清著作集』第5巻に所収）
- _____『日本の反逆思想』現代思潮社、1960
- 松田道雄『現代日本思想大系16 アナーキズム』筑摩書房、1963
- 岡本宏『日本社会主義政党論史序説』、法律文化社、1968
- 近藤憲二『私の見た日本アナキズム運動史』、麦社、1972
- 安成二郎『無政府地獄』大杉栄櫟記、新泉社、1973
- 大杉栄研究編『大杉栄書簡集』海燕書房、1974
- 岡本潤『詩人の運命』、立風書房、1975
- 朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』第1巻、三一書房、1975
- 絲屋寿夫『日本の社会主義運動史』、法政大学出版社、1979
- 『大杉栄』For beginnersシリーズイラスト版、文・竹中労、イラスト・貝原浩、現代書館、1985
- 高津正道『旗を守りて』、笠原書店、1986
- 宮本正男『大杉栄とエスペラント運動』黒色戦線社、1988
- 荻野正博『自由な空——大杉栄と明治の新発田』新潟日報事業社出版部、1988
- 『大杉栄』Century books：人と思91、高野澄、清水書院、1991
- 松本伸夫『日本的風土をはみだした男——パリの大杉栄』雄山閣出版、1995
- 鎌田慧『大杉栄自由への疾走』岩波書店、1997
- 竹中労『断影大杉栄』筑摩書房、2000
- 宮崎学『神に祈らず——大杉栄はなぜ殺されたのか』飛鳥新社、2000
- 飛矢崎雅也『大杉栄の思想形成と「個人主義」』東信堂、2005
- 成田龍一『大正デモクラシー』岩波新書、2007
- 大杉豊『日録・大杉栄伝』社会評論社、2009

【全集・作品集所収】

- 和田久太郎「騒擾中の足尾」（二）『労働運動』第1次第3号1920年1月
- _____「集会の記」『労働運動』第2次第4号、1921年2月10日

辻井民之助「過去一年間に於ける京都労働運動の進化」『日本労働新聞』1921年1月16日

賀川豊彦「可愛い男大杉栄」『改造』1923年10月

水沼辰夫「大杉と日本の労働運動」『労働運動』第4次第2号、1924年3月

_____「『総連合』の決裂とその前後」『社会科学』第4巻1号、1928年2月

堺利彦「大杉と荒畑」『堺利彦全集』第4巻、中央公論社、1933

_____「大杉君と僕」『堺利彦全集』第4巻、中央公論社、1933

_____「大杉君の恋愛事件」『堺利彦全集』第4巻、中央公論社、1933

_____「日本社会主義運動史話」『堺利彦全集』第6巻、中央公論社、1933

_____「日本社会主義運動に於ける無政府主義の役割」『堺利彦全集』第6巻、中央公論社、1933

宮島資夫「社会主義運動の現状」『宮島資夫著作集』第6巻、慶友社、1983

_____「大杉栄論」『宮島資夫著作集』第6巻、慶友社、1983

荒畑寒村「『近代思想』と『新社会』」『荒畑寒村著作集』第4巻、平凡社、1976

_____「罣られた恋愛——大杉栄と神近市子」『荒畑寒村著作集』第5巻、平凡社、1976

_____「大杉栄逸聞」『荒畑寒村著作集』第5巻、平凡社、1976

_____「大杉栄の思い出」『荒畑寒村著作集』第5巻、平凡社、1976

_____「『近代思想』昔ばなし」『荒畑寒村著作集』第8巻、平凡社、1976

広津和郎「甘粕は複数か？」『広津和郎全集』第13巻、中央公論社、1974

_____「その夜の三人——大杉栄」『広津和郎全集』第13巻、中央公論社、1974

広津和郎「手帳」『広津和郎全集』第13巻、中央公論社、1974

秋山清「日本の反逆思想」『秋山清著作集』第2巻、ぱる出版、2006

_____「大杉栄と文学」『秋山清著作集』第4巻、ぱる出版、2006

_____「ロシア革命と大杉栄」『秋山清著作集』第4巻、ぱる出版、2006

_____「大杉栄とアナ・ボル論争」『秋山清著作集』第4巻、ぱる出版、2006

_____「その現代に生きるもの」『秋山清著作集』第4巻、ぱる出版、2006

_____「大杉栄評伝」『秋山清著作集』第5巻、ぱる出版、2006

_____「人間の自立精神の確立と行為」『秋山清著作集』第5巻、ぱる出版、2006

_____「「大杉栄の旅」小感」『秋山清著作集』第5巻、ぱる出版、2006

_____「大杉栄ノート」『秋山清著作集』第5巻、ぱる出版、2006

- _____「大杉栄とアナキズム」『秋山清著作集』第5巻、ぱる出版、2006
- _____「ロシア革命のアナ・ボル論争」『秋山清著作集』第5巻、ぱる出版、2006
- _____「山川均と大杉栄」『秋山清著作集』第5巻、ぱる出版、2006
- _____「夢二と大杉——大正の恋愛」『秋山清著作集』第7巻、ぱる出版、2006
- _____「大杉栄と荒畑寒村」『宮本正男作品集』第1巻、日本エスぺラント図書刊行会、1993
- _____「大杉栄研究の陥せいにふれて」『宮本正男作品集』第1巻、日本エスぺラント図書刊行会、1993
- _____「大杉栄、上海に行く」『宮本正男作品集』第1巻、日本エスぺラント図書刊行会、1993
- _____「大震災と大杉栄の回想」『労働運動史研究』第37号、日本評論新社、1963
- 山川均「マルクスとマルクス主義」『山川均全集』第2巻、勁草書房、1968
（『中央公論』1919年7月4日）
- _____「ソヴィエト政治の特質とその批判——プロレタリアン・ディクテーターシップとデモクラシー」『山川均全集』第2巻（『社会主義研究』1920年6月）
- _____「フランス労働組合運動の転機——右傾か左傾か」『山川均全集』第3巻（『解放』1920年8月）
- _____「革命家としてのレーニンとトロツキー」『山川均全集』第3巻（『改造』1920年9月）
- _____「議会運動とパーリャメンタリズム」『山川均全集』第3巻（『社会主義』1921年3月）
- _____「日本の組合運動史の一頁——友愛会東京連合会大会所見——」『改造』1921年7月
- _____「『量』から『質』に転じた組合運動」『太陽』1921年7月
- _____「社会主義と労働」『山川均全集』第4巻（『社会主義研究』1921年10月）
- _____「1921年の労農ロシア」『山川均全集』第4巻（『解放』1921年11月）
- _____「東調布手記」『山川均全集』第4巻
- _____「集中的組織と分散的組織」『山川均全集』第4巻（『前衛』1922年11月）

- _____「労働組合の進化と職分」『解放』1922年2月
- _____「盲滅法論—大杉氏に答う」『山川均全集』第5巻（『改造』1923年2月）
- _____「『労働反対』の話」『山川均全集』第5巻（『労働新聞』1922年12月20日）
- _____「大杉君と最後に会った時」『山川均全集』第5巻
- _____「総連合の決裂」『山川均全集』第4巻（『労働組合組織論』1924年）
- _____「イタリアの工場占領事件——マゾニス事件」『全集』3巻

【単行本所収】

- 内田魯庵「最後の大杉」（1923）『新編 思い出す人々』岩波文庫、1994
- 佐藤春夫「わが回想する大杉栄」（1923）『佐藤春夫全集』第11巻、講談社、1969
- 森戸辰男「大杉栄君の追憶—社会思想家としての彼の1面 おそるべき勉強家 大杉栄」（1924）『思想と闘争』改造社、1925
- 中西伊之助「大杉栄」『近代人の人生観』越山堂、1925
- 宇野浩二「思ひがけない人—野坂・大杉・幸徳」（1950）『思ひがけない人』宝文館、1957
- 堺利彦「日本社会主義運動史話」『日本社会主義運動史』河出書房、1954
- 西田勝「解説」『正義を求める心』青木文庫、1955
- 植村諦「大杉栄の思想と生涯」『光を掲げた人々—民主主義者の思想と生涯』新興出版社、1956
- 江口渙「大杉栄の生活と思想」『現代日本文学全集』第52、筑摩書房、1957
- 河上徹太郎「大杉栄」『日本のアウトサイダー』中央公論社、1959
- 岸本英太郎編『日本近代社会思想史』青木書店、1959
- 高見順「大杉栄—革命的労働運動の先駆者」（1962）『日本の思想家 中』朝日新聞社、1975
- 大沢正道「大杉栄論」（1960）『幸徳・大杉・石川』北日本出版社、1971
- 松田道雄「大杉栄のアナーキズム」『現代日本思想体系16—アナーキズム』筑摩書房、1963
- 多田道太郎「大杉栄」『20世紀を動かした人々』2、近代日本の思想家、講談社、1963

- 「生と反逆の思想家・大杉栄」『日本の名著46大杉栄』中央公論社、1969
- 船山信一『大正哲学史研究』こぶし書房、1965
- 丘浅次郎『丘浅次郎著作集5 進化論講話』有精堂、1968
- 松田道雄「クロボトキン・トロツキー・大杉栄」『世界ノンフィクション全集26』筑摩書房、1968
- 丘浅次郎『丘浅次郎著作集5 進化論講話』有精堂、1969
- 徳留徳「「冬の時代」の社会主義者たち」『大正デモクラシーの思想』芳賀書店、1967
- 小山仁示「「アナ」「ボル」の対立」『大正デモクラシーの思想』芳賀書店、1967
- 森山重雄「大正アナキズムと文学—大杉栄と荒畑寒村」『実行と芸術』塙書房、1967
- 大津山国夫「大杉栄とアナキズム」『大正の文学』現代文学講座第4巻、1967
- 飛鳥井雅道「ロシア大革命と大杉栄」（1967）『近代化と社会主義』晶文社、1970
- 池上徳三「大杉栄・伊藤野枝—無政府主義思想の展開」『講座日本の革命思想5 民主革命思想の胎動』芳賀書店、1970
- 松田政男「＜未完の革命家＞大杉栄」『叛逆への情熱』大和書房、1971
- 青地晨「大杉栄 反逆の眼」『反骨の系譜—権力に屈しなかった人々』評言社、1972
- 飛鳥井雅道「大正期のアナキズム—大杉栄を中心に」『日本近代化の研究・下』東京大学大出版会、1972
- 松沢弘陽『日本社会主義の思想』、筑摩書房、1973
- 大杉栄研究会編『大杉栄書簡集』海燕書房、1974
- 大原慧『幸徳秋水の思想と大逆事件』青木書店、1977
- 絲屋寿雄『日本社会主義運動思想史』法政大学出版局、1979
- 幸徳秋水、伊藤整 編 「二十世紀の怪物 帝国主義」『日本の名著—幸徳秋水』中央公論社、1979
- 鹿野政直「大杉栄」『日本の国家思想 下』青木書店、1980
- 山本左門『社会民主党とカウツキー』、北海道大学図書刊行会、1981
- 喜安朗『革命的サンディカリズム』、五月社、1982
- 鈴木正「大杉栄の「監獄大学」」『知の在野精神』勁草書房、1984
- 林尚男「反逆と生の拡充—大杉栄について」『冬の時代の文学』有精堂出版、

1982

山泉進「社会主義と社会進化論—幸徳秋水」『近代日本思想の軌跡—西洋との出会い』、北樹出版、1982

松永俊男『ダーウィンをめぐる人々』、朝日新聞社、1987

鈴木正節「大杉栄」『大正デモクラシーの群像』雄山閣、1988

尾崎秀樹「大杉栄」『風雲の異端児』日本のリーダー11、TBSブリタニカ、1983

上杉省和「大杉栄」『近代日本のジャーナリスト』御茶の水書房、1987

太田哲男「「個人主義者」大杉栄」大杉版『労働運動』ノート、『大正デモクラシーの思想水脈』同時代社、1987

大沢正道『個人主義—シュティルナーの思想と生涯』青土社、1988

清真人「大杉栄私記」『もう一つの思想家像』白石書店、1990

林尚男「大杉栄—反逆と自由を求めた革命家」『平民社の人びと』朝日新聞社、1990

梅森直之「大杉栄の精神史の1齣」『初期社会主義研究』第4号、初期社会主義研究会、1990

塩田庄兵衛編『幸徳秋水の日記と書簡』未来社、1990

太田雅夫『初期社会主義史の研究—明治30年代の人と組織と運動』新泉社、1991

相田慎一『カウツキー研究—民族と分権—』、昭和堂、1993

荻野富士夫「大杉栄論—唯心論的無政府主義への道」『初期社会主義思想論』不二出版、1993

小島直記「ある青春—荒畑寒村と大杉栄」『志—かつて日本にあったもの』新潮社、1995

曾田秀彦「大杉栄とロマン・ロラン」『民衆劇場・もう一つの大正デモクラシー』象山社、1995

三谷太一郎「大正社会主義者の「政治」観」『大正デモクラシー論』東京大学出版会、1995

——『大正デモクラシー論 吉野作造の時代』、東京大学出版会、1995

板垣哲夫「大杉栄の思想」『近代日本のアナーキズム思想』吉川弘文館、1996

久間清俊「カウツキーの社会民主主義観」『アドミニストレーション』5(4)、1999

鹿野政直『近代日本思想案内』岩波文庫、1999

鎌田慧「自由への疾走—大杉栄」『反骨のジャーナリスト』岩波新書、2002

- 鈴木貞美「日本近代における個人主義－生命観と関連させて」『「個人」の探求－日本文化のなかで』日本放送出版協会、2003
- _____『生命観の探究－重層する危機のなかで』作品社、2007
- 浅羽通明「大杉栄」『アナキズム』日本の名著46、ちくま新書、2004
- _____『アナキズム－名著でたどる日本思想入門』、ちくま新書、2004
- 綾目広治「有島武郎と大杉栄－本能、個性、社会」『倫理的で政治的な批評へ』皓星社、2004
- 竹山護夫「大杉栄－個人主義的・総合主義的・無政府主義」とその周辺」『大正期の政治思想と大杉栄』『竹山護夫作品集 第2巻』名著刊行会、2006

【雑誌・特集】

- 『改造』大杉栄追想、改造社、1923、11
- 『労働運動』大杉栄・伊藤野枝・追悼号、1924、3、（復刻版 黒色戦線社、1989、12）
- 『祖国と自由!』大杉栄追悼号、文明批評社、1925、9
- 『自由思想研究』大杉栄特集号、審美社、1960、7
- 『自由思想』大杉栄特集2、審美社、1960、10
- 『自由の前触れ』畚谷だより・特別号、大杉栄らの墓前祭実行委員会、1993、9
- 『初期社会主義研究』特集大杉栄、第15号、初期社会主義研究会、2002、12
- 『新日本文学』特集アナキズムの精神、第518巻第6号、新日本文学会、2003、9

【雑誌・研究誌掲載】

- 保住敏彦「社会主義者の社会ダーウィン主義観－第二インターの場合－」『経済論叢』（京都法学会）141(6)号、1988
- 安部磯雄「社会主義の運命を決すべき問題(1)」週刊『平民新聞』創刊号、1903、11月15日
- 久津見蕨村「社会主義者諸君に告ぐ」週刊『平民新聞』19号、1903、3月20日

- 田添鉄二「議会政策論」日刊『平民新聞』1907、2月14日
- 浮田和民「社会主義及び無政府主義に対する憲政上の疑義(一)」『太陽』、1911年3月号
- _____「社会主義及び無政府主義に対する憲政上の疑義(二)」『太陽』、1911年5月号
- 堺利彦「胡麻塩頭」『近代思想』、1914年9月号
- 生方敏朗「大杉栄氏を論ず」『新潮』1915・6
- 山川均訳「唯物論者の見たるベルグソン」『新社会』、売文社、1916年3月号
- 堀保子「大杉と別れるまで」『中央公論』1917・3
- 生田長江「堺利彦君と大杉栄君」『解放』1920・11
- 一社会部記者の手記「大杉殺し事件の暴露されるまで」『婦人公論』1923・11
- 林倭衛「仏蘭西監獄及法廷の大杉栄」『改造』1924・6
- 佐藤紅緑「巴里に於ける大杉栄」『文藝春秋』1930・11
- 田中惣五郎「大杉栄の労働運動—無政府共産主義運動」『労働評論』1950・1
2
- 遠藤祐「日本における「民衆劇論」」『ロマン・ロラン研究』1955・4、6
- 永松浅造「大杉栄・遺骨奪取事件」『文藝春秋』1955・10
- 江口渙「大杉栄・有島武郎・賀川豊彦」『中央公論』1955・11
- 水沼辰夫「大杉栄と労働運動」『自由思想』1961・1、2
- 大津山国夫「民衆文学論—大杉栄をめぐる」『国語と国文学』1961・10
- 河上民雄「大杉栄について」『労働運動史研究』1963・7
- _____「大杉栄「正義を求める心」」『エコノミスト』1965・10
- _____「大杉栄—社会主義運動に不朽の足跡を残す」『自由』1967・12
- 田丸太郎「大杉栄試論」『歴史評論』1963・12
- 船山信一『大正哲学史研究』こぶし書房、1965
- 岩村登志雄、「在日朝鮮人と日本労働者階級」『アジア・アフリカ講座』第三卷、勁草書房、1965
- 佐藤勝「大杉栄—その文芸活動把握の視点」『国文学解釈と教材の研究』1965・2
- 安谷寛一「晩年の大杉栄」『展望』1965・9
- 丘浅次郎『丘浅次郎著作集5 進化論講話』有精堂、1968
- _____『丘浅次郎著作集5 進化論講話』有精堂、1969
- 三浦精一「大杉栄とベルグソン」『黒の手帖』1969・12、1970・6
- 諸伏恒「大杉栄の革命理論に関する私論」『黒の手帖』1972・5

- 松沢弘陽 『日本社会主義の思想』、筑摩書房、1973
- 遠丸立「極左ロマン主義と文学」『国文学解釈と鑑賞』1973・11
- 大杉栄研究会編 『大杉栄書簡集』海燕書房、1974
- 森山重雄「大杉栄について」『日本文学』1974・6
- 秋山清 外「人間・大杉栄の全体像」『季刊ピエロタ』1974秋季号
- 松下芳男「裸の大杉栄」『中央公論』1975・9
- 大原慧 『幸徳秋水の思想と大逆事件』青木書店、1977
- 吉田精一「評論の系譜—大杉栄」『国文学解釈と鑑賞』1977・2、3
- 米沢幸三「大杉栄のユートピア思想」『無政府主義研究』1977・12
- 大津山国夫「大杉栄と白樺派は結びつくか」『国文学解釈と教材の研究』1978・9
- 糸屋寿雄 『日本社会主義運動思想史』法政大学出版局、1979
- 山本左門『社会民主党とカウツキー』北海道大学図書刊行会、1981
- 喜安朗 『革命的サンディカリズム』五月社、1982
- 山泉進「社会主義と社会進化論—幸徳秋水」『近代日本思想の軌跡—西洋との出会い』、北樹出版、1982
- 伊藤信吉「二人の革命家像—大杉栄・荒畑寒村を主体とする中篇作品」『早稲田文学』1985・6
- 松永俊男 『ダーウィンをめぐる人々』朝日新聞社、1987
- 大沢正道 『個人主義—シュティルナーの思想と生涯』青土社、1988
- 梅森直之 「大杉栄の精神史の一齣」『初期社会主義研究』第4号、初期社会主義研究会、1990
- 塩田庄兵衛編 『幸徳秋水の日記と書簡』未来社、1990
- 太田雅夫 『初期社会主義史の研究—明治30年代の人と組織と運動』新泉社、1991
- 相田慎一『カウツキー研究—民族と分権—』、昭和堂、1993
- 坂本多加雄「「日本の時間」と「世界の時間」—大杉栄における「瞬間の充足」」『国際交流』61号、1993・4
- 三谷太一郎『大正デモクラシー論 吉野作造の時代』、東京大学出版会、1995
- 鎌田慧・森まゆみ「現代において大杉の自由な精神を考える」『季刊へるめす』1997・5
- 梅森直之「名あて人なき民主主義—大杉栄における「生命」と「主体」」『新評論』1998・3
- 久間清俊「カウツキーの社会民主主義観」『アドミニストレーション』5

(4)、1999・3

梅森直之「大杉栄の手紙」『国文学 解釈と教材の研究』2000・11

——「身体感覺的社會主義のゆくえ—大杉栄のアナーキズムと脱植民地主義の言説」『現代思想』2004・5

林淑美「〈心の革命〉と〈社会の革命〉—夏目漱石と大杉栄のベルグソン」『文学』2000・4

菅本康之「大杉栄、あるいは囚われの人びと」『国文学 解釈と教材の研究』2001・9

大和田茂「大杉栄、叛逆精神とメディア戦略」『国文学 解釈と教材の研究』2002・7

大杉豊「響きあう大杉栄とB・ラッセル」『沓谷だより』2003・8

田中ひある「反グローバル化運動におけるアナーキズム」『現代思想』VOL32-6、青土社、2004

宮山昌治「大正期におけるベルグソン哲学の受容」『人文』第4号、学習院大学人文科学研究所、2006

【翻訳書・外国文献】

Ely, Richard.T. “Socialism. An Examination of its nature, its strength and its weakness, with suggestions for social Reform”, Thomas Y. Crowell & co.; New York, 1900.

クロポトキン 「ベルグソン氏の科学に対する反抗」『クロポトキン全集』第5巻、春陽堂、1929

ルドルフ・ロッケル著、新居格訳 『クロポトキン全集』3巻、春陽堂、1930

トマス・ハクスリ著、上野景福訳 『進化と倫理』育生社、1948

カル・マルクス「国際労働者協会創立宣言」『マルクス・エンゲルス全集』第16巻、大月書店、1966

エンゲルス「カール・マルクスの葬儀」『マスキュス・エンゲルス全集』19巻、大月書店、1968

——「空想から科学への社会主義の発展」『マスキュス・エンゲルス全集』19巻、大月書店、1968

——「反デューリング論」第2版序文、『マルクス・エンゲルス全集』21巻、大月書店、1968

- Arthur M. Lewis *Evolution, Social and Organic*, Charles H. Kerr & Company : Chicago, 1970.
- ブルードン著、長谷川進・江口幹訳『所有とは何か』31書房、1971
- Leszek Kolakowski, *Main Currents of Marxism*, vol. II, Clarendon Press ; Oxford, 1978.
- ベルクソン著、真方敬道訳『創造的進化』岩波書店、1979
- F. G. ノートヘルファー著、竹山護夫訳『幸徳秋水ー日本の急進主義者の肖像』福村出版、1980
- ピーター・ボウラー著、鈴木善治訳『進化思想の歴史』下巻、朝日新聞社、1987
- 森川莫人・高橋幸彦訳『アナキズム読本』アナキズム編纂委員会、2006
- 鄭泰信「活眼」『共済』第2号、1920年2月
- 李星泰「クロボトキン学説研究」『新生活』7号、1922年7月
- _____「社会生活の進化」『新生活』2号、1922年3月
- _____「適者の生存」『新生活』3号、1922年3月
- _____「現代文化の方向」『新生活』9号、1922年3月
- 廉尚燮「至上善の為に」『新世界』7号、1922年7月
- 鄭栢「人間所有と叛逆」『新生活』8号、1922年8月
- 장복성『조선공산당 파쟁사』、돌베개、1983
- 김산 역, 님 웨일즈『아리랑』, 동녘, 1984
- 김준엽・김창순『한국공산주의 운동사』2、청계연구소、1989
- 조봉암「내가 걸어온 길」『조봉암과 진보당』, 한길사, 1991
- 다니엘 게랑『현대 아나키즘』하기락 역, 신명, 1993
- 권희영「조선노동공제회와 「共済」」『정신문화연구』16권2호(통권51호), 정신문화연구원, 1993
- 김은석「Godwin 아나키즘의 철학적 기초」『歴史학보』143집, 歴史학회, 1994
- 박용규「일제하 좌파 언론인에 관한 연구」、한국언론학회 가을 정기 학술 발표회 논문집、1994
- 임경석「서울과 공산주의 그룹의 형성」『역사와 현실』28号、1998
- 조세현『동아시아 아나키즘, 그 반역의 역사』책세상, 2001
- 이호룡『한국의 아나키즘』、지식산업사、2001
- 장 프레포지에, 이소희 외 옮김,『아나키즘의 歴史』이룸, 2003
- 박종린「김윤식社會葬 찬반논의와 사회주의 세력의 재편」『역사와 현실』

、2003

_____ 『일제하 사회주의 사상의 수용에 관한 연구』, 연세대학교 박사학
위논문, 2006

김은석 『個人主義적 아나키즘』 우물이 있는 집, 2004

클린 위드 『아나키즘, 대안의 상상력』 김정아 역, 돌베개, 2004

박홍규 『아나키즘 이야기』 이학사, 2004

이경훈 「『學之光』의 매체적 특성과 日本의 영향1」 『대동문화연구』,
2004

구승희 외 『한국아나키즘100년』 이학사, 2004

김민환 「일제하 좌파 잡지의 사회주의 논설 내용 분석」 『한국언론학보』 49
卷1号, 2005

조세현 「동아시아 3국에서 크로포트킨 사상의 수용」 『중국사연구』, 중국
사학회, 2005

전명혁 『1920년대 한국사회주의 운동연구』, 선인, 2006

방영준 『저항과 희망 아나키즘』 이학사, 2006

김명환 『영국사회주의의 두 갈래 길』 한울아카데미, 2006.

_____ 『영국의 위기 속에서 나온 민주주의 - 길드사회주의 : 노·사·
민합의 민주주의(1900~1920년대)』 혜안, 2009.

장신 「1924년 동아일보 개혁운동과 언론계의 재편」 『역사비평』, 2006

전상숙 「박열의 무정부주의와 민족의식」 『동양정치사상사』, 2007

이태훈 「1920년대 초 신지식인층의 민주주의론과 그 성격」 『역사와 현
실』 67号, 2008

최인숙 「염상섭 문학에 나타난 ‘노라’와 그 의미」 『한국학연구』 제25
집, 인하대학교 한국학 연구소, 2011

최병구 『1920년대 프로문학의 형성과정과 ‘미적공통성’에 관한 연구』,
성균관대학교대학원 박사학위논문, 2013